

第4節 弥生時代

第6面 (図73) 基本的に第5b層を除去し、検出されるのが第6面である。第5b層は、調査区東半高まり522以東では上半が粗粒の堆積、下半が細粒の堆積で、同高まりのすぐ東側には分厚い砂層の堆積が見られた。これにより、第5面の微高地が形成されるのだが、それまで堆積していた第5b層の細粒の堆積物も含めて、第7面までが挟られている。高まり522以西から調査区西半の高まり523までは、最下部に細粒の堆積層が見られ、その上層は基本的に粗粒の堆積でほぼ同様の堆積である。この第5b層のうち、先述の最下部の有機物を含んだ細粒の堆積層を除去して検出されるのが第6面である。なお、先述の高まり部分では第5b層がほとんど存在しなかった。面の高さは、T.P.0.30～1.46m。当面では、先述の高まりのほか、東半では畦畔が、西半では溝や高まりが検出された。

第6面は、調査区東半では高まり522を挟んだ両側に水田関連遺構が見られ、同西側は北に低まる地形であり、全体的に低地部である。調査区西半は高まり523を境に大きく二つに分けて考えることが可能である。高まり523東側は、調査区東半の高まり522西側の水田面に連続する低地部と、高まり523北東の第6b層の浅黄～オリーブ(5Y7/4～6/6)極細砂(図7-120)によって形成された自然地形の弱い微高地部分からなっている。また、同西側は全体的に微高地にあたり、高まり523と平行方向に掘削された溝537・538と、その西側に交錯するように溝539・540が掘削されている。

第6層は、東半では粘質であるが、西半ではオリーブ黒～緑黒色(10G3/1～2/1)粘土～シルト層(図5-33・42、図6-26、図7-98など)で、下層の極細～細砂(図6-27など)を攪拌しているため砂質の層である。

水田 高まり522を挟んだ東西では畦畔が検出され、それぞれ水田域であったと考えられる。高まり522東側は第5b層の氾濫堆積物により大きく挟られており、遺構が分断されている。

畦畔524～531は高まり東側での検出である。畦畔525は境にして東西に0.15m程度のレベル差が見られ、東側が高い。北側では畦畔524が北東へ派生する。畦畔526も畦畔525に接続するが、この畦畔を境にした南北でも6cm程度のレベル差が見られる。畦畔526の南側では溝状の落ち込みが見られたが、西に向かい畦畔525・526とも低まり、そのまま自然地形の低まりに流れ込むものと思われるが、第5b層により攪乱を受け、明瞭には検出されなかった。畦畔527・528・529で囲まれた水田区画は第5b層のシルト層を除去した結果、中央に向かい10cm程窪んでいたことから、水田としての利用には不向きと思われる。水溜め状の遺構であろうか。畦畔530・531はその間が溝状であり、北から南への流れが想定され

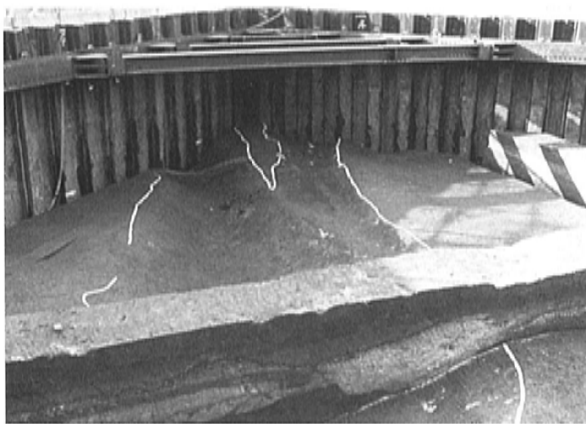


写真95 溝539・540 (東から)



写真96 溝537 (南東から)

る。なお、これらの箇所は第6面が第5b層により削平されており、遺構面の残存度は極めて悪い。畦畔524・525より北西以外は畦畔の検出はなされたものの、畦畔で囲まれた水田の形状が不定形であり、削平されているにしても、水田を行うには地形の傾斜が急なように思える。また、溝状の落ち込みが、畦畔530・531間や畦畔526南側で検出され、それぞれ北からと東からの水の流れが想定されることから、高まり522以東の区画は各所からの排水の終着点であったと考えておきたい。ただし、畦畔527・528・529で囲まれた水田区画は水溜め状の遺構の可能性を考えたが、それらの水を溜めて、さらに南側へ給水するための施設であった可能性も考えられる。基本的に高まり522以東の区画は東から西へ低まっている。高まり522のすぐ東側では、第5b層により遺構の検出はなされなかったが、この地形や高まり522東肩が生きていることを考慮に入れると、この部分に水路が流れていた可能性は高い。第7層も残存しないのだが、第8層はこの部分が低まっている。この低まりが第7面にも踏襲されたと仮定すれば、第6面ではさらに踏襲された自然地形そのものに水を流し込んだか、人為的に溝を開削してそこに水を流し込んだのではないだろうか。周辺の微地形が不明ゆえに水の流れを逆に言及している可能性もあるが、今回の調査では以上のように推定しておく。この点は、今後展開する周辺調査の成果で修正されるべき点である。

畦畔532・533は高まり西側での検出である。畦畔532は高まり522から派生するが、南西延長が側溝に切られる。幅約0.9m、高さ3～10cm。畦畔533は南東延長がやはり側溝に切られる。幅0.6～0.8m、高さ2cm。畦畔532北側には高まり522から派生する畦畔状の舌状高まりが見られる。遺構番号は付加しなかったが、畦畔としての役割を果たしていたと考えられる。なお、以北は低まりに当たる。畦畔533東側には、第7面段階には既に形成されていた自然地形の高まりが見られる。高まり上は凸凹であり、中には溝状の落ち込みも見られたが、検出範囲も狭く、他の遺構との関連性も明らかでないことから、全て自然地形と判断した。なお、この自然地形の高まりと畦畔533間は溝状を呈する。これも、遺構番号を付加しなかったのだが、南に展開すると考えられる水田域から北側の当調査区で検出された低まりへの排水路と考えられる。

溝 溝は調査区西半でのみ6条検出された。溝535は、高まり523東裾にほぼ平行に並んだ長さ2.5m、幅0.5m、深さ0.1～0.13mの溝である。埋土は、オリブ灰～暗オリブ灰色(2.5GY4/1～3/1)粘土～極細砂。溝535埋土中からの遺物の出土はないが、溝北東端部南側から土器がまとまって出土している(図74、写真99)。土器は、胴部破片ばかりで図化できなかったものの、甕口縁部片1点を含むが、他は同一個体の壺であると思われる。甕は短い口縁で、端部外面に面をもつ。ただし、端部の拡張は見られず、Ⅱ様式の範疇に収まるものと考えられる。他の壺片は8条の櫛描直線文を2段以上施すもので、



写真97 第6面土器出土状況 (南から)



写真98 第6面直上土器出土状況 (西から)

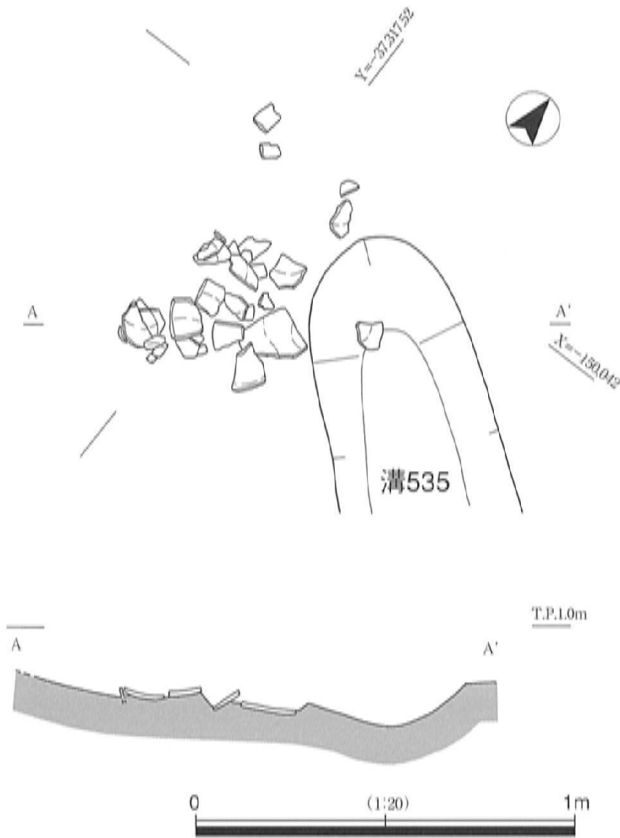


図74 溝535付近土器出土状況 (S=1/20)

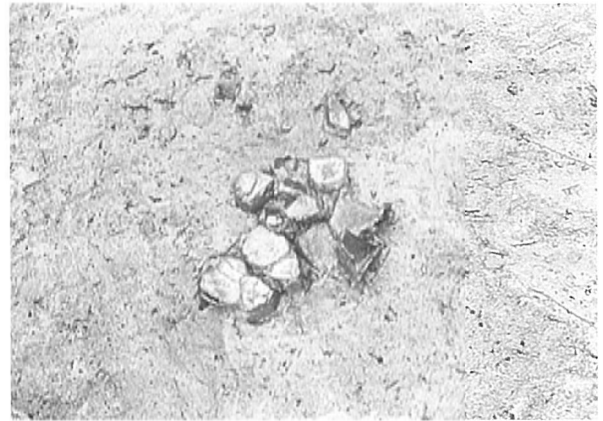


写真99 溝535付近土器出土状況 (南東から)

残存部では2段確認できるのみである。なお、その下段には直線文上に扇形文が施される擬似流水文である。Ⅱ様式後半か。これらの遺物は、溝535に直接関連する可能性は低いものの、第6面精査中に出土した資料であり、第6面の時期を考える上で重要な資料と考えられる。

溝536は、高まり523の東側に平行に掘削された検出長約13m、幅0.7~2.0m、深さ8~37cmの溝である。埋土は第5b層オリーブ灰~暗オリーブ灰色

(2.5GY4/1~3/1) 粘土~極細砂(図5-24、図6-21~23)。当初は氾濫堆積層による面廃絶以降の挟れの可能性を考えたが、土層観察用断面を検討した結果、第6層が落ち込んでいることから当面の遺構と判断した。

溝536出土遺物(図76) 弥生土器片52点、土器転用土製円板1点が出土し、うち2点を図化した。464は甕底部。外面は全体的に剥落。内外面とも縦方向を基調としたミガキが見られる。底部内面には指頭圧痕が残る。河内形甕か。Ⅱ様式前半と思われる。466は土器転用土製円板。

溝537は、先述の高まり523西側に平行に走る掘削された溝である。第7面段階に掘削された溝550を踏襲している。溝は、第5b層下部の粘土~シルトの堆積後、当調査区全域を覆うような大規模な極粗砂を中心とする厚い堆積層により埋没している。

溝537出土遺物(図75、写真96) 弥生土器片110点、サルノコシカケ1点、サヌカイト片1点が出土した。452は大型の鉢。体部外面は斜め方向の原体が粗いハケのち、横・斜めミガキで、口縁部直下にはハケが残存する。ミガキの密度は上半は密であるが、下半はやや粗である。内面は下から順に左上がりのハケで、口縁部内面にも同一原体によるハケが見られ、のち外面とも横ナデ。口縁端部は凹線状を呈するが、特に拡張はしない。胴部には焼成後外面からの穿孔が見られる。Ⅱ-3様式か。453は甕。内外面とも横ナデのち、粗い横ミガキ。外面は煤化。口縁端部は弱く面を持つ。頸部の屈曲は鈍い。Ⅱ様式後半か。454は甕。外面に左上がりのハケが見られるが、ミガキの可能性もある。内面は左上がり方向のハケのちナデ。口縁部は強い横ナデで、端部はシャープな面を持ち下垂する。赤っぽい胎土。頸部の屈曲が鈍く、体部径が口径以下であることからⅡ様式後半としておく。455は広口壺。外面は縦ハケで、口縁部付近はのち横ナデ。内面は横・斜めハケで、口縁部は別の粗い原体を用いた横ハケ。口縁端部は拡

張し、横ナデのち上端と下端に刻み目を施す。なお、頸部以下には6条の櫛描直線文が見られる。胎土は白色系。Ⅱ様式後半か。456は広口壺。全体的に摩滅著しいが、外面には縦方向の板状工具による工具痕が、内面には左上がりのハケが一部に見られる。口縁は上部に拡張し、端部は上に面を持ち、上端と下端に刻み目を施す。Ⅲ様式前半か。457は甕。体部外面は縦ミガキ、内面は細かい縦ミガキのち、斜めミガキ。口縁部は強い横ナデを施し、強く外反する。端部は丸くおさめる。全体的に分厚い。河内形甕。胎土は生駒西麓産と思われるが、さほど暗い色調ではない。Ⅱ様式前半か。458は壺。内外面とも摩滅著しく調整不明。白っぽい胎土。459は壺か。外面は縦ミガキ、底部外面もミガキ。内面は横ハケのちナデ。460は打点の欠損したサヌカイト剥片。以上のように、溝537出土土器はⅡ様式からⅢ様式前半までの遺物が出土しており、これが溝の時期を示すものであろう。

溝538は溝537西肩の平坦面に、ほぼ並行に調査区の南東～北西に掘削された溝である。幅0.35～1.5mで、深さは2～16cm程度。底部のレベルは、北西端がT.P.1.04mで、南東端がT.P.0.80mである。出土遺物はない。

溝539・540（図77、写真95・100）は、調査区西端から東に延びる溝である。図77では第7面564以来の埋没過程を示している。なお、図示していないが土層断面の観察から、第6面のある段階には両者が同時並存していたものと考えられる。しかし、溝539が先に埋没し、その後溝540は粘性の強い堆積物により埋没した後、調査区全域で見られる粗粒の堆積物によって抉られ埋没している。

なお、第6面とは関係ないのだが、図77について若干補足する。この部分では、X=-150,050ライン及びY=-37,330ラインのメイン断面においては確認されなかったが、第7層が上下に分離可能された（図77-4・5）。その間（同5上面）に遺構（同6・7を埋土とする）が見られることは注目される。

この溝540の東肩部から複数個体の土器がまとまって出土している（図78、写真101）。この資料全てが接合されたのではないが、その1点が図76-461である。

溝539・540出土遺物（図76） 弥生土器片134点が出土した。調査段階で両者の遺物が混在してしまっただが、多くの遺物は溝540に伴う可能性が高い。461は大型の甕。体部中央部が欠落するが、口縁部と底部は同一片と考えられる。外面は縦ミガキを基調とし、上部にはそれ以前の横ミガキが、底部付近にはそれ以後の斜めミガキが、それぞれ見られる。また、口縁部外面には横ミガキ以前の板ナデが見られる。内面は、口縁部まで横ミガキが見られる。口縁部は巻き込むように外反するが、頸部の屈曲は鈍く、端部は明瞭な面を持たない。口縁が水平方向に外反することから、Ⅱ様式後半としておく。462は甕。口縁部は内外面ともナデで、端部は拡張し、下端には刻み目を施す。体部外面は縦ハケ、内面は斜めハケで、頸部の屈曲はシャープである。Ⅲ様式前半。463は細頸壺で溝540出土。外面には10条の櫛描直線文が4段見られるが、原体を一周させた際の接合部はいずれも稚拙。なお、櫛描以前の縦ハケが僅かに見られ、口縁部は強い横ナデ。内面はナデ。生駒西麓産か。口縁部付近まで文様が見られ、Ⅱ-3様式。465は甕底部で溝540出土。摩滅のため調整は不明瞭だが、内面にはハケが僅かに見られ、外面下部には指頭圧痕が見られる。

以上のように、溝539・540出土土器はⅡ様式からⅢ様式前半までの遺物が出土しており、これが溝の時期を示すものであろう。なお、確実に溝539に伴うと断定できる資料はないが、溝540に伴う遺物から時期を以下のように推定しておく。まず、溝540の最古段階の時期として、溝底から出土した図76-461が当てられ、Ⅱ様式後半。また、463もほぼ同一レベルからの出土であり、時期はⅡ-3様式。このことから溝540の時期の一点をⅡ様式後半におくことができる。両者が同時並存したのも、おそら



図75 溝537 出土遺物

くこの時期であろう。

土坑・ピット 調査区西半の微高地上でのみ検出された。土坑541・542、ピット543は溝536掘削後の検出である。土坑541は北西を側溝に切られるが、楕円形の土坑。埋土は溝536と同様だが、全体的に第6b層の細砂が混じる。出土遺物は、弥生土器甕口縁端部片と石各1点ずつのみ。甕は口縁部に明瞭な面を持ち、わずかに拡張傾向が見られる。胎土は赤っぽい。Ⅱ様式後半か。土坑542は直径0.55～0.6mの円形。ピット543は直径45cmの円形。いずれも痕跡での検出で、埋土は溝536と同様。遺物の出土はない。

土坑544は高まり523上での検出。長軸4.0m、短軸2.5m、深さ0.29mの楕円形。埋土は西接する溝537の最上部と同様の層であり、ラミナが見られる極細砂である。出土遺物はない。

土坑545は微高地上で検出され、北西を側溝で切られる。微高地上で見られる溝と同様の埋土。出土遺物は弥生土器片10点のみ。いずれも摩滅著しいが、1点7条の櫛描直線文が3段見られる破片が見られた。いずれも中期前半の所産と考えられるが、詳細な時期は不明。

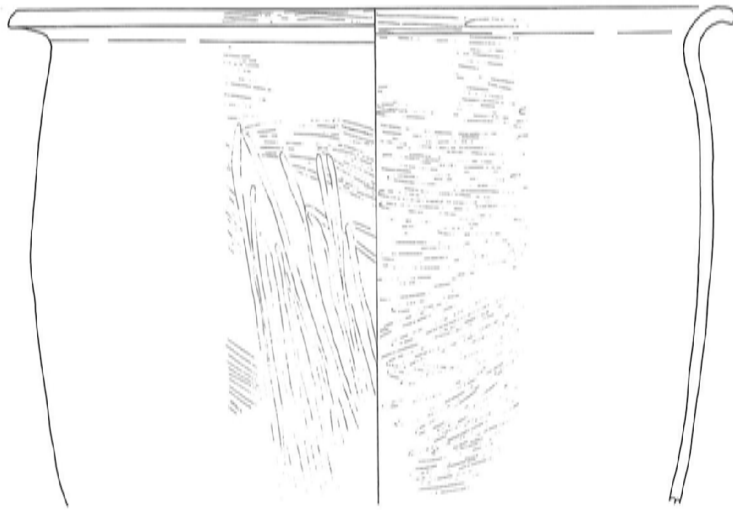


図76 溝536・539・540 出土遺物

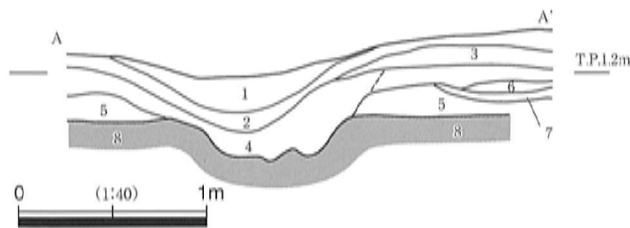


図77 溝540 断面図 (S=1/40)

- 1 75Y4/1 灰色 粘質シルト シルトと有機物層の互層
- 2 10Y3/1 オリーブ黒色 細～中砂・シルト やや粘性有り
- 3 7.5Y3/1 オリーブ黒色 中砂混じり粘質シルト 下ほど砂質
- 4 10Y2/1 黒色 細～中砂混じりシルト
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色のシルトブロック混じる
- 5 2.5GY2/1 黒色 中～粗砂混じりシルト
有機物・シルトブロック混じる (第7層)
- 6 10Y4/1 灰色 中～粗砂混じりシルト (第7面遺構埋土)
- 7 N1.5/ 黒色 炭化物層 (第7面遺構埋土)
- 8 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 細砂 (第7b層)

高まり 高まりは調査区の東半と西半で各1基ずつ検出された。

高まり522は第6b層の自然堆積を利用し、その上部に盛土を施して形成された高まりである(図79、写真102～107)。以下で、簡単に第7面以来の高まり形成について整理しておく。まず、第7面直上からしばらくは粘質シルト～極細砂のような湿地性の堆積がみられる(図79-37～39)。その層中には弱く土壌化している層もあり、一定期間、安定した層であったと考えられる。その後、明瞭な砂層が堆積する(同35・36)。さらに上層には、断面観察で連続しては見られない砂層が粘質シルト中に混じって見られる段階がある(同34)。基本的に、これ以降はしばらくその不安定な段階と、上層が土壌化する段階が繰り返される。まず、北へ向かい不明瞭になるものの、攪拌層が34上に見られる(同33)。さらに再び粘質シルトの堆積が見られる(同32)が、34との層界は不明瞭である。この段階に南側にのみ、砂層の堆積が見られ(同31)、上部が土壌化する(同30)。その後、上面には、わりあい安定した段階が見られる(同29)。この層は、土壌化の度合いが弱いものの、比較的明



図78 溝540内土器出土状況 (S=1/20)



写真100 溝540断面 (東から)



写真101 溝540 土器出土状況 (南東から)

瞭に見られる。なお、この段階には、断面でしか確認されず、遺構番号は付与していない遺構が、高まり522北端に掘削される (同17~28)。この遺構の埋土はそのほとんどがラミナの見られる自然堆積層であることから、溝の可能性も考えたが、断面以外では確認されなかったことから土坑と判断した。この土坑からは遺物の出土はなく、掘削意図は不明である。さて、その後、再び粘質シルトの堆積が見られ (同16)、上部には一部にのみ安定した土壤化層が確認される (同15)。16の供給と層位的には同時と思われるが、層相が異なり、上層の9と似るため時期差と考えた砂層がその後堆積し (同13・14)、

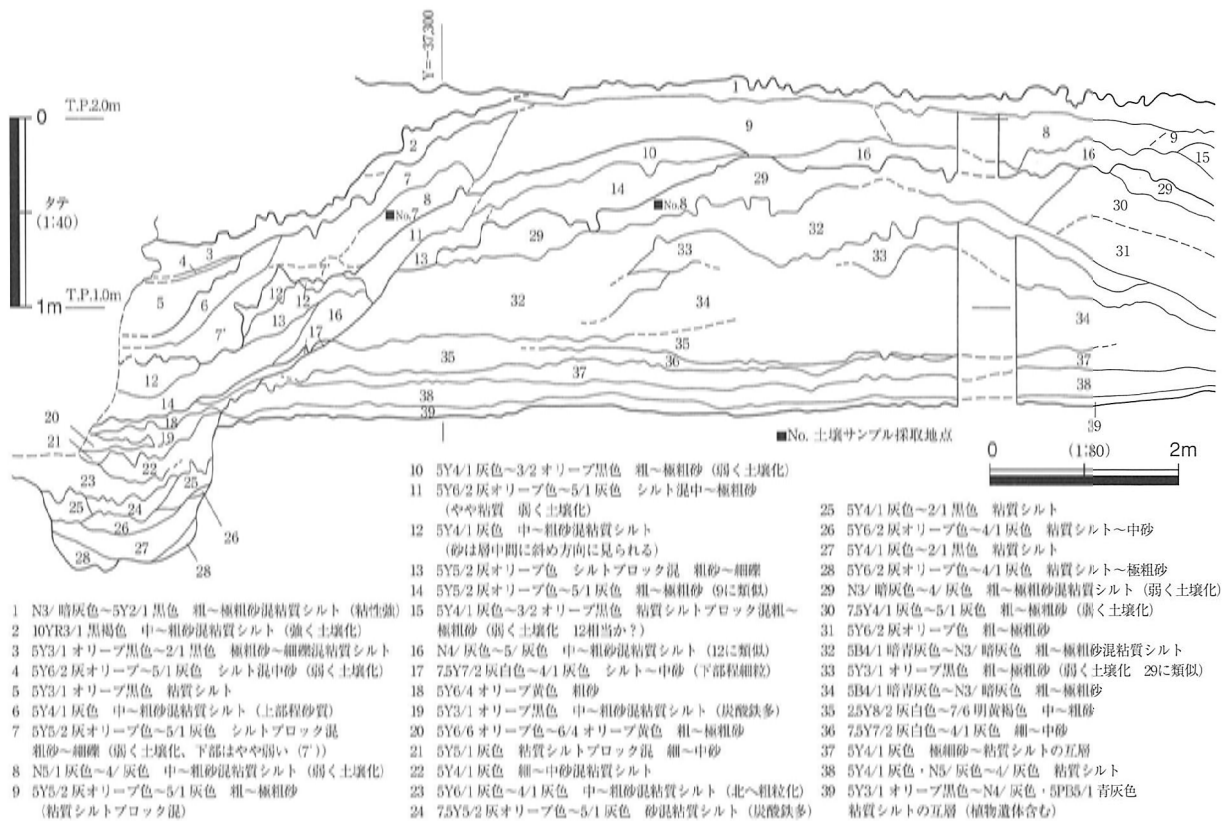


図79 高まり522 断面図 (Y=-37,280ライン) (タテS=1/40 : ヨコS=1/80)



写真102 高まり522断面北側上半 (南西から)



写真103 高まり522断面中央上半 (北西から)



写真104 高まり522断面中央下半 (北西から)

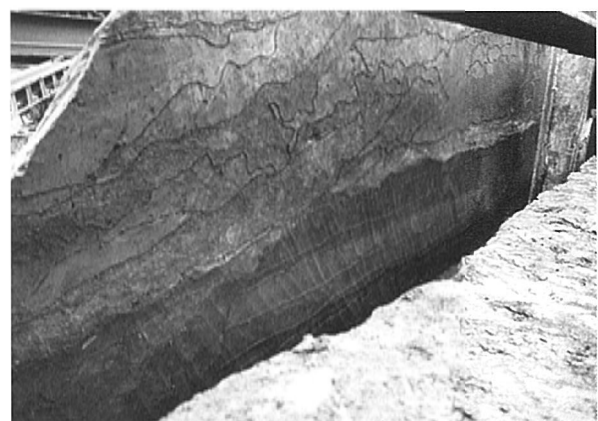


写真105 高まり522断面中央下半 (北西から)



写真106 高まり522断面南側上半（西から）



写真107 高まり522断面南側下半（北西から）

上部には安定した土壌化層が形成され（同10）、肩部にはその上下に、複数枚の土壌化層が見られる（同11・12）。さらに上層には砂層が見られ（同9）、肩部には土壌化層が見られる（同6～8）。さらに肩部の上層には土壌化した層も含めた粘質シルトや砂が見られ（同4・5）、上部に第6層が形成される（同2・3）。

このように、第6b層堆積以後、高まり522中には第6面までに3時期ほどの安定した段階がある。これらがどの程度安定していたのかは、出土遺物がなく長期間にわたるのか、短期間の盛土の単位なのかも不明である。また、層序で記したように、高まり522下部に見られる第6b層のシルトを中心とした自然堆積層が、調査区のほかの場所では見られない。その際に記したように、調査区一帯に本来堆積していたものが、この高まりを形成する際に使用された可能性をここでは推定しておく。なお、盛土層の大部分は砂質であるが、この断面中では下部の第6b層はシルト～粘質である。しかし、それらの中にも少なからず砂が見られ、他所ではこの砂層が明瞭に見られる箇所もあったのかもしれない。それらを混ぜて、盛土として使用したものと考えられる。なお、高まり522から弥生土器片8点、土器転用土製円板1点、図80-471のスクレイパーが出土しており、一辺の背面側を中心に調整を施し、刃部に整形している。

なお、この盛土部分は、先述のとおり肩部は第5b層の砂層により、上部は第5層段階にそれぞれ削平されている。また、当初断面観察において誤認があり、平面検出の際、盛土部分を掘削してしまった部分がある。そのため、図73では高まりの肩部に段差があり、点線で表現している。

高まり523は南東～北西方向の高まりで、上幅約3.5～5m、左右の平坦面から約0.6mほどの高さを持っている。なお、高まりの上部は第5層段階で若干削平されている。この高まりは、後述する第7面高まり553を基本的に踏襲するが、最上部は第6面段階に削平されている。高まり東側は第7面が第6b層の粘土～シルト層により覆われた後に形成されており、盛土は見られない。一方、高まり西側は第6面高まり形成段階に盛土をし、拡張している様子が看取される（図6）。また、高まり上部には土坑544が掘られており、これについては後述する。

高まり523出土遺物（図80） 弥生土器片23点、サヌカイト剥片3点が出土した。467は甕。外面は上半が縦ハケ、下半が縦ミガキ。内面は上半が横ミガキ、下半がナデ、のち右上がりの粗いハケ。口縁部は強い横ナデ、端部は若干拡張し面を持つ。外面頸部以下は煤化、上が顕著。Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭か。468は壺。外面は左上がりのミガキ。内面は横左上がり方向のハケのちナデ。Ⅱ様式か。469は甕。外面は縦方向の調整が見られるが不明瞭。板ナデか。内面はハケ。体部下には焼成前の穿孔が見られ

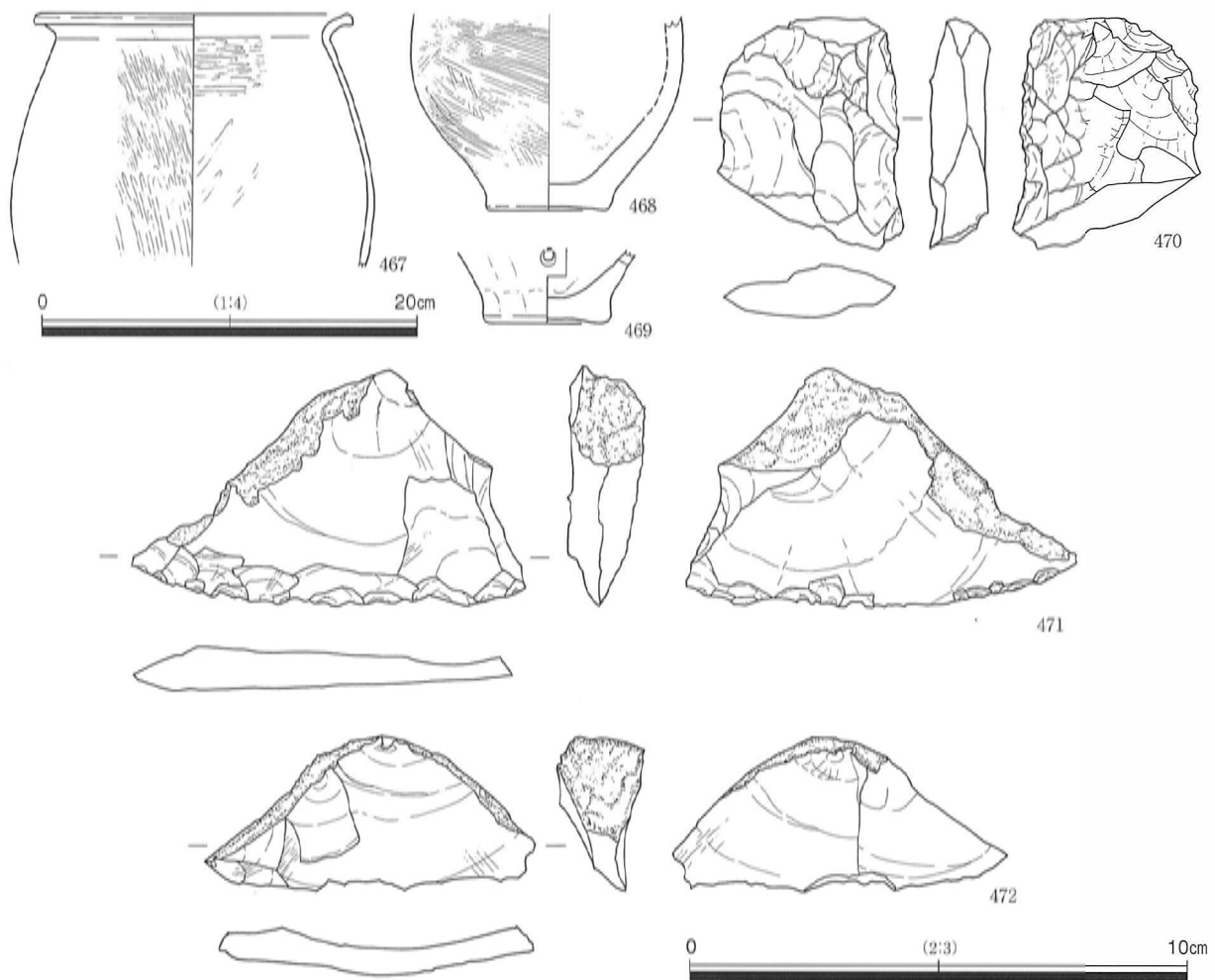


図80 高まり523 出土遺物

る。生駒西麓産か。

470は両面調整石器。両側縁から加工を行い、断面が凸レンズ形。下端部が折れているので製作途中の失敗品か。472はサヌカイト剥片。打面に自然面が残っている。

なお、高まり523以東は、溝536を挟み、一段下がった平坦面の微高地が北東にのび、そこから南東へ70cm程の比高差で低地部が広がる。この低地部では第6・7層が近接し（図7・8）、高まり523以西と対照的な様相である。この低地部は高まり522北東側で検出された低地部に連続するものであり、積極的な土地利用は行われていなかったものと考えられる。高まり522・523と周辺の遺構を考えた場合、両高まり間の一部で水田遺構の検出があるものの、基本的に低まった不安定な低地であるといえる。高まりは、この不安定な低地を周囲と区画するために築かれたものと考えられる。したがって、基本的な景観は、高まり523西側が集落域東端、高まり522東側が水田域、その間の低地と考えられる。

第6層出土遺物（図81） 第6層からは、弥生土器片248点、サヌカイト製の石器・剥片4点が出土した。

473は大型の鉢。口縁端部は外傾する面をもち、平坦面が見られるが、摘み上げや垂下は見られない。口縁部はナデ、体部外面は縦ハケで、頸部に横方向の強いハケが見られる。内面は横ナデ。頸部の屈曲は鈍いが、大型品である点から時期はⅢ-1様式か。474は淀川水系からの搬入品の壺（若林邦彦氏の教示による）。口縁端部を平坦に整形し、口縁内面に6条の、端部に7条の櫛描波状文をそれぞれ施す。

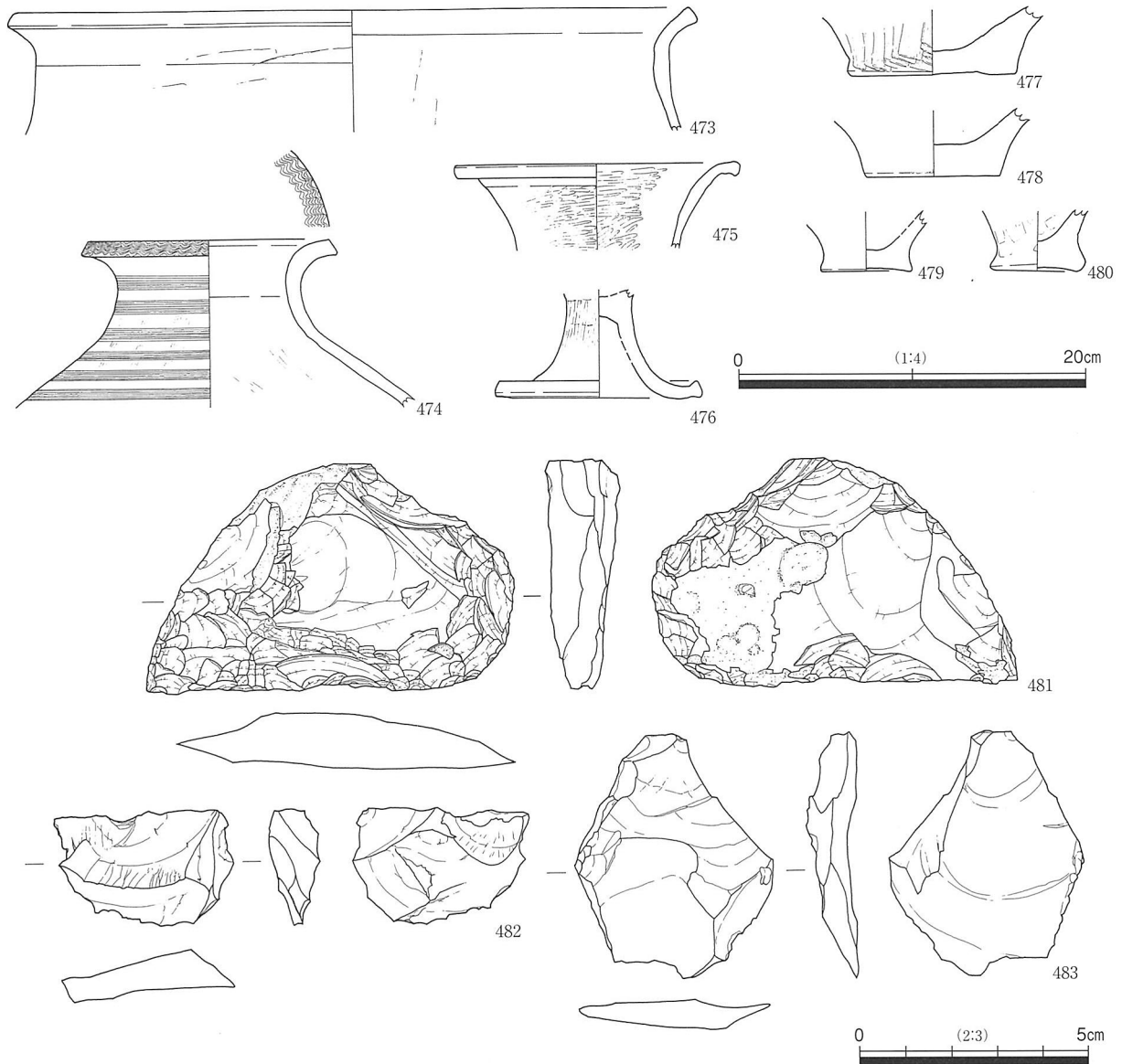


図81 第6層 出土遺物

頸部のかなり上部から櫛描直線文を施文する。胎土は他の土器に比べ白色。

475は壺。小型の壺の口縁部で、端部をやや平坦につくる。内外面に横ミガキが施される。476は高坏脚部。裾部をやや摘み上げ、端面を作る。外面は縦ミガキ、内面はナデ。瓜生堂遺跡I面溝46出土資料〔亀井ほか編1996：図IV-1-20-236〕が類例になるか。脚部全体が低いこと、裾部を摘み上げ面取りをするが、擬似凹線や凹線文は施文されないこと、裾部の断面形が似ていることから、II～III-1様式と考えられる。477・478は壺底部。477は外面ハケ、内面は剥落しており調整不明。底面と外面の一部が煤化。478は剥落著しく調整は不明。端部の一部は摩滅しており割れ口にも煤化が見られる。破片となった後に二次焼成を受けたものと考えられる。479・480は甕底部。479は内面が煤化している。480は外面剥落、内面煤化。

481はスクレイパー。側縁のほぼ全周、特に背面の右側縁に細部調整を施し、刃部に仕上げている。482、483は剥片。483は背面の右側縁、打点部分が欠けている。3点ともサヌカイト製である。

時期 弥生土器は、全て中期前半II様式～III様式の遺物で、サヌカイトは肉眼での所見であるが二上山産のサヌカイトである。以上から、第6層はII様式段階には遅くとも形成されており、その上面がIII

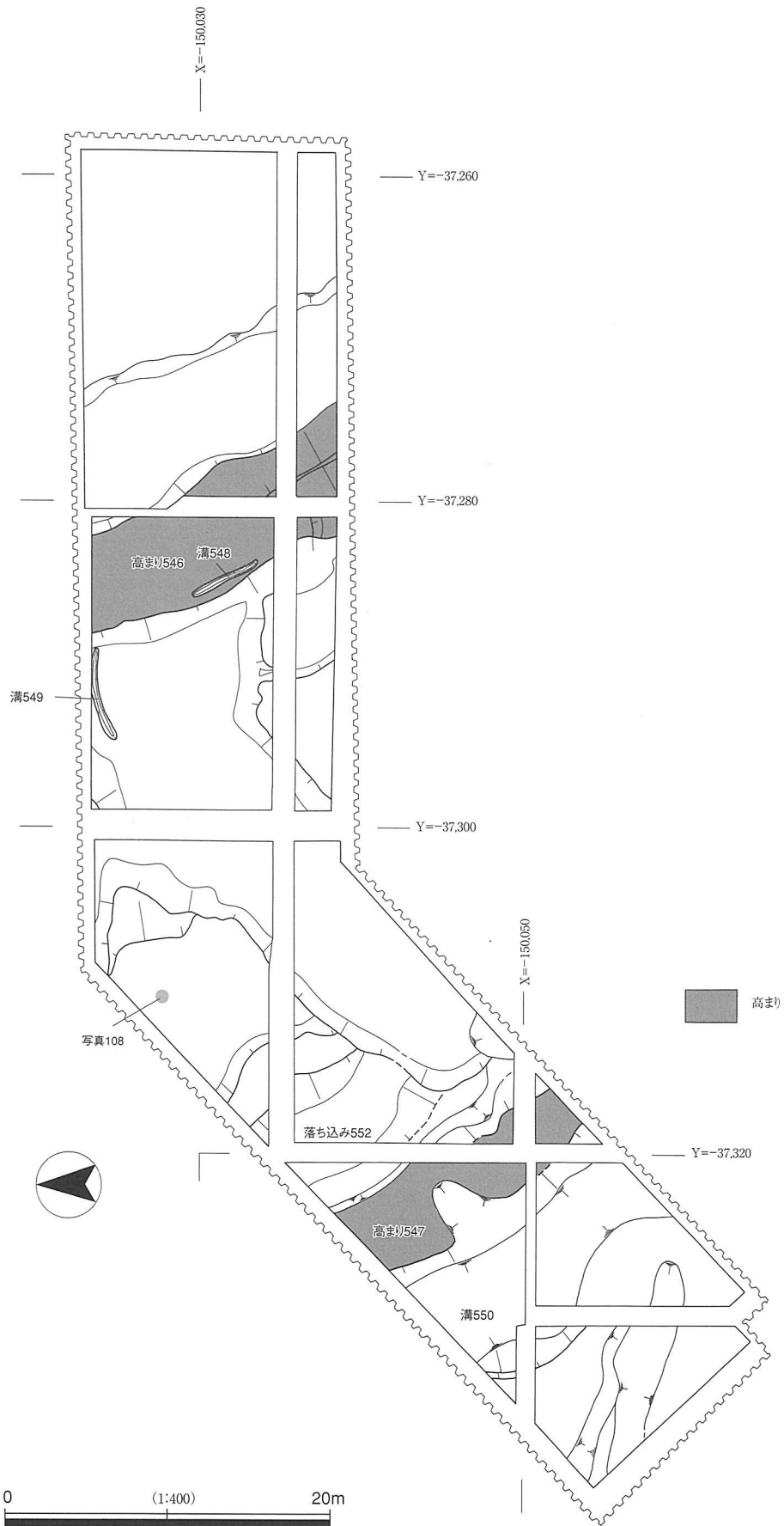


図82 第6 b面 平面図 (S=1/400)

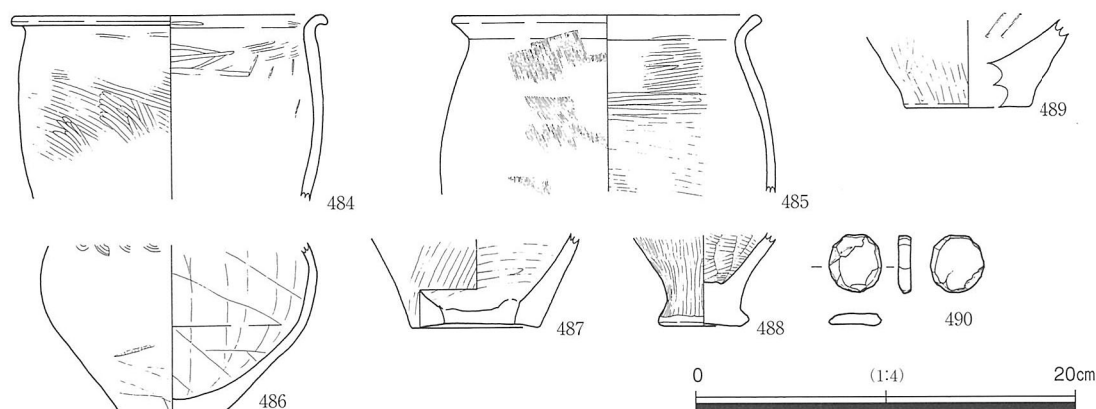


図83 高まり546 出土遺物

様式前半頃まで使用されたものと考えられる。また、第5 b層最下部から出土したⅡ-2様式頃の土器(図71-432・435)は水田開発に伴う埋納土器の可能性が考えられ、第6面開発時期の一点を示しているものと考えられる。

第6 b面(図82) 第6層の粘質シルト層を除去し検出される面である。基本的にはシルト～極細砂などの第7面を覆う細粒の堆積物を主体とする第6層の自然堆積物上面である。しかし、調査区西端では第7層との間にb層を挟まず、第6層を除去した段階で第7面が検出される。また、調査区東端では第6層が第7層を完全に巻き込んで攪拌しており、第6層を除去した面で第7 b面が直接検出される。このため、これらの箇所の記事はこの項では省略する。地形は、第6面と大きな変化はなく、調査区東端が高く、西端がやや高く、中央部が窪む。面の高さはT.P.0.27～1.49mだが、溝550より西南部分がT.P.0.93～1.49mと、かなり高くなっている。検出遺構は、高まり、落ち込み、溝である。

高まり 2つの高まりが検出された。**高まり546**は、第6面高まり522の頂部と肩部分に堆積した第6層シルト層のみを除去し検出された。なお、第6面の項でも記したように高まり中には複数の土壌化層が見られたが、いずれも不安定なものであり、調査期間の都合もあり各土壌化層の調査は実施せず断面観察のみに留まった。

高まり546出土遺物(図83) 弥生土器片・土器転用土製円板が98点、サヌカイト片1点が出土した。484・485は甕。484は口縁部を強く外反させ、端部は丸くおさめる。体部外面は横～斜めミガキ。口縁部内面は横ミガキ、胴部では板ナデが施されている。口縁部から体部上半が著しく煤化している。生駒西麓産か。Ⅱ様式前半。485は頸部がややすぼまるものの、屈曲が鈍い頸部から、口縁を弱く外反させる。端部は弱く面をもつ。外面は斜めハケ、内面は指頭押圧のち横ミガキ。外面は煤化。Ⅱ様式後半。486は壺。体部最大径14.6cmと比較的小さいため、小型の壺と考えられる。外面は板状工具の痕跡が見られ、板ナデと思われるが剥落が激しく詳細不明。残存部分の上端に、櫛描の扇形文が施される。胴部下半から底部にかけて二次焼成を受ける。内面はナデのち板ナデ。487～489は甕底部。487は筒状の甕体部に粘土を充填し底部を整形しており、製作工程がわかる資料。外面は大部分が縦ミガキだが、底部付近は横ミガキ。内面は横ミガキ。488は小さい底部が突出する形態。内外面とも同様の粗いハケで調整される。外面は縦ハケ、内面は横ハケで蜘蛛の巣状を呈し、単位は短い。底部外面はナデ。489は外面縦ミガキ、内面には一部板ナデ痕が残る。490は土器転用土製円板。一面にミガキが残り、もう一面にナデが残る。

以上の出土した土器のすべてがⅡ様式の範疇に収まることから、第6面段階の高まりの時期はⅡ様式

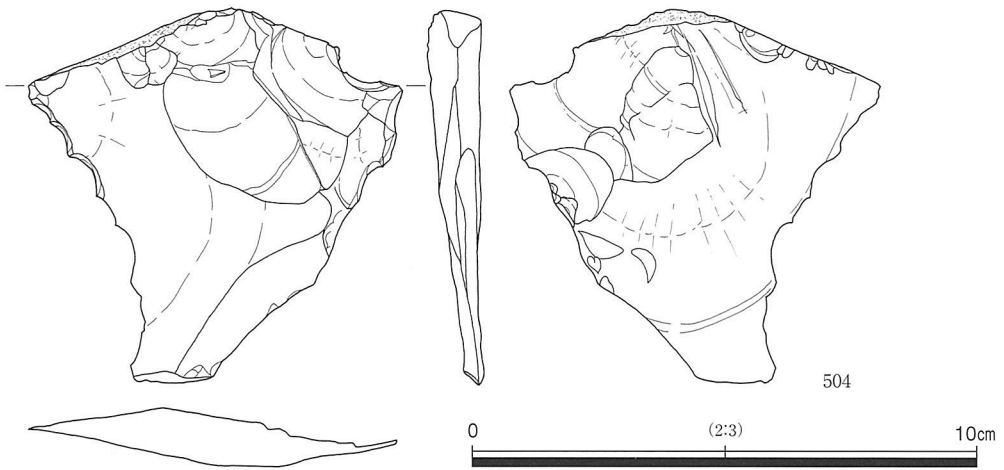
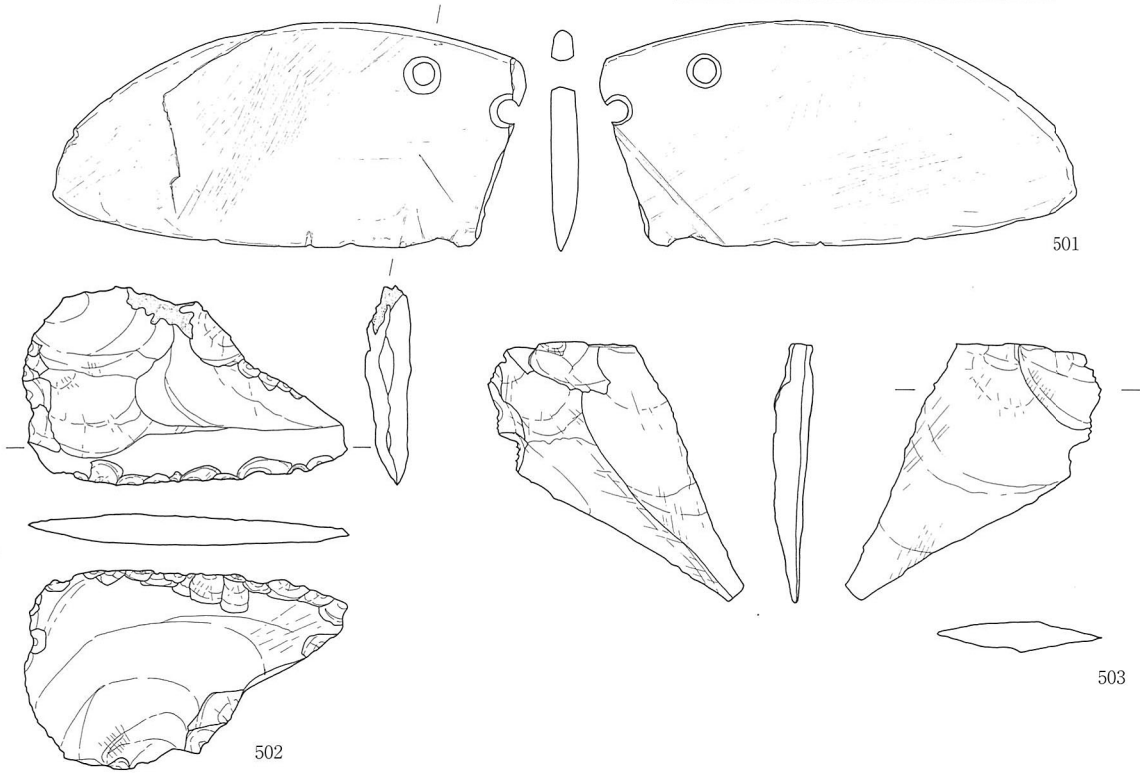
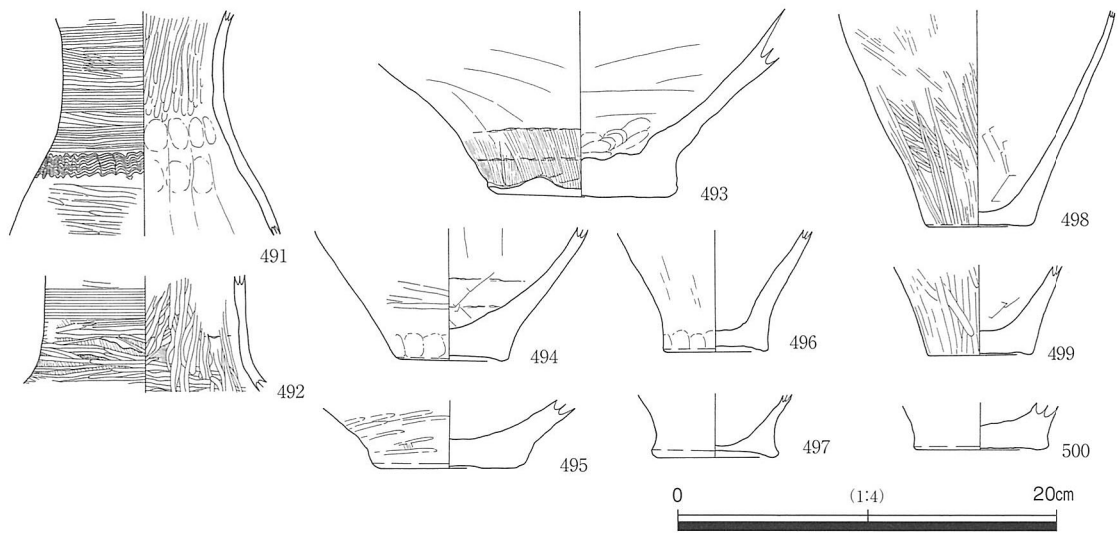


图84 高まり547 出土遺物

後半頃と考えられる。

高まり547 第6面高まり523上の第6層のみを除去し検出された。結果、高まり北東肩は、第6b層が露出するが、頂部から南西肩は第7層が露出する。基本的に大きな景観の変化はない。

高まり547出土遺物 (図84) 弥生土器片231点、石庖丁1点、サヌカイト製スクレイパー・剥片4点が出土した。491・492は細頸壺。491は9条の櫛描直線文が4段と最下段に1段の波状文が施されたのち、櫛描直線文間に横ミガキが施される。内面は体部に指頭圧痕が残り、頸部の上部から口縁にかけて縦ミガキ。492は頸部に10条の櫛描直線文が1段見られる。外面ハケのち横ミガキ、内面板ナデのち縦ミガキ。493～495は壺の底部。493は外面底部付近に縦ハケが見られる以外は板ナデ。内面はナデで、底部付近に指頭圧痕が見られる。底部外面はナデ。内面には煤が付着する。494は外面に横ミガキが見られるが剥落が著しく不明瞭。底部付近には指頭圧痕が見られる。内面板ナデ。外面全体と、内面残存部上端部は煤化。495は外面縦ハケのち横ミガキ。内面はナデ。底部外面は粗いミガキ。496～500は甕の底部。496は内外面ともナデで、外面底部付近には指頭圧痕が見られる。外面は全体的に煤化。497は内外面とも剥落著しく調整不明。底部は非常に薄い。498は外面板ナデのち斜めミガキのち縦ミガキ。内面板ナデ。外面と、内面の体部下部は煤化。499は外面やや粗いミガキ、内面板ナデ。底部外面はナデ。外面煤化。500は剥落により調整不明。以上の土器はすべてⅡ様式の所産である。

501は片刃の石庖丁。B面の中央部分より横方向に研磨し、なだらかに刃部を作り出している。石英片岩製で、重さ41.1g。502はスクレイパー。横長の剥片の長辺を両面から細部調整を施し、刃部に加工している。503・504は剥片。504には1辺に規則的な加工痕がみられ、剥離痕はみられないが、スクレイパーの可能性もある。502～504はすべてサヌカイト製。

溝 3条の溝が検出された。**溝548**は幅0.45m、深さ3～8cm。**高まり546**上で検出された。出土遺物は、弥生土器甕片2点のみ。中期前半と思われるが、詳細な時期は不明。**溝549**は、高まり546西側の低地部で検出された。幅0.5m、深さ3cm。出土遺物はない。いずれの埋土も第6層の暗オリーブ灰色～オリーブ黒色(2.5GY3/1～10Y3/1)シルトである。

溝550は、第6面の溝537の肩部分に堆積した第6層相当層を除去し検出された。肩部は第6層が残存するが、溝底部は第6面段階に削平されており、図面では削平部分を攪乱ケバで表現している。出土遺物はない。

落ち込み 高まり547の北東側の一段高くなった部分では、**落ち込み552**が検出された。この部分は第6面で自然地形の弱い微高地が検出された部分であるが、第6層を除去した結果、若干の低まりが検



写真108 第6b層 土器出土状況(北西から)

出された。低地部では大きな景観の変化が見られなかったが、この部分でのみ若干の景観の変化が見られたため、第7面を覆う砂層によって形成された自然地形ながら、遺構番号を付しておいた。出土遺物はない。

落ち込み552北東の一度高まったのちに再び低まった地点(図82トーン部分)では、第6b層中から木の葉、種子などの植物遺体とともに土器がまとまって出土した(写真108)。この地点は、全体的に第6b層の堆積が厚く、第7

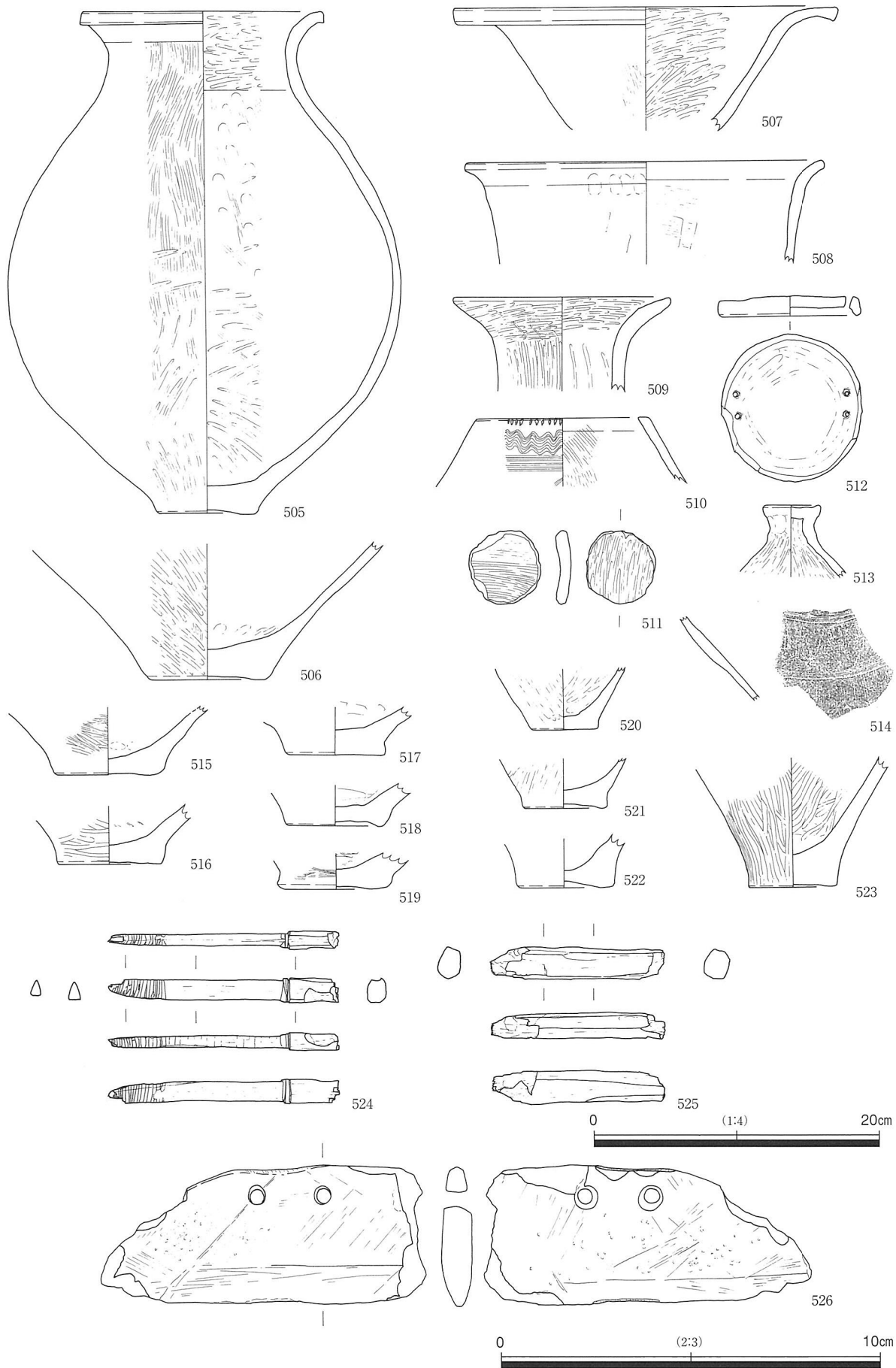


图85 第6b层 出土遗物(1)

面では自然地形の落ち込みとなっている。この植物遺体層は、第7面検出の落ち込みに堆積した砂層の上層に堆積したものである。遺物が集中して出土したことから、第6面段階の人為的な遺構の可能性も考えたが、とくに掘り込みなどは確認されず、遺構ではなく自然地形に投棄されたものと判断された。出土した弥生土器片267点に対し、復元しえた土器（図85-505）は1点のみで他は底部などの破片である（図85-508・516～519・521・523）。また、周辺の同層から出土した遺物は、506・507・510・515・524・534・540である。遺構出土ではないため、以下で第6層出土遺物と一括して報告する。

出土遺物（図85・86・87） 第6b層からはいずれも破片の概数で、弥生土器1039点、サヌカイト13点、磨製石器3点、木製品3点、自然石4点の、計約1062点の遺物が出土した。

505は短頸の広口壺。外面は上半が縦ハケ、下半最大径付近はのち横ミガキ。底部付近は縦ミガキ。内面は頸部から口縁部が横ミガキ。体部上半には指頭圧痕が多く見られ、一部縦ハケ。以下はハケのち横・斜めミガキ。Ⅱ-2様式。**506**は壺底部。外面縦ハケのち斜めミガキ。内面はナデで、底部付近には指頭圧痕が見られる。**507**は高坏。外面は剥落するが一部に縦ミガキが見られる。内面は横斜めミガキ。口縁端部はやや拡張する。口縁部の屈曲は弱く、凸帯も付さない。Ⅱ様式末～Ⅲ様式初頭。**508**は甕。外面には板状工具の痕跡が見られ、頸部には指頭圧痕が見られる。内面は横ハケで、口縁部は横ナデ。端部は丸く収まる。外面は全体的に煤化し、頸部以下が特に顕著。Ⅱ様式初頭。**509**は細頸壺。外面は頸部の縦ミガキのち、口縁部の横ミガキ、一部に縦ミガキが見られる。内面は頸部が斜めナデのち縦密度が粗い縦ミガキ。口縁部は横ミガキ。端部は基本的に丸いが、一部凹線状を呈する部分もあるものの、凹線を意識したものではない。Ⅱ様式前半。**510**は無頸壺。外面は8条の櫛描波状文、直線文が見られ、僅かに残る最下部も波状文であろう。上から2段目の直線文の一部が1段目の波状文を切る。直線文、波状文とも、上から3条目と4条目の間が他より空く点が類似し、同一原体を使用したものと考えられる。また、口縁端部は上に明瞭な面を持ち、外面に刻み目が見られる。内面は斜めハケ。全体的にシャープなイメージ。Ⅱ様式後半か。**511**は土器転用土製円板。おそらく河内形甕の転用と思われ、外面がミガキ、内面がハケ。**512**は壺蓋。内外面ともミガキ。外面にはヘラ状工具による1条の浅い沈線が見られるが、意図されたものかは不明。1対2個の紐孔が対面に外面から穿孔されている。**513**は甕蓋。内外面とも縦ミガキ。外面摘み部分はナデで、上部にはミガキ工具の停止痕跡が多く見られる。外面は若干煤化するが、内面のほうが顕著で、とくに内面最上部の摘み裏側は著しく煤化。この部分が如何にして煤化したかは不明。**514**は壺。外面は縦ハケのち、ハケ状原体による細かい櫛描直線文。残存部分で3段が確認される。内面はナデ。同様の細かい櫛描直線文の調整はⅣ様式に多く、Ⅱ様式には少ないようであるが、他の土器は概ねⅢ様式までには収まり、やや古い段階の資料であろうか。なお、当遺跡では他に同様の資料は見られない。515～517は壺底部。**515・516**はいずれも外面が横ミガキ、内面はナデ。底部外面は515がナデで、516はミガキ。**517**は外面剥落により調整不明。内面は板ナデ。**518**は外面剥落著しいが横ミガキか。内面は強いナデ。壺の可能性もあるが、外面が煤化しており甕としておく。**519**は壺。外面横ミガキ、内面板ナデ。520～523は甕。**520**は外面縦ミガキ、内面はハケのち縦ミガキ。外面全体と、内面残存部上部は煤化。**521**は外面縦ミガキ、内面は剥落著しいが、底部付近に指頭圧痕が見られる。**522**は全体的に剥落著しいが、外面はナデで、単位は不明だがミガキの可能性もある。内面はナデ。外面は、底部の接地部分を除き全体的に煤化。**523**は内外面とも縦ミガキ。外面は全体的に煤化。

524は刀子状木製品。樹種はカヤ。先端の一部と、柄の基部が欠損している。一段薄く削り出した刃

部先端には、巻かれた幅2mmほどの樹皮が一部残存するが、本来は鞘として隙間なく巻かれていたものと考えられる。基部は摩滅しており、明瞭な加工痕は確認できなかった。この木製品を祭祀具の刀子状木製品としたが、刃部が湾曲した側につく通常の刀子からすると逆刃になる。他の器種の可能性も探ってみると、大きさと形状、使用されている木材から弓の弓筈部分とも想定した。しかし、類例をみると、弓筈にある弦を巻くための切り込みが本品にはない。また、切り込みより先端部分で破損したとすると、切り込みから先端部分までの距離が12cm程度と長く、弓には類例はない。一方、逆刃の刀子状木製品は、東大阪市鬼虎川遺跡で1点出土しており、樹種はイヌガヤである〔奈良国立文化財研究所編1993：PL162-16217〕。遺物の全体像は不明だが、ここでは他の器種の可能性はあるが、鬼虎川遺跡の類例から刀子状木製品としておく。525は棒状木製品。両端を欠く木製品で3面を平らに削り出して断面が不定五角形になるような面を作っている。用途は不明。樹種はヒノキ。

526は石庖丁。A面に強い傾斜の刃をつけ、B面はややなだらかな刃をつける両刃の石庖丁で、強い擦痕が、刃部の中央部分と背部の一部にそれぞれ直行して残っている。穿孔の紐擦れによる摩滅やコーングロスなどの使用痕はないため、製作時の痕跡と考えられる。しかし一方で、A面の左肩部分に使用の際つけられた強い摩滅痕があり、B面全体にもうっすらとその痕跡が残ることからこの石庖丁がある程度回数繰り返し使われ、再加工された結果この石庖丁そのものが通常のサイズより小さい可能性がある。千枚岩製。527は大型蛤刃石斧。刃部と基部の一部を残す。断面形は平井分類のⅡb類〔平井1991〕になる。全体を敲打したのちに研磨して全体を成形、刃部を加工するようで、基部にも敲打のあとから研磨痕が残る。刃部は摩滅して丸くなっている。長石質砂岩製。

528は砥石。1面とその両側面の合計3面の研磨面が残存している。もっとも残りの良い面は縦方向に研磨し、その先端部分も利用している。割れ口も含め、全体が煤化している。シルト岩製。

529～541はサヌカイト製打製石器および剥片である。なお、重量は表20を参照されたい。529・530は剥片である。529は背面に、530は側面に大きく自然面を残す。531は両面調整石器。大型の剥片に両側縁から加工している。側縁の一部にやや密な剥離を加えている。中心部分に厚みが残り、この部分を除去することは技術的にできないので、打製石剣などには加工できない。背面の左側縁は、繰り返し敲打による剥離が行われた結果、白く変色している。532は石小刀。両面とも側縁から細部調整を施し成形している。基部は欠損。背面の先端部分に自然面が残っており、これ以上の加工は出来ない。533はスクレイパー。扁平な剥片に両側縁から調整を施しているが、打点とは反対の側縁により細かい調整を行い、刃部を作っている。534・535は剥片。534は調整石器製作時に出る剥片である。536は、背面に大きく自然面を残す剥片に、両側縁に調整を施している。下端部の折れ。簡単な両面調整石器であったと考えられる。537～541は剥片。540は背面構成などから石器制作時の剥片と考えられる。

時期 以上の遺物のうち、有機物層から出土した一群は、堆積が湿地性のものであり、比較的現地性が高いものと考えられる。一部祭祀的な資料も含む(524)が、その性格は不明。これらの時期は概ねⅡ様式に収まる。また、511・512・520・525・529・530・532は第7層に近い層位からの、509・513・526～528・531・533・535～539・541はその上層の砂層中からの出土であるが、いずれも大きな時期差はない。後述する下層出土の遺物の時期も鑑み、第6b層の堆積はⅡ様式であろう。

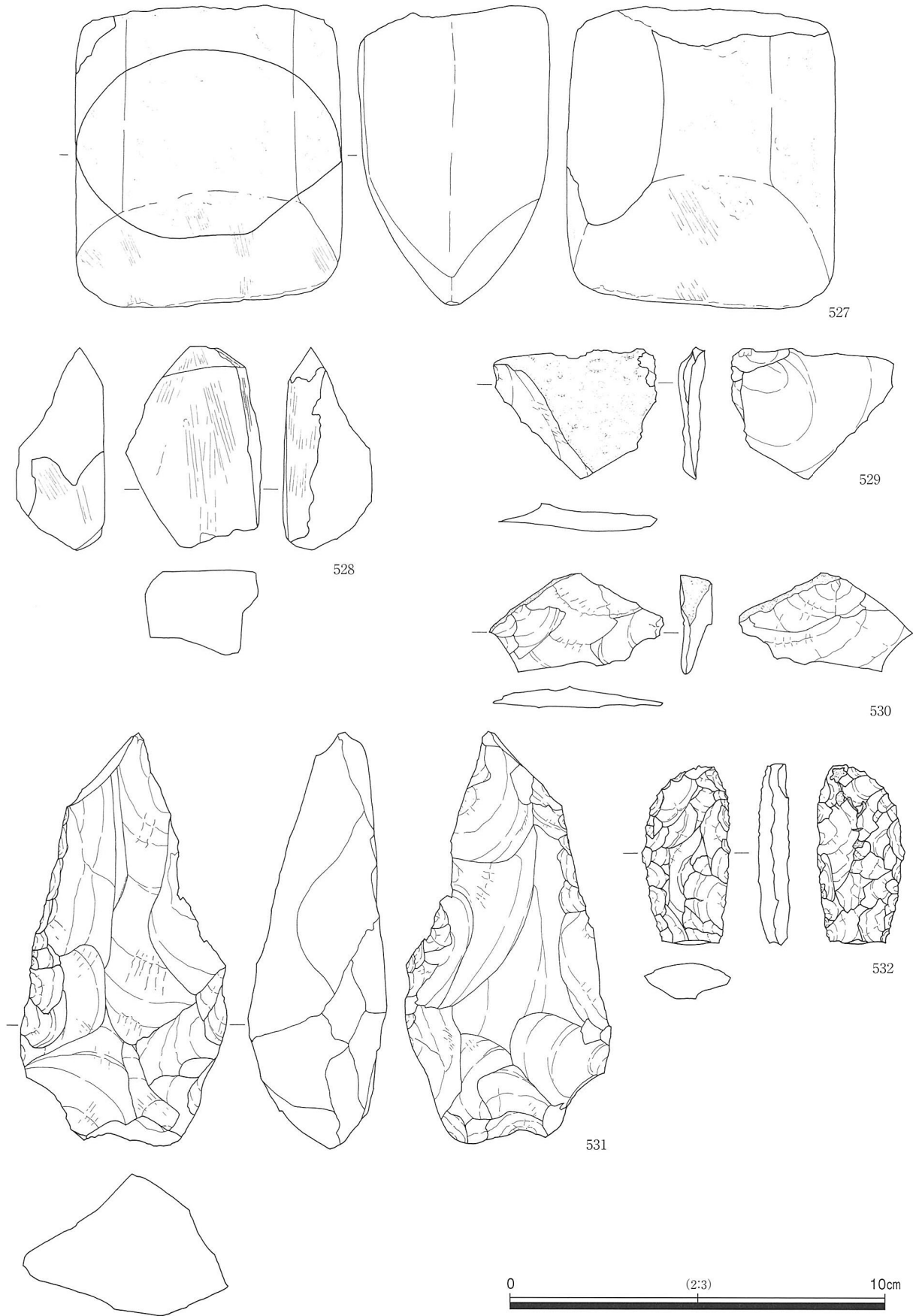


図86 第6b層 出土遺物(2)

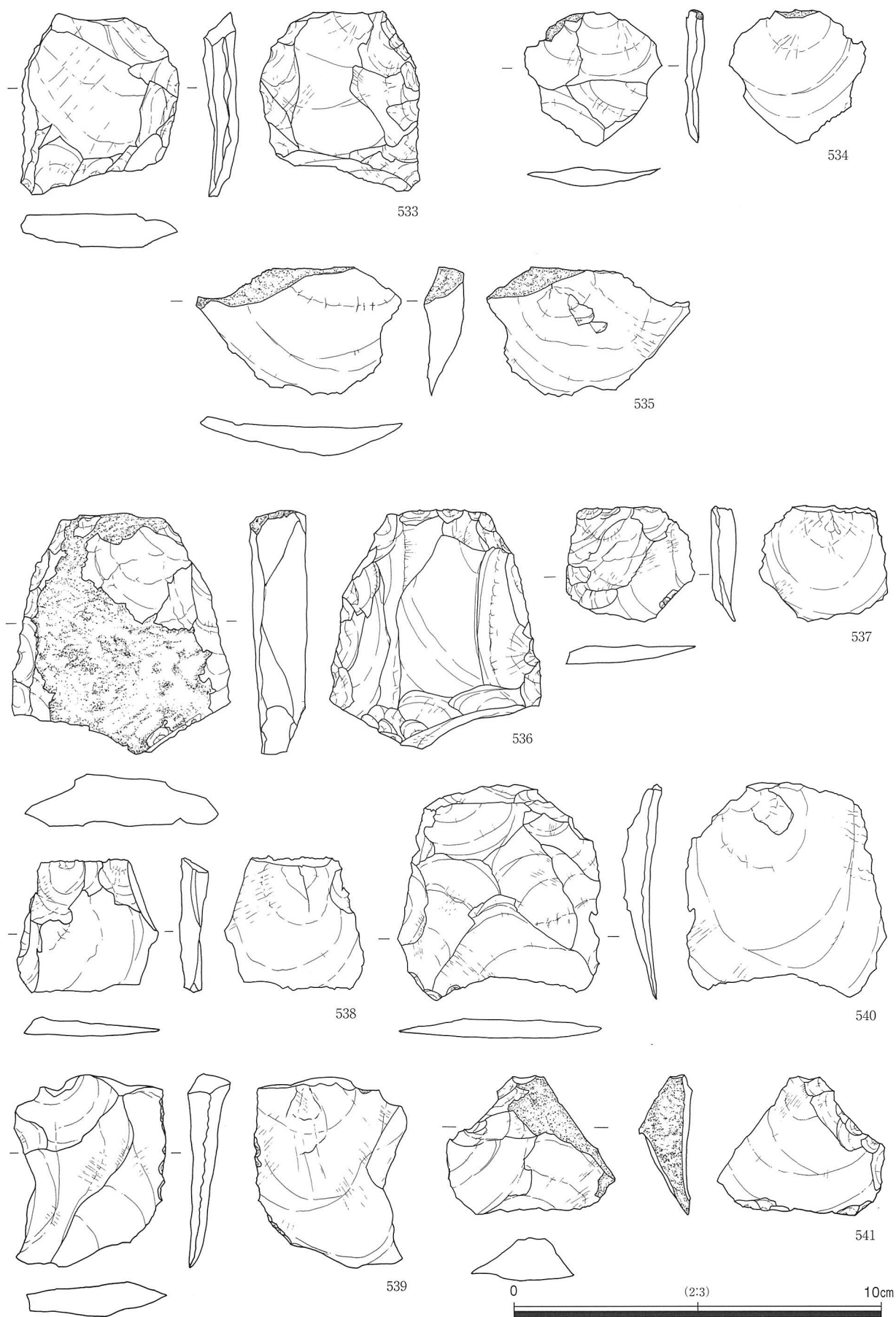


图87 第6 b層 出土遺物 (3)

第7面 (図88) 第7面は基本的には第6b層の細粒の氾濫堆積物を除去した細砂の多く混じる粘質シルトの第7層上面である。先述のように調査区西端では第6層との間にb層を挟まず、調査区東端では第6層によって攪拌されて第7層は見られない。遺構面のレベルはT.P.0.12~1.09m。

地形は、調査区西端が高く、後述する第7b面段階にはこの西端の平坦地部分から遺構が多数検出されたことを考えると、この部分が居住域の可能性が高い。この居住域は、調査区中央部に広がる低地部との境を高まりと溝によって区分されている。その東側の多くは、上面からの削平により遺構が残存しないが、この部分は相対的に低まっており、積極的な土地利用はなされなかったものと考えられる。おそらく自然地形の低まりを自然の排水施設として利用したのであろう。八尾・東大阪市池島・福万寺遺跡においても地形的にやや窪んだ低まりを排水施設として利用する様子が知られる。再び東端で若干高くなっており、水田域が広がるものと考えられる。当面において検出された遺構は、高まり、大畦畔、擬似畦畔、溝、落ち込み、ピットである。なお、一部の遺構は本来上面で検出すべき下面遺構を含む。

溝 溝は6条検出された。

溝563は、調査区西半の高まり553の西側に掘削された、南東-北西方向の溝で、幅3.6~6.2m、深さ0.35~0.85mである。溝底のレベルは、北西が高く、南東が低い。西側で溝565が接続する。なお、この溝を掘削した土によって高まり553が造成されたものと考えられる。最終的には第6面の溝537に機能が踏襲される。溝の西肩部に土器片がまとまって出土した(写真109)。接合を試みたが、いずれも破片ばかりで1個体の土器として復元できなかったため、図化はしていない。

溝563出土遺物 (図89・90) 破片の概数で弥生土器277点、石庖丁1点、打製石器・剥片4点、木器1点が出土した。

542・543は甕。542は河内形甕。口縁端部に強く横ナデを施し、やや拡張が見られ、面を作る。内外面ともハケのちミガキで、ミガキは外面が縦方向、内面が横方向。Ⅱ-3様式か。543は外面ハケ、内面ナデ。底部からのたちあがり1cm付近一周と、体部最大径付近に炭化物が所々付着している。内面にも、斑状に煤化している部分が見られる。544は壺底部。外面はハケのち上半がミガキ。内面は剥落が著しく調整は不明瞭だが、接合痕が見られる。胎土に焼粘土粒を多く含む。545~547は甕。545は河内形甕。外面縦ミガキ、口縁内面横ミガキ。体部内面はナデ。体部最大径付近の外面、口縁部外面の煤化が著しい。体部最大径部分には幅10cm程度の帯状に煤化し、その内面には炭化物が薄く付着している。底部付近は外面剥落。体部内面に炭化物が付着している。Ⅱ-3様式。546は口縁端部が薄い。内外面とも煤化著しく、調整不明瞭だが、ナデか。Ⅱ様式。547は小型品。外面ハケ、内面ナデ。全体に煤化著しく、外面体部上半全体に煤が付着している。Ⅱ-1様式。548・549は広口壺。548は内外面ともハケのちミガキ。口縁端部がやや下垂する。Ⅱ-3様式か。549は口縁端部を板ナデで下垂させ、下端に刻み目を施す。外面は縦ハケのち頸部には11条の櫛描直線文が3段施され、のちミガキ。色調が明褐色の土器である。Ⅱ様式後半。550は鉢。外面に9条の櫛描直線文、口縁端部に4条の波状文を施す。亀井遺跡(その1)SD3073[若林編1993:図Ⅳ-1-65-9]にⅡ様式の類例があるが、口縁の湾曲や端部形態が若干異なる。Ⅱ様式末か。551は甕蓋。内外面ともミガキだが、煤化が著しい。内面には2条の環状に一周する炭化物が3mmほどの厚さで付着している。口径の異なる甕(おそらく口径約12cmと約17cmの甕)で複数回の使用がなされた結果と考えられ、甕蓋と甕のセット関係を考える上で興味深い資料であるといえる。また、土器の割れ口にも炭化物が付着していることから、破損後も使用され続けたと思われる。552・553は甕。552は河内形甕。生駒西麓産の胎土。外面縦ミガキ、内面

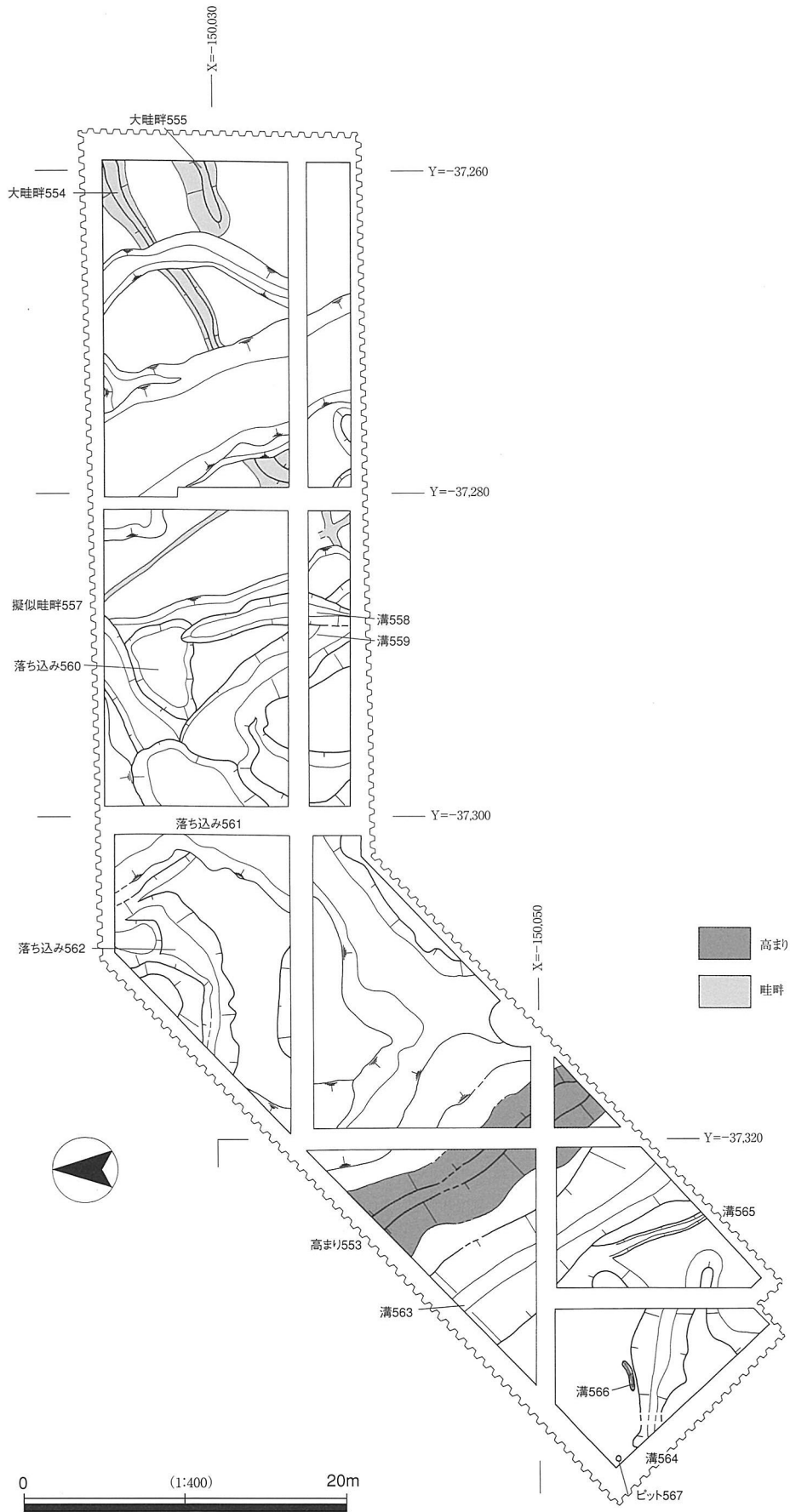


図88 第7面 平面図 (S=1/400)

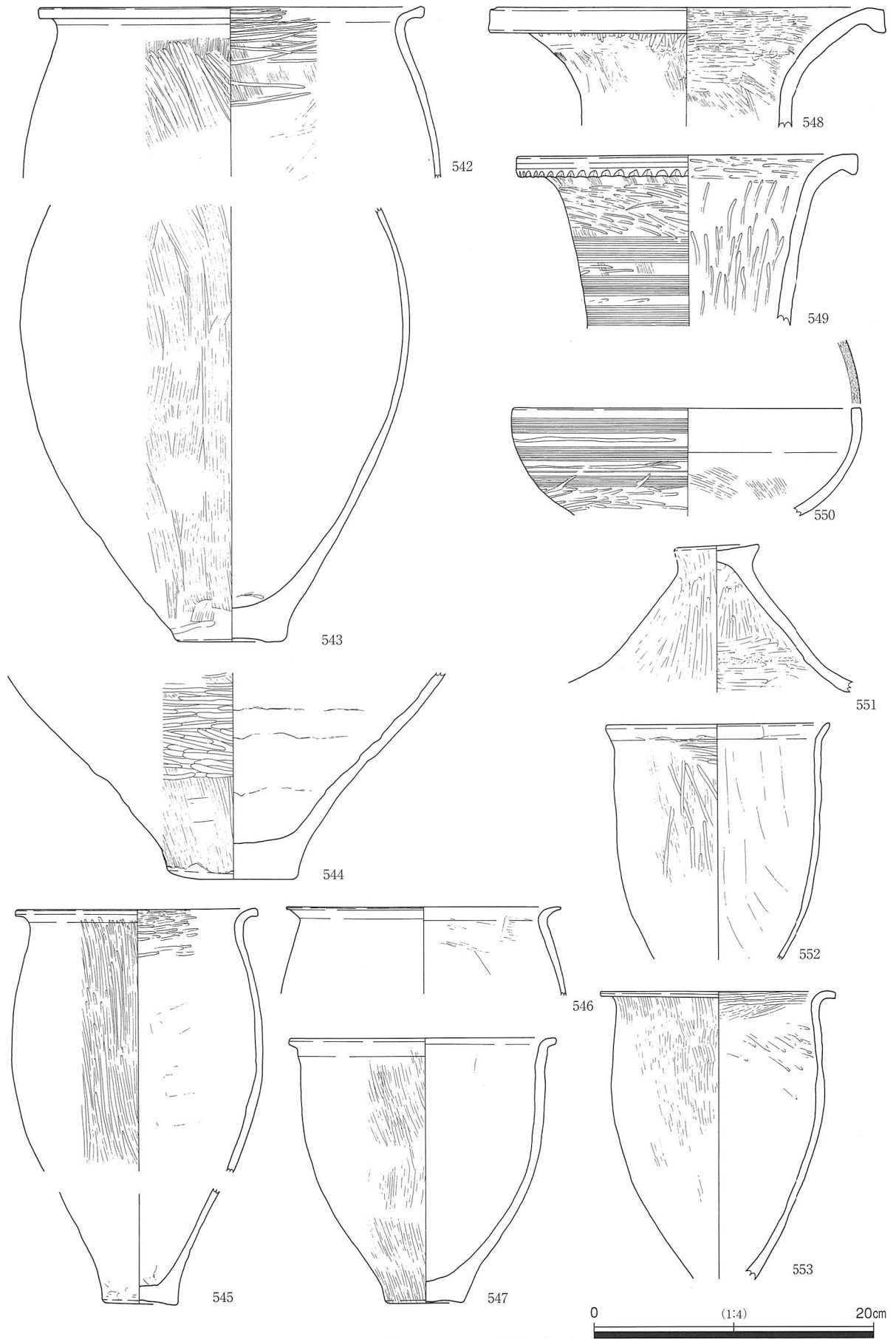


図89 溝563 出土遺物 (1)

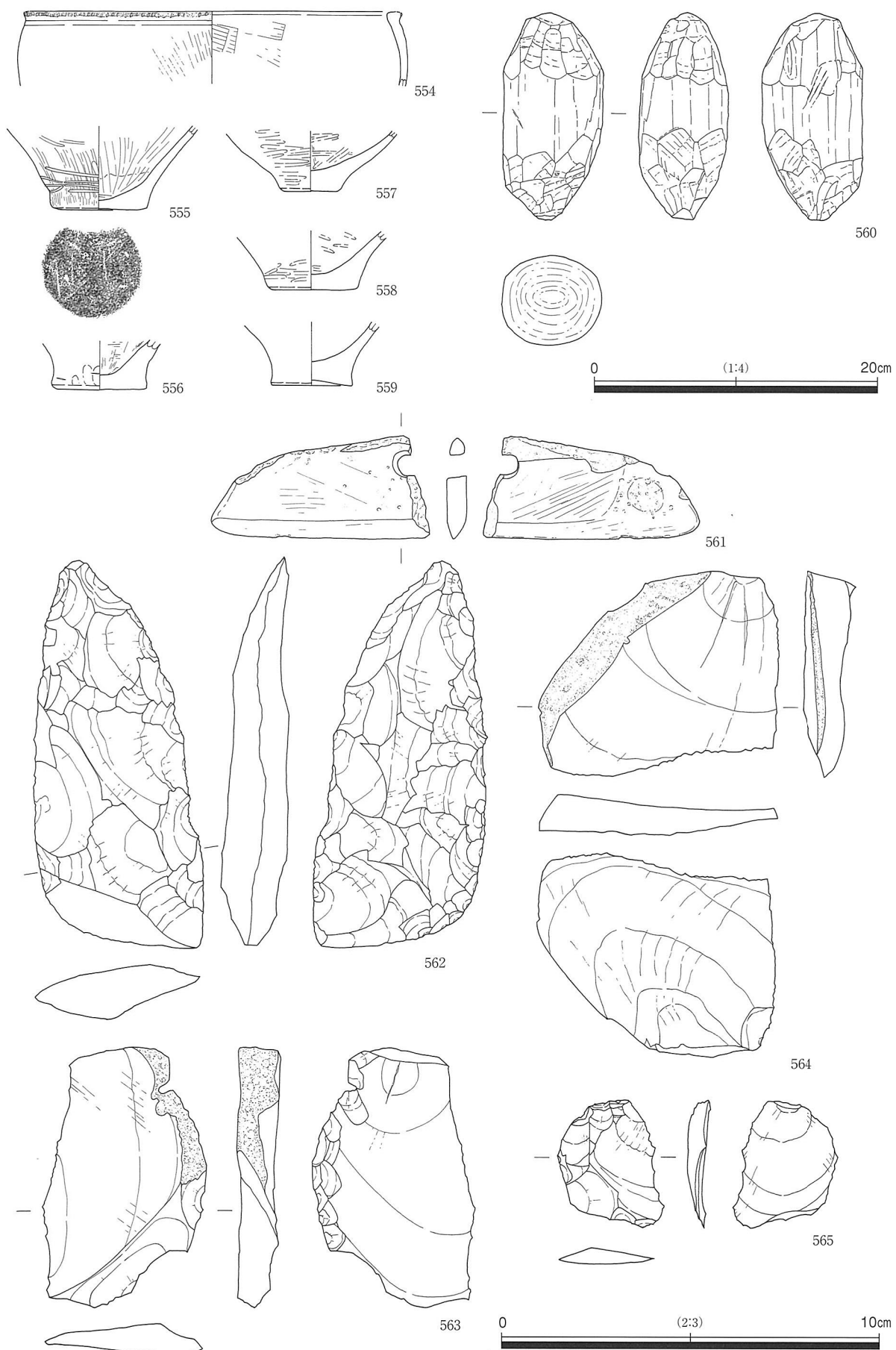


图90 溝563 出土遺物 (2)

板ナデ。口縁部は弱く外反する程度。全体的に煤化著しく、斑状に煤が付着する。Ⅱ様式前半553は大和型 a 甕か。口縁部が水平に開き、端部は面を持つ。外面体部上半は砂粒が移動するほど強い不定方向の板ナデ。全体的に煤化が著しく、外面体部下半は剥落し、同内面には炭化物が付着する。Ⅱ-3様式。554は鉢。内外面ともハケ。内湾気味の口縁端部を拡張し、端部外面に刻み目が施される。Ⅲ様式初頭頃か。555～559は甕底部。555は外面ハケのちミガキで、ミガキは縦方向に密に施したのち、横方向に粗なものを施す。内面は強いナデ。体部外面、底部外面の中央部分と底部内面が煤化。底部外面には木葉痕が残存する。556は外面ナデで一部指頭圧痕が見られ、内面ハケ。557は内外面ともミガキ。底部外面はナデ。底部内面が煤化している。558は内外面ともミガキ。体部外面の煤化が著しい。559は内外面ともナデ。内面が煤化。

560は丸木の両端を尖らす。下端は欠損しており、この部分に棒状の部位が付いていた可能性が考えられる。用途は不明であるが、横槌の可能性も考えられる。樹種はヒノキ。

561は石庖丁。両刃で他の石庖丁にくらべ、非常に小さい。おそらく研ぎ直しと再利用を繰り返し、この大きさになるまで使いこまれたのだろう。緑泥石英片岩製。562は未製品再加工品。両側縁から大きく調整を施し、器形を整えているが、下端部が折れた事故品と考える。欠損後はスクレイパーに転用している。563～565は剥片。563は側縁に二次調整を施している。側面の平坦な側であるが、搔器などの使用も考えられる。565は連続剥離の際、産出される剥片。562～564はサヌカイト製。

溝563部分は、第6面から第8面まで機能した溝であり、上下層からの混入の可能性が考えられる。そのため、明確な時期は判断できないが、Ⅱ様式の中頃からⅢ様式の初頭が遺構の時期と思われる。

溝564は、調査区西端から東にのびて、一段低くなった溝565の位置する平坦面に注ぐように位置する。先述の第6面溝540に機能は引き継がれるものと考えられる。幅1.3～3.3m、深さ0.21～0.52mで東が低い。埋土は、一部に極細砂を含む粘土～シルト。出土遺物はない。

溝565は溝563の南西側の一段低くなった部分に溝563にほぼ並行しながら、溝563が南西に膨らんだ部分に接続するように掘削されている。周辺のレベルから、北から南への流れが想定される。幅0.5～0.8m、深さ3～13cmで、埋土は極細砂を含む粘質シルト。出土遺物は河内形甕片などを含む弥生土器片7点。詳細な時期を判断できる資料はないが、中期前半と思われる。

溝566は溝564北肩に位置し、検出長1.9m、幅0.3～0.4m、深さ3～9cmの溝である。埋土は溝565と同様。出土遺物はない。

溝558・559は調査区中央部の南から北の低まりへの掘削。両者とも本来は第6b層中のある時期に掘削されたものであり、当面では下面遺構として検出した。



写真109 溝563土器出土状況（東から）

本来は第6b面で検出しておくべき遺構である。なお、いずれの溝も上面で水田が検出されている箇所当たり、水田に伴う排水用の溝と考えられる。溝558は溝559を切って北東に向かってのびる溝で、幅0.9～1.9m、深さ0.19～0.38mである。埋土は、極細～粗砂の混じる粘質シルト。埋土中から約10点の弥生土器片が出土したが、いずれも細片で図化できなかった。ただし、甕の口縁部片で、端部に面を持つものの、拡張は見られないものが見られた。これは、Ⅱ様式の範疇に収まるものであろう。

溝559は北西に伸び、幅は3～3.5m程度、深さ0.19～0.38mで北に向かって低くなり、北端で落ち込み561に合流している。西側の自然地形の高まり沿いに掘削された溝。第6面では、溝状になっていた部分であり、水田の主要な排水路として機能していたものと考えられる。灰～オリーブ黒（5Y5/1～3/2）粘質シルト・粘土～極細砂などの細粒の堆積物で埋没しており、上層には植物遺体が多く含まれる。

溝559出土遺物（図91） 破片の概数で弥生土器135点、石器1点、木製品1点が出土した。**566**は大型の鉢。口縁部がやや外反し、内外面ともミガキが施されている。底部外面は摩滅。Ⅱ-2様式。**567**は甕。内外面とも横ミガキで、内面にはミガキ以前のハケが見られる。体部下半と口縁部外面が煤化著しい。内面は口縁部内面に指頭圧痕の凹凸が残り、内面体部下半が煤化している。口縁端部が拡張し、Ⅱ-3様式と考えられる。**568**は細頸壺。口縁端部に面を持ち、擬凹線状を呈す。頸部の上部から櫛描直線文が施文されている。生駒西麓産の胎土。Ⅱ様式前半。**569**は壺底部であるが、二次焼成を受ける。内外面ともミガキ。外面は煤化、内面は底部付近が剥落、コゲバンドが形成されている。**570**は甕底部。内外面ともハケ。底が厚く壺の可能性もあるが、内外面が煤化している。571・572は甕底部。**571**は外面縦ミガキ、内面板ナデ。内外面の底面から体部まで煤化。**572**は外面縦ミガキ、内面ハケのちミガキ。生駒西麓産の胎土。

573は棒状木製品。図面左側は欠損しているが、図面右側の端部を段状に加工している側は残存している。断面形が丸みを帯びた図面右側部分から四辺を面取りして平坦に仕上げる図面左側部分に移行する。用途は不明だが、農耕具類の柄と考えられる。樹種はヒノキ。農耕具の柄であるという仮定から、北部九州型直柄鋏の可能性も考えたが、時期が古く、樹種も異なるためその可能性は低いであろう。

574はサヌカイト製スクレイパー。摩滅した自然面をもつ石材を加工した剥片に両面から調整を施し刃部に仕上げている。

以上の遺物は、概ねⅡ様式の範疇に収まるものであり、溝の機能時期を示すものであろう。

落ち込み 調査区東半の北西では落ち込みが確認された。これらは溝558・559と関連する、上層に伴うものと考えられる。明瞭な掘り込みが見られるような遺構ではなく、自然地形であろう。

落ち込み560は調査区中央部北側に位置する幅4.4～6.2m、深さ0.25m。出土遺物は弥生土器片16点。屈曲の弱い甕口縁部片や、櫛描直線文を施す壺片などが見られた。いずれも小片で図化は不可能だった。詳細な時期は不明ながら、中期前半の所産であろう。

落ち込み561は調査区南西～北東に延びる大きな落ち込みで、幅は7.6m、深さ0.1～0.4m程度で南ほど深い。落ち込みの南西延長は、それが南西からの洪水によって浸食されたものと考えられ、第7層が残存していない部分も多い。

落ち込み561出土遺物（図91） 弥生土器片38点が出土している。**575**は大型の鉢。口縁端部を強い横ナデで平坦につくる。内外面ともミガキ。Ⅱ-3様式。**576**は壺口縁部。口縁端部はやや平坦面を持ち、縦方向に刻みを施し、その中央に横方向の沈線を施文している。頸部の上部より7条の櫛描直線文が施文される。口縁部の要素がやや古いため、Ⅱ様式前半と考えられる。

落ち込み562は、調査区中央部北側の落ち込みで、第7b層堆積段階の自然堆積による抉れの可能性が高い。第7面機能時に植物遺体などの有機物を多く含んだ粘土～粘質シルトの堆積が見られ、先述のように、落ち込み562北西のやや高まった部分では、かなり埋没が進んだ段階に、植物遺体の集中する部分から土器が出土している（写真108）。

調査区中央部分には自然地形の落ち込み部分に、極細～細砂を多く含む粘土～シルトの第7層が堆積

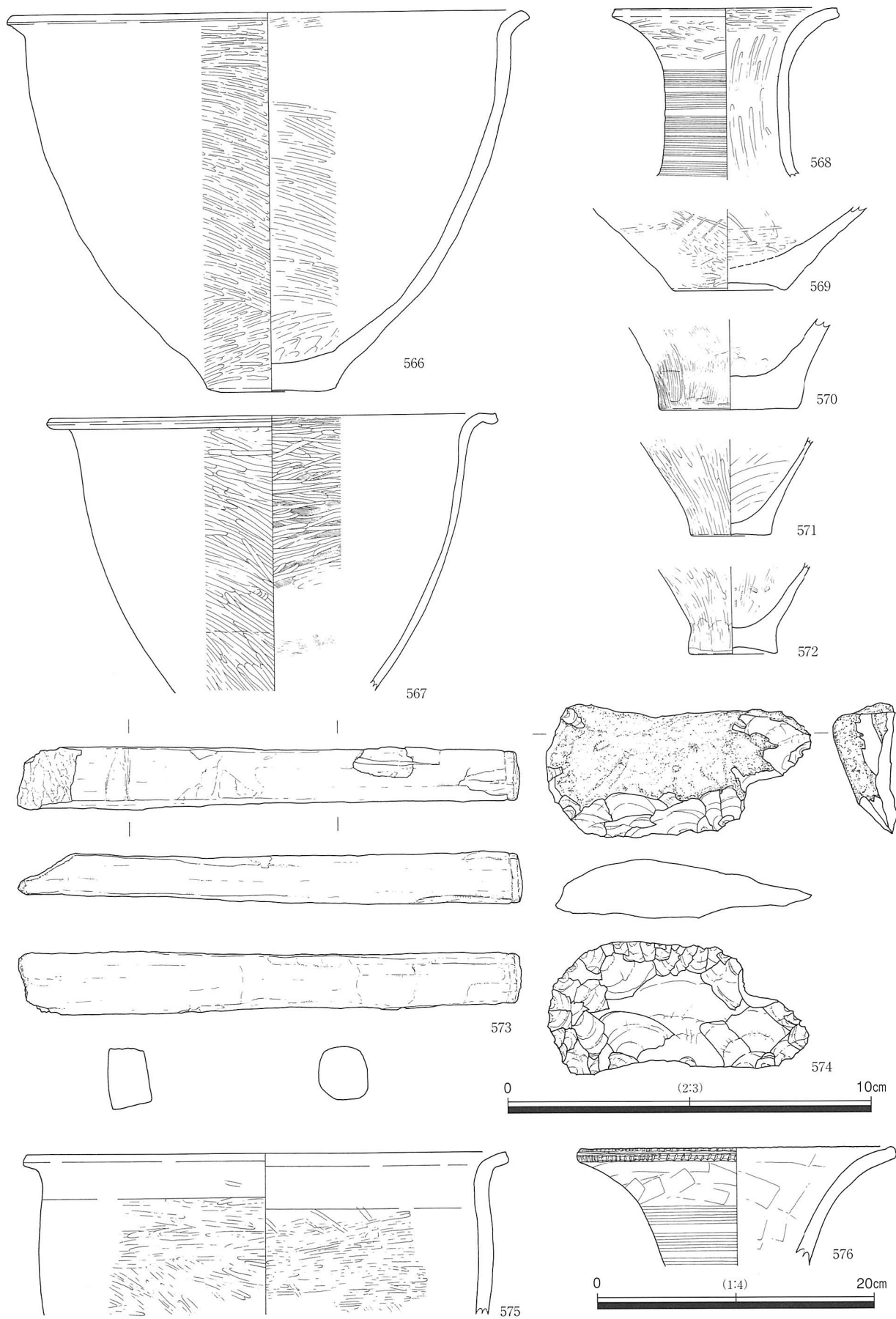


図91 溝559、落ち込み561 出土遺物

していた。基本的な形状は上面と変わらない。遺構番号は付していないが、この落ち込み部分からは、数多くの遺物が出土したため、図92・93に第7層出土遺物（図97～99）と分離して掲載した。上面で遺物が集中して出土した箇所よりも東側に位置するが、調査区西半の低地部で遺物が多く出土する傾向は一致する。

第7層遺物集中部出土遺物（図92・93）この遺物集中部分からは破片の概数で弥生土器329点、石器・剥片2点が出土した。577は大型の鉢。口縁をゆるやかに外反させ、端部に面をもつ。外面は横ミガキ。内面に指頭圧痕が残存する。Ⅱ様式。578～580は甕。578・579は河内形甕。578の口縁端部はやや面をもつ。内外面ともミガキ。体部上半の1/2周に煤が付着し、内面も煤化している。内面の一部に指頭圧痕が残る。Ⅱ様式後半。579は内外面ともミガキ。端部は丸みを帯びる。580は外面煤化のため調整不明瞭だが、ナデか。内面には指頭圧痕の痕跡が見られる。579・580とも体部上半の内湾した部分が著しく煤化、煤が付着している。内面は外面では煤の付着していない体部下半に煤化が見られる。いずれもⅡ様式。581は広口壺。内外面とも摩滅が著しい。口縁端部は丸く納める。頸部の上部から10条の櫛描直線文が施され、のちミガキ。内面は剥落著しいが、口縁部には横ミガキが見られる。胎土は生駒西麓産か。Ⅱ様式後半。582は広口壺。全面ミガキ。口縁端部が拡張する。Ⅱ-3様式。583は広口壺。口縁端部は面をもち、内外面ともハケ。Ⅱ-3様式。584は壺底部。底径13.4cmの大型品。体部外面に煤が付着しており、煮沸に使用された可能性がある。585～590は甕底部。585は外面縦ミガキ、内面は若干ミガキが見られる。二次焼成を受けて、外面のほとんどが剥落し、残存高の上半1/3程に煤が付着している。内面は、全体が煤化している。586は内外面とも剥落しており調整不明。内面は底部まで煤化。底部からの立ち上がりに外面からの焼成後穿孔が施されている。587は内外面とも壺を思わせる横ミガキ。ただし、内外底面以外が著しく煤化しており、体部内外面に煤の付着とコゲバンドが形成されている。588は外面ミガキ、内面板ナデ。底部外面は中央部に粘土を充填しており、その部分が剥落している。内外面の一部が煤化。胎土は生駒西麓産か。589は外面ハケ、内面ナデ。全体的に煤化し、特に外面に煤の付着が見られる。590は外面ハケ、内面ナデ。底部外面に木葉痕が残る。内外面とも煤化。591は無頸壺。口縁直下から9条櫛描直線文が施文されており、外面より焼成後に穿孔されている。Ⅱ様式。

592は自然礫。両面にベンガラが付着している。研磨痕は顕著ではないが、擦り石の可能性もある（富田克敏氏のご教示による）。粗粒砂岩。593は両側縁が折れ、刃部のみ残存しているスクレイパーか。断面形が凸レンズ状であり、両側縁から加工していることから両面調整石器の可能性もある。594は二次加工のある剥片。縦長の剥片に両側縁から調整をしている。593・594ともサヌカイト製。

以上の遺物は、Ⅱ様式の範疇に収まるものであり、他の第7面関連の出土遺物との時期差は見られない。

高まり 高まり553（図94、写真110）は先述のように第7面機能段階に西側の溝563を掘削した土を盛り上げて造成されている。盛土は、造成以前の第7層土壌化層の上部に、溝563部分の第7層の極細～細砂を多く含む粘質シルトや第7b層の粘土～シルトを盛り上げており、土器・石器などを多量に含んでいた。

高まり553出土遺物（図95・96）高まり553からは概数で弥生土器片492点、石器・剥片9点が出土した。595～597は甕。595は口縁部内面と外面の体部最小径部分に煤化著しい。口縁部内面は帯状に煤が付着していることから、蓋の使用の可能性がある。外面は斜めミガキ、内面は横ミガキ。Ⅱ様式前半。596は体部外面に煤化著しい。口縁部が大きく外反している。内面は横ミガキのち一部を縦

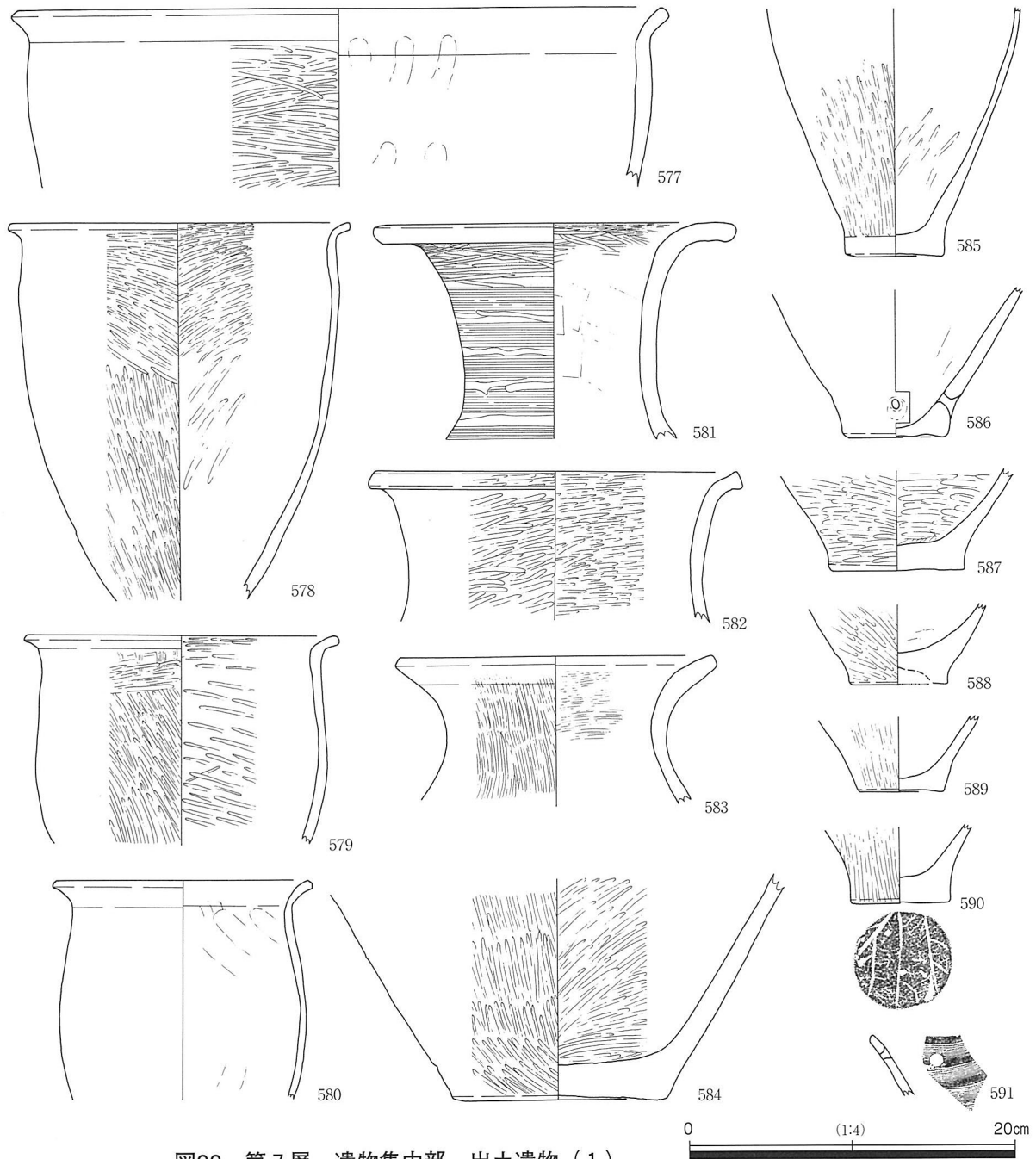


図92 第7層 遺物集中部 出土遺物(1)

方向にナデ消す。Ⅱ-2~3様式。597は外面が煤化。その内面も熱を受けた痕跡が残る。Ⅱ-2様式。摂津型か。598は壺。口縁端部に7条の波状文が施文されている。Ⅱ様式。599は甕蓋。口縁内面の煤化が著しいことから蓋と判断した。内外面ともナデで調整され、口縁端部と平坦の整形する。生駒西麓産胎土か。Ⅱ様式。600は壺。太頸の頸部から口縁部を大きく外反させ、口縁端部に端面を取る。端面には櫛描によって鋸歯文、頸部の上部から11条の櫛描直線文が施文される。口縁部の摘み上げがないことから、Ⅱ-2様式と考える。601は8条の櫛描直線文が隙間なく施されている。文様上縦方向の帯状に赤彩が残存する。Ⅱ様式。602は壺体部上半。8条の櫛描直線文に1段おきに扇状文が施文され、擬似流水文状を呈する。Ⅱ様式。603は壺頸部。縦ハケの後文様が施文され、周囲をナデ消している。604は壺底部。605は甕底部。内外面とも煤化著しい。内面には環状に煤化痕がついている。606は甕底部。外面煤化、内面は摩滅。607は外面が縦ハケで調整され、全体が煤化している。内面も残存高の

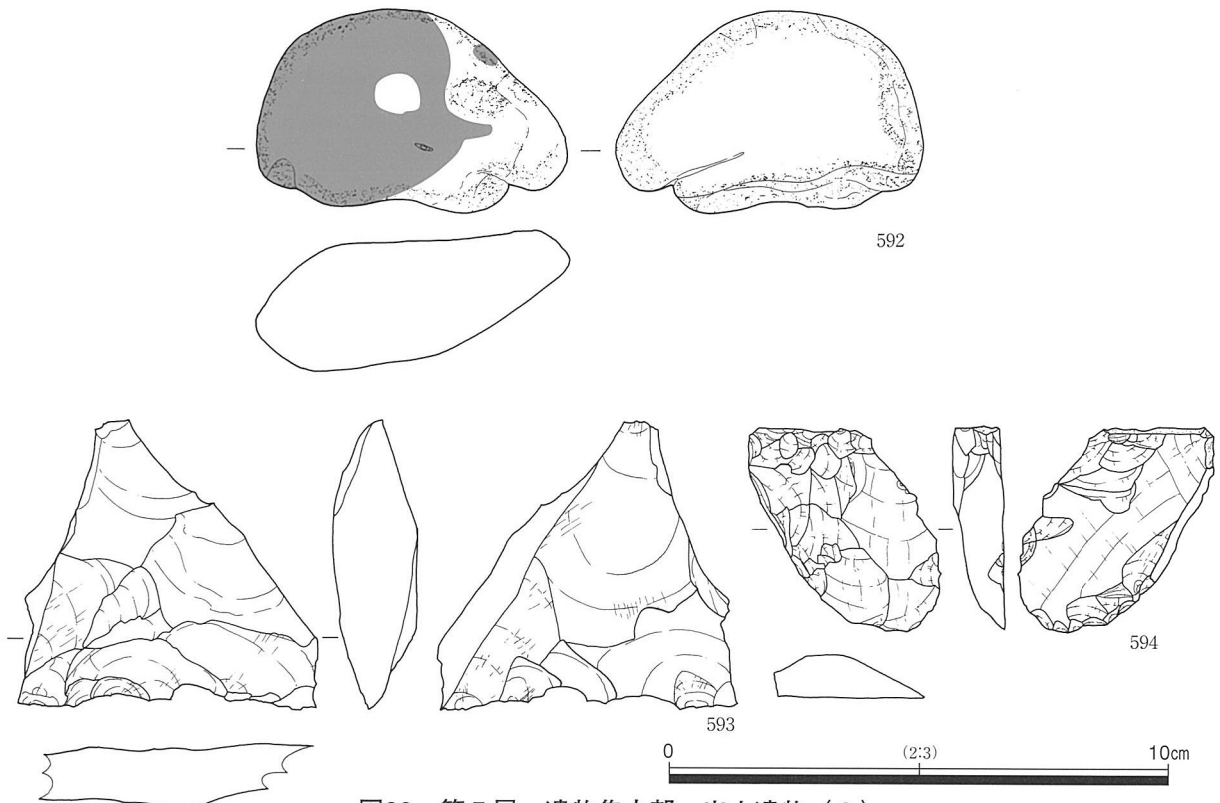


図93 第7層 遺物集中部 出土遺物(2)

上半が煤化している。608は甕蓋。全体に摩滅しているが、二次焼成を受けたことがわかる。609は底部。非常に底面が薄く、中央に穿孔が施される。内外面が煤化。

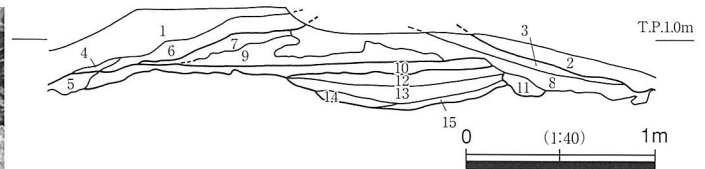
610~618はサヌカイト製の石器・剥片。610は横長の剥片に二次調整を加えている。側面のある辺であり搔器の可能性もある。611はスクレイパー。打面に自然面を残す剥片に刃部を付ける。612はスクレイパー。背面を平坦にし、腹面を刃部に加工している。613~618は剥片。614は背面に自然面が残る。616・617は打点部分が欠損。618は1辺に調整を行うが、背面に自然面が残り刃部にならない。

畦畔 畦畔は大畦畔が2条の他、擬似畦畔や畦畔状の高まりも見られた。

大畦畔554は、調査区東北端から南西にのびる高さ0.12~0.26m、延長約14.0mである。途中第6層上部の氾濫堆積層により切られているが、この攪乱部分東側の調査区東半中央部において、延長部分を検出した。この部分を考慮すると、総延長は約22.0mとなる。大畦畔555は、大畦畔554の南2.0mほどの位置にほぼ並行する畦畔である。若干この部分の遺構面を掘りすぎている可能性はあるが、高さ約8~41cm、延長約5.2mの畦畔である。西端を上層段階の砂層で切られている。



写真110 高まり553断面(北西から)



- | | |
|--|--|
| 1 10Y3/1 オリーブ黒色 粘土~シルトブロック | 9 25Y6/4 にぶい黄色 極細~細砂 |
| 2 5Y2/2 オリーブ黒色 シルト~中砂 やや粘質 | 10 5BG2/1 青黒色 粘土~シルト+細~中砂
(盛土以前の第7層) |
| 3 75Y2/1 黒色 細~中砂 炭化物を含む | 11 N3/ 暗灰色 シルト+極細砂 粘性有り(土坑658) |
| 4 1+細砂が混じる | 12 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土~シルト
炭化物層を挟む(土坑658埋土) |
| 5 10BG3/1 暗青灰色 粘土~細砂 ブロック状 | 13 75Y2/1 黒色 粘土シルト+中砂(同) |
| 6 25Y5/2 暗灰黄色 細~中砂 | 14 5Y3/2 オリーブ黒色 粘土~シルト(同) |
| 7 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト~極細砂 | 15 75YR1.7/1 黒色 シルト+極細砂+炭化物(同) |
| 8 25Y5/2 暗灰黄色 オリーブ黒色シルトブロック
混じり細~中砂 | |

図94 高まり553 断面図(S=1/40)

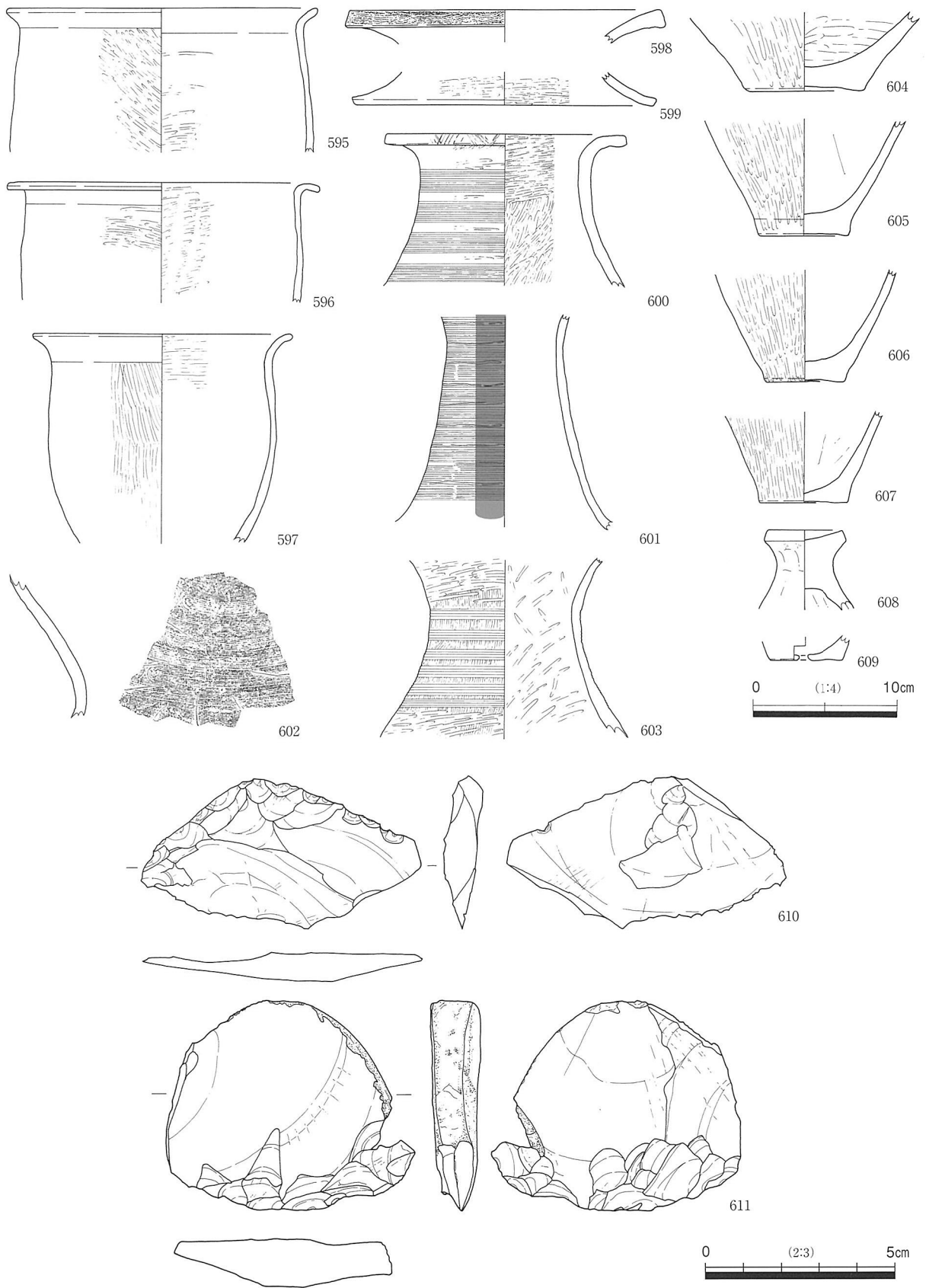


図95 高まり553 出土遺物(1)

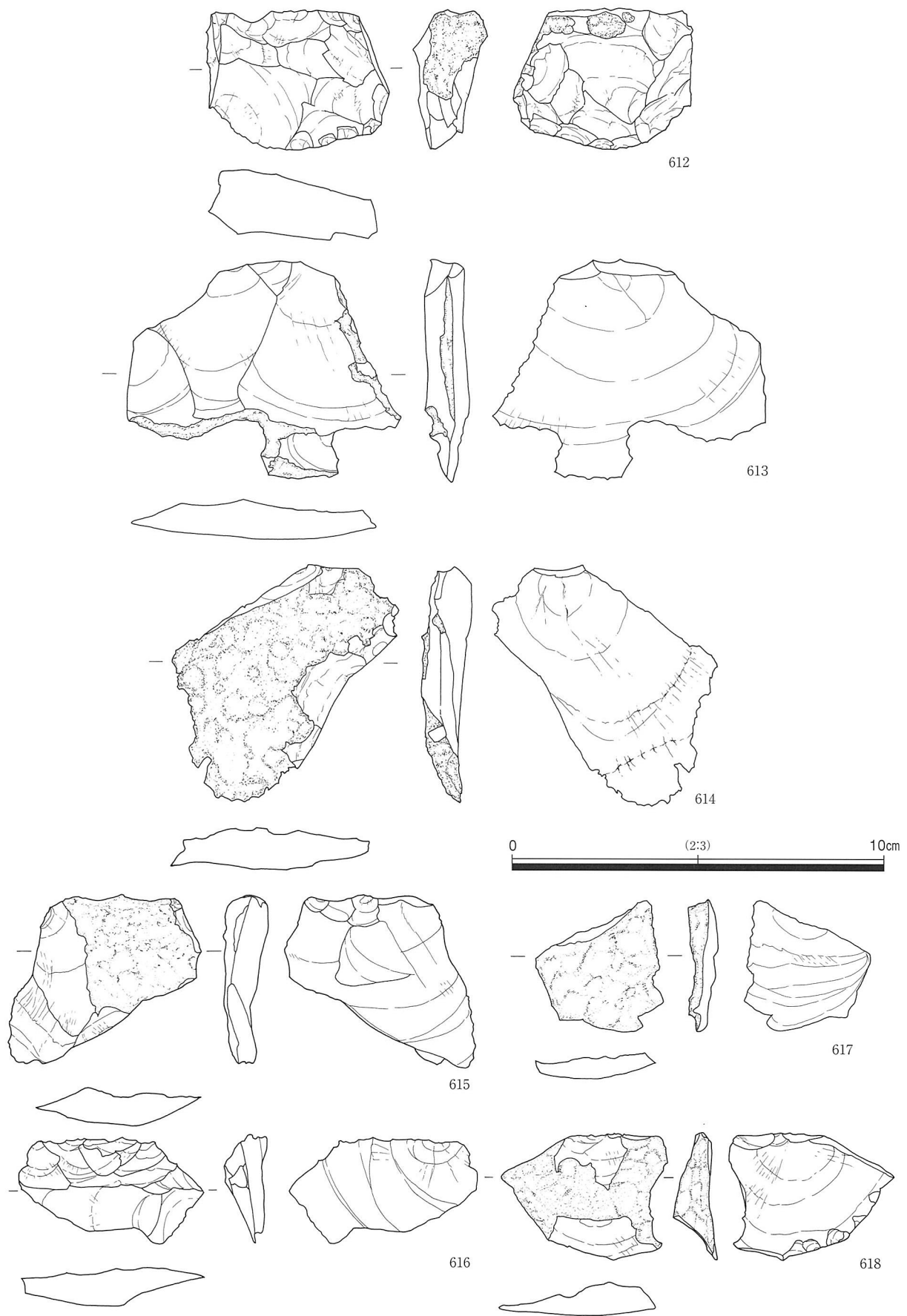


図96 高まり553 出土遺物(2)

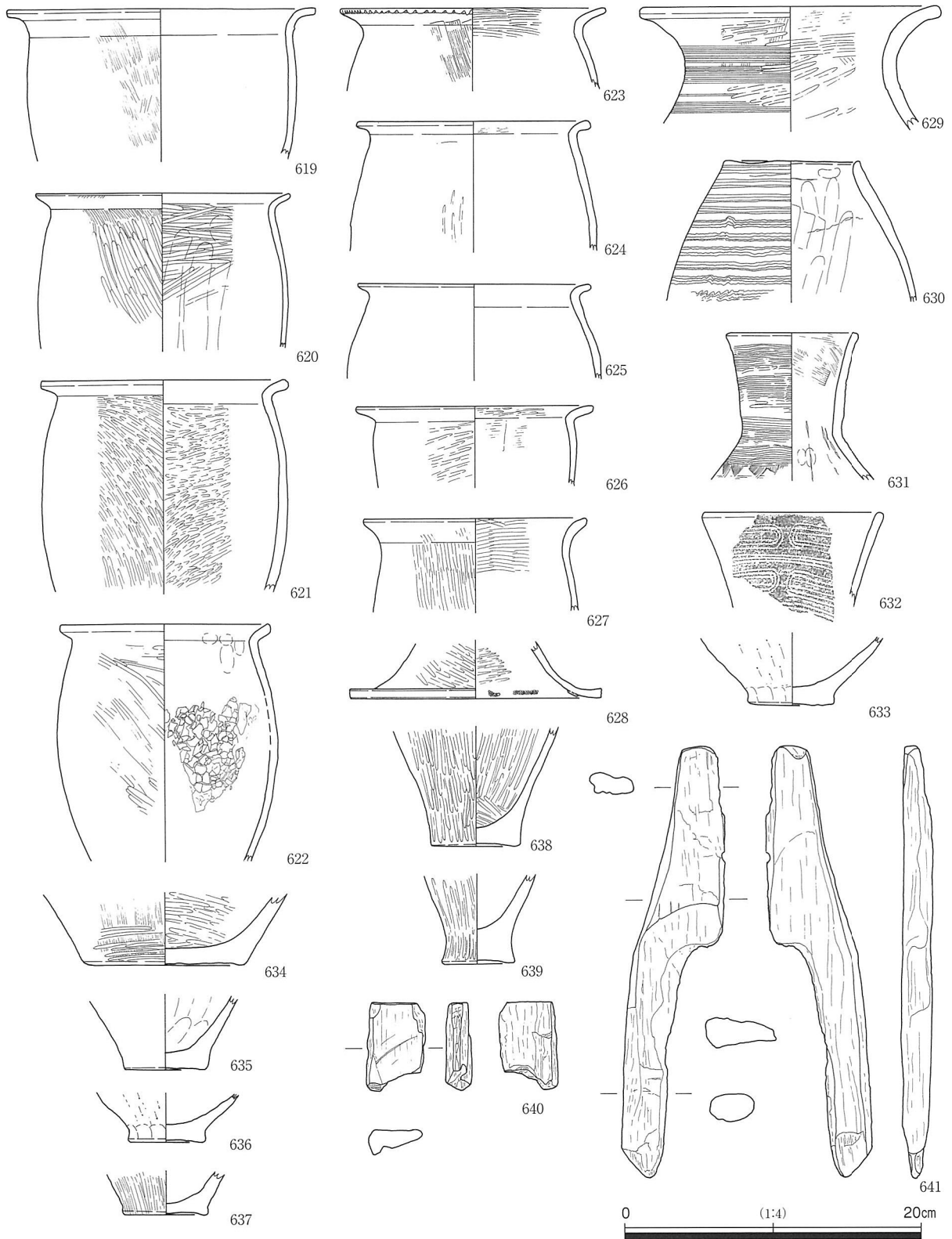


図97 第7層 出土遺物 (1)

なお、遺構番号は付していないが、大畦畔554南西端の、筋堀を挟んだ南側では畦畔状の高まりが検出されている。大畦畔555の南西延長部に当たり、大畦畔の可能性も考えられるが、不明瞭な高まりとしてしか検出されなかった。また、大畦畔554南西端の南西側では畦畔状の高まりが検出された。いずれもほとんど高さはない。大畦畔554に接合していたものと考えられる畦畔である。

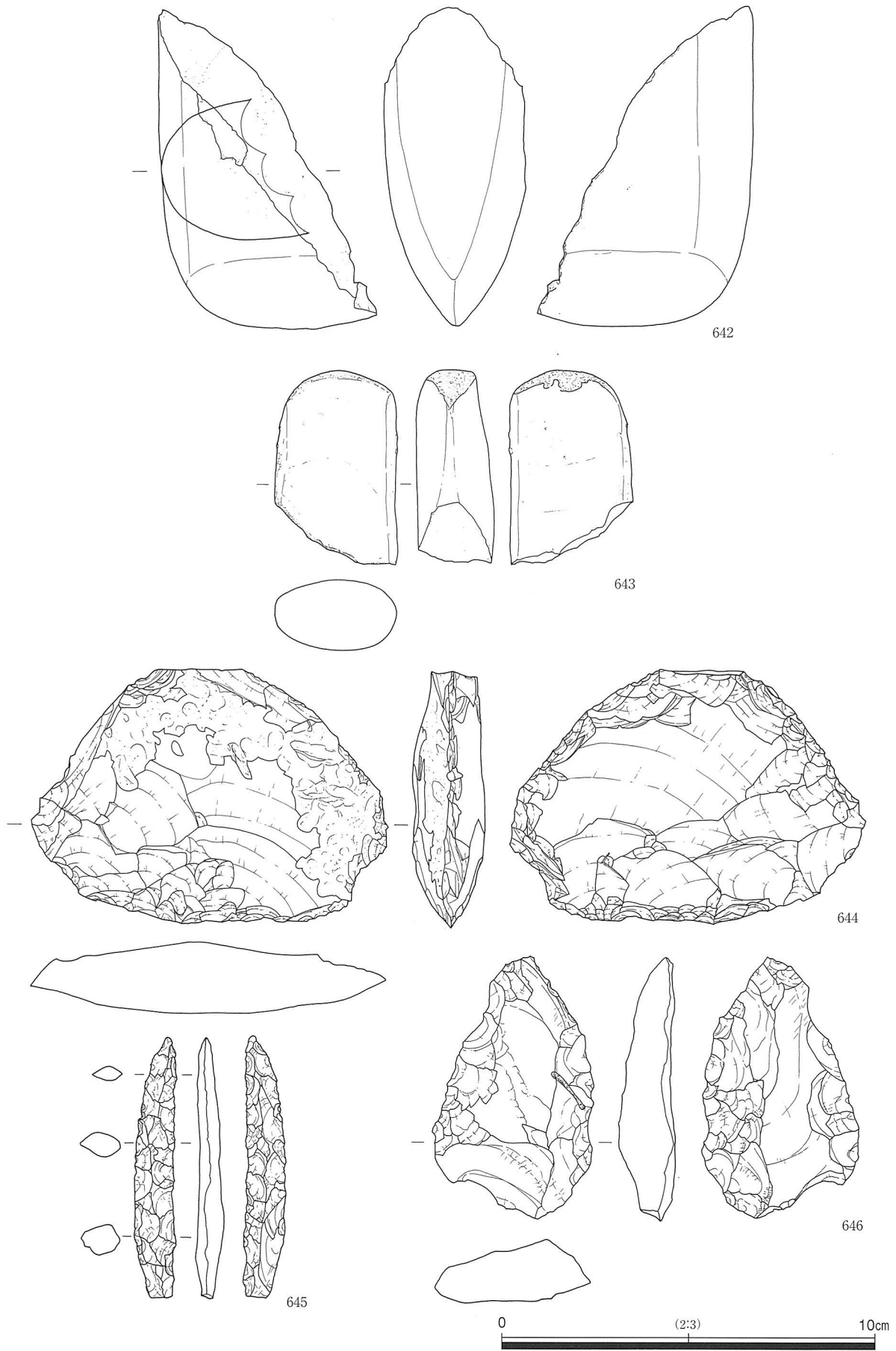


图98 第7层 出土遗物 (2)

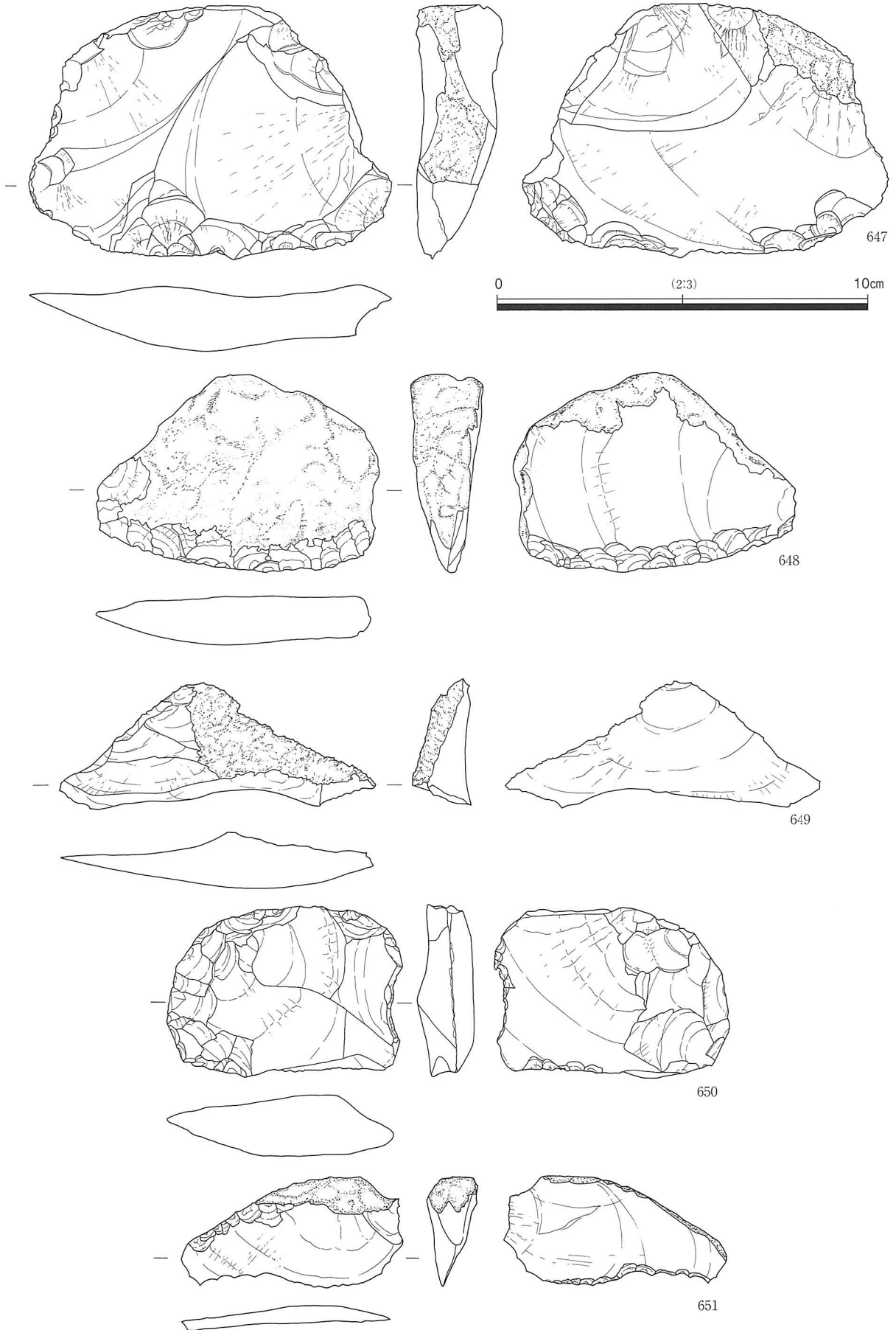


図99 第7層 出土遺物 (3)

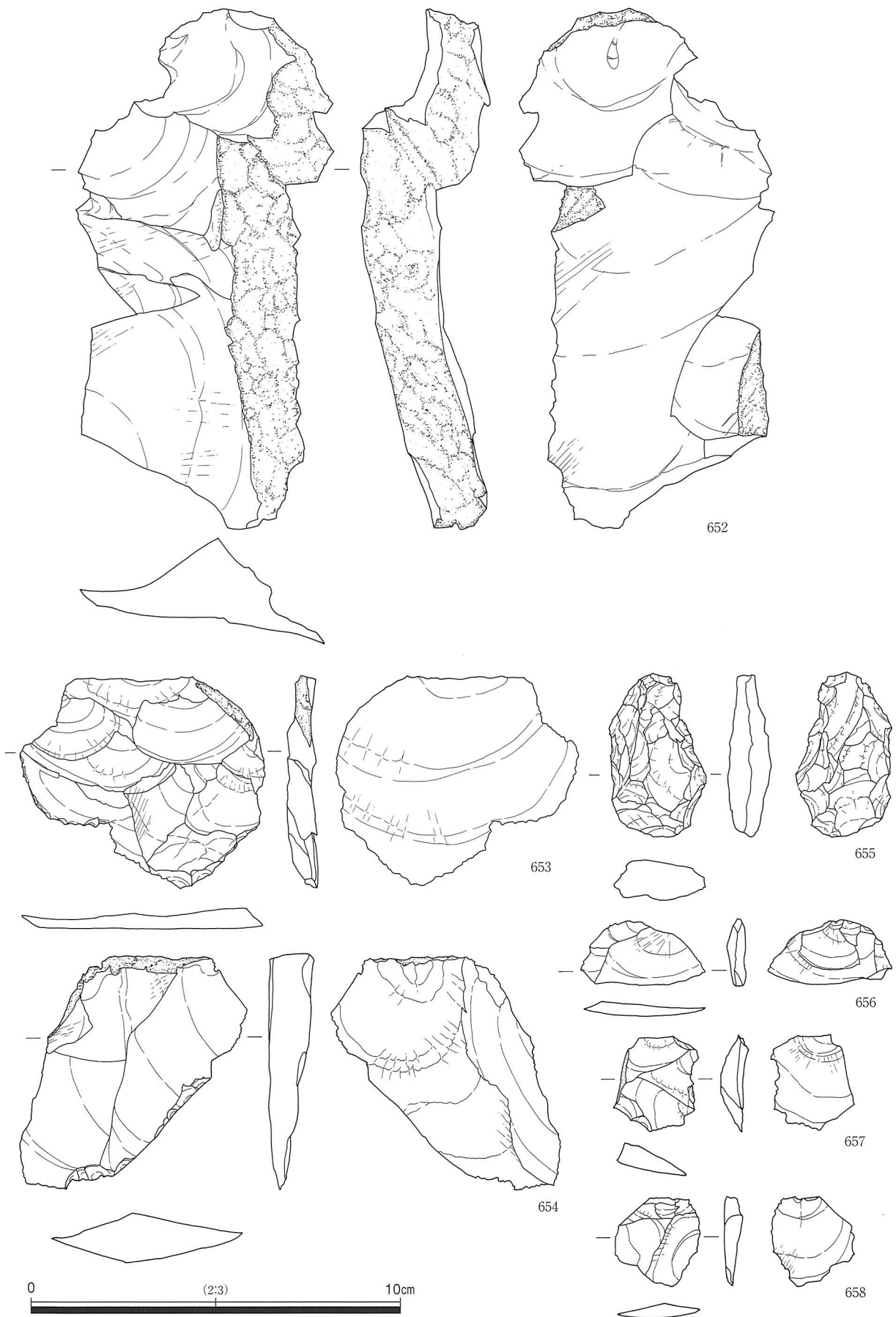


图100 第7層 出土遺物 (4)

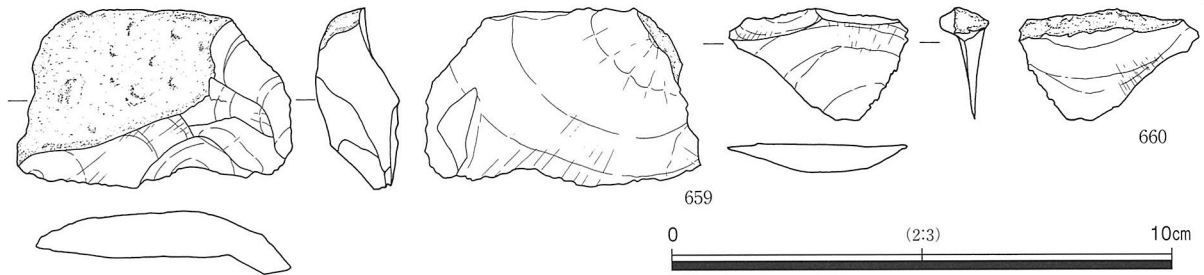


図101 第7層 出土遺物 (5)

擬似畦畔557は調査区東半中央部の大畦畔554から北西にのびる、下層の青灰色粘質シルトが露出して見えた擬似畦畔である。擬似畦畔557と大畦畔554の接合部分は検出されなかったが、推定接合部分で、大畦畔554が若干北西に膨らんでおり、大畦畔に接続するものと思われる。なお、大畦畔が検出されているため、小畦畔の検出も試みたが、検出はされなかった。

なお、擬似畦畔557以西は、第6b面段階の攪乱により遺構面が残存しないが、もともと低まった箇所当たり、水田域が広がっていた可能性はあるが、ここが西限に近いものと思われる。

出土遺物 (図97～101) 第7層からは、破片の概数で弥生土器片447点、石器・剥片21点が出土した。619～627は甕。619は口縁部を強く外反させる。外面縦ハケ、内面ナデ。口縁部を除く体部上半全体が煤化。Ⅱ様式前半か。620は内外面ミガキ。外面頸部にはハケが、内面下部にはナデが見られる。621は内外面ミガキ。全体が煤化、体部上半から口縁部外反部分に煤が付着している。622は外面ミガキ。口縁部直下に煤が付着する。内面は、体部最大径付近に3mm以上の厚さでバンド状に炭化物が付着しており、内面の調整は不明。非常によく炭化しているため、残滓が何かは特定できない。炭化米や弥生時代甕の使われ方から、コメの可能性が考えられる。620～622はいずれもⅡ様式中頃の河内形甕。623は大和型甕か。口縁部内面のハケは粗く、大和型甕に特有なものだが、外面のハケは細かい。全体的に煤化著しい。Ⅱ様式末頃。624は外面に僅かにミガキが残存。内面はナデで、口縁部は横ハケ。口縁部端部～体部上半全体に煤が付着している。Ⅱ様式。625は口縁部内面～外面体部上半全体が煤化のため、外面の調整不明。内面はナデ。口縁部内面は帯状に炭化物付着がみられ、蓋を使用した可能性がある。Ⅱ様式。626は外面と口縁部内面に横ミガキ。体部内面は横ハケ後ナデ。頸部の屈曲が比較的明瞭。外面全体が煤化。Ⅲ様式初頭か。627は摂津型甕か。内外面にハケ調整がなされているが、口縁部外面はナデ消す。口縁部の外反がゆるやかである。Ⅱ様式前半。628は甕蓋。内面に帯状に炭化物が付着。口縁部端部は強い横ナデにより擬凹線風を呈する。Ⅱ-3様式。629は広口壺。外面は縦ハケを施し、櫛描直線文を施文したのちミガキ。内面は頸部以下が粗いミガキ、口縁部は横ハケ。胎土に焼粘土粒が若干混じる。口縁部端面が丸く、頸部上部から櫛描直線文が施文されていることからⅡ-2様式と考えられる。630は無頸壺。口縁部がゆがみ、直下から稚拙な3段の櫛描直線文と波状文が施文されている。Ⅱ-3様式。631は細頸壺。外面に15条の粗い櫛描直線文ののちミガキを施す。最下段の櫛描直線文下端には扇形文を施す。内面はハケのちナデで、頸部以下には指頭圧痕が見られる。口縁部端部は平坦に整形される。Ⅱ-3様式。632は壺。外面は、口縁部直下から縦ハケののちヘラ描の流水文が施文される。Ⅱ-1様式。633は甕底部。外面がケズリであることから、紀伊型かとも思われるが、煤化の影響もあり胎土に片岩は確認されなかった。底部外面から体部にかけて内外面とも煤化。634は壺底部で内外面横ミガキだが、体部外面が煤化。635～639は甕底部。635は外面全体に煤が付着。636は633同様外面ケズリ。内面が著しく煤化している。胎土は白いが、やはり片岩は確認されなかった。

633～636はいずれもⅡ様式と考えられる。637は外面ハケ、内面ナデ。内外面とも著しく煤化し、内底面から体部にかけて炭化物が残存している。638・639は河内形甕の底部。638は内外面ともミガキ。外面煤化。639は外面ミガキ、内面ナデ。二次焼成を受け赤褐色に変色し、内底面～体部にかけて煤化。

640は不明板状製品。下端面は欠損、小さな板状に加工されている。用途は不明。樹種はコナラ亜属。641は曲柄又鋏身CⅡ式 [奈良国立文化財研究所1993：59]。軸部と刃部の境が不明瞭でなで肩。刃部が扁平ながら肉厚であり、類例が扁平であるのとは様相が異なる。約1/2を欠損。図面右側の片面が全面的に被熱により炭化している。樹種はヒノキで、類例はカンが主であるのと異なる。

642は磨製石斧。断面形は円に近い楕円形（平井分類Ⅱb類） [平井1991] で、刃部の研磨は丁寧である。斑禰岩製。643は独鈷石か。上端面は敲打により丸く整形され、両側縁は下方に向かいやや末広がりに整形している。粗粒アルコース砂岩製。644～660はサヌカイト製。644はスクレイパー。自然面の残る大型の剥片に側縁に調整を施し、1辺を刃部に仕上げる。645は完形の石小刀。第6層～第7層から出土した。非常に小さいが、刃部と基部で断面形状が違い、つくり分けがなされていることがわかる。基部は折れ。646は両面調整石器。剥片の2辺に調整を施している。647はスクレイパー。1辺に剥離を施している。648は亜円礫を利用したスクレイパー。腹面にも自然面がまわることから、扁平なサヌカイト礫を調整し、刃器を製作したと考える。649は剥片。650・651は二次加工のある剥片。一側縁に剥離を施している。652～654は剥片。652は今回出土した最大の剥片である。653は母岩の加工が進んだ後の剥片であろう。655は楔形石器。背面からの両極打撃が行われる。両側縁、基部に加工を施している。656～660は剥片。656～658は製品製作途上に産出される剥片である。また、これ以外にも第7層中からは砂岩、閃緑岩の自然礫が出土している。

時期 以上の遺物は、概ねⅡ様式の範疇に収まるものである。第6b層の時期幅と変わらないが、この時期には頻繁に面の更新が行われたようである。

第7b面 (図102) 第7層土壌化層を除去し、検出されるのが第7b面である。面の高さはT.P.0.0～0.2m。地形は、第7面同様で調査区南西端が最も高い。その東側の第7面高まり533を除去した部分以东が急激に低くなり、調査区中央部は低まり、調査区東端で再びやや高まる。第7層は、調査区南西部で土壌化が顕著で、下層の第7b層を攪拌した砂質度の強い土壌化層であった。層中に多量の遺物が含まれ、第7b面では遺構が集中して検出された。それと異なり、高まり533部分より北東以东は土壌化がさほど顕著ではなく、粘性の強い粘土～シルトの土壌化層で、当面では溝を主体とする遺構という大きな景観的相違が見られた。

検出された遺構は、第7面の高まり533を除去した微高地と調査区南西端の微高地の2箇所特に集中している。以东では、数基の特徴的な土坑と掘立柱建物が検出された以外、すべて溝である。また、調査区東半は第6層段階の攪乱によって大きく削平されているため、現状では遺構密度が低い。しかし、基本的に不安定な低まりであることから、密に遺構が検出されるような箇所ではないと推定される。

遺構埋土のほとんどは第7層の落ち込んだものである。しかし、特に溝629より南西側の遺構埋土は、この部分の第7b層が他の箇所より粗粒であり、その砂層を巻き上げており、埋土の様相が異なる。遺構は、溝、土坑、ピットが検出された。以下では、攪乱により分断されていることもあるが、遺構密度も異なることから、東半と西半の遺構に分けて記述する。出土土器は特に記さない限り弥生土器である。

東半の遺構 東半では、やや特異な土坑が1基見られた以外は、ほとんどが溝である。なお、この部分は、西半で見られた第7層に対応する層が見られなかったため、第6層を除去し検出された面が、第7b層上面である。なお、西半との層の対応関係であるが、除去した第6層を覆う層は西半より延長の第5b層であり、下層には同様に西半より延長の第7b層が存在したため、本面を第7b面としたものである。

土坑 土坑は2基検出された。**土坑630** (図103、写真111) は、調査区東半の中央南端で検出された。第6面で大畦畔状の高まりが検出された北東側にあたる。東側を第5b層による攪乱で切られ、西側も溝584に切られている。長径2.2m、短径1.9m、深さ0.13m。検出時に既に上面が削平された状態だったが、壺2点が、口縁部を北東方向に向け、ほぼ平行に並んで出土した。

土坑630出土遺物 (図104) 2点のほぼ完形の広口長頸壺が出土した。**661**は、6条の櫛描直線文が11段、頸部中ほどから体部上半にかけて施され、その後、縦方向の5条の波状文がほぼ等間隔に3方向に施されている。内面は指頭押圧のちハケ。体部には焼成後の打ち欠きが見られ、割れ口は摩滅している。また、口縁端部を欠くが、口縁部も摩滅しており、体部の打ち欠き共々何らかの意味があった可能性が考えられる。体部には打ち欠き以前に施されたと思われる赤彩が僅かに残存する。なお、縦方向に波状文を施す資料は類例に乏しく、近畿以東的な要素と考えられる。**662**は、9条の櫛描文が頸部に6段、体部上半に2段施される。内面は指頭押圧のち頸部～口縁部にハケを施す。焼成後に体部の最大径付近に外面から穿孔がなされている。**661・662**とも類似した器形であり、体部上半櫛描文上に、所々ベンガラを塗布した痕跡が若干残存する。いずれもⅡ-1様式。

出土した土器のいずれにも意図的な破碎、穿孔が見られることから、この土坑は祭祀的な土坑と考えられる。上面で大畦畔と思しき遺構が検出されたことを考えれば、水田祭祀の可能性が考えられる。

土坑631は土坑630の西側で検出された。径は約1.25m、深さ9cm。埋土は土坑630と同様。出土遺物は、土器片4点のみ。いずれも壺と思われる小片で、6条以上の櫛描直線文が見られる破片を含む。小片のため、詳細な時期は不明だが、Ⅱ様式の範疇に収まるものであろう。

溝 溝は17条検出された (溝573～589)。まず、東側の第6面で大畦畔554が検出された南側では、**溝573**が検出された。南西に向かい不明瞭になるが、痕跡状に色調の変化部分が見られた。**溝575**は大畦畔555北側での検出である。**溝574**はそれらを繋ぐように掘削された溝。これらの溝は、他の溝に比べやや規模が大きい。大畦畔付近に掘削されていることから、大畦畔構築の際に掘削された溝の可能性も考えられる。**溝576～583**はいずれも細い溝。溝578が地形に平行し掘削されている他は、いずれも地形に直交して掘削される。**溝584・585**は第6b層による攪乱の南西側で検出された。上面では、大畦畔状の盛り上がりを確認された部分である。溝584は土坑630・631間で検出された。**溝586～588**は上面で擬似畦畔が検出された部分に当たる。**溝589**は上面が自然地形の微高地部分に当たる。このように、溝の多くは、上面の水田関連遺構検出部分であり、耕作に関する溝と考えられる。なお、いずれの溝からも出土遺物はない。

西半の遺構 (図106) 調査区西半東側は上層からの攪乱で遺構は見られない。西側ほど遺構の分布が密であり、この部分が居住域であったと考えられる。なお、第7面の高まり553の盛土と同時に盛土以前の第7層も除去した。その結果、盛土以前の第7b面と溝629を挟んだ西側の第7b面のレベルがほぼ同一であった。また溝を挟んで遺構が寸断されている状況であることから、溝629部分に第7面当初には、溝がなかった可能性も考えられる。また、その縁辺に近い部分で特異な遺構が検出された。

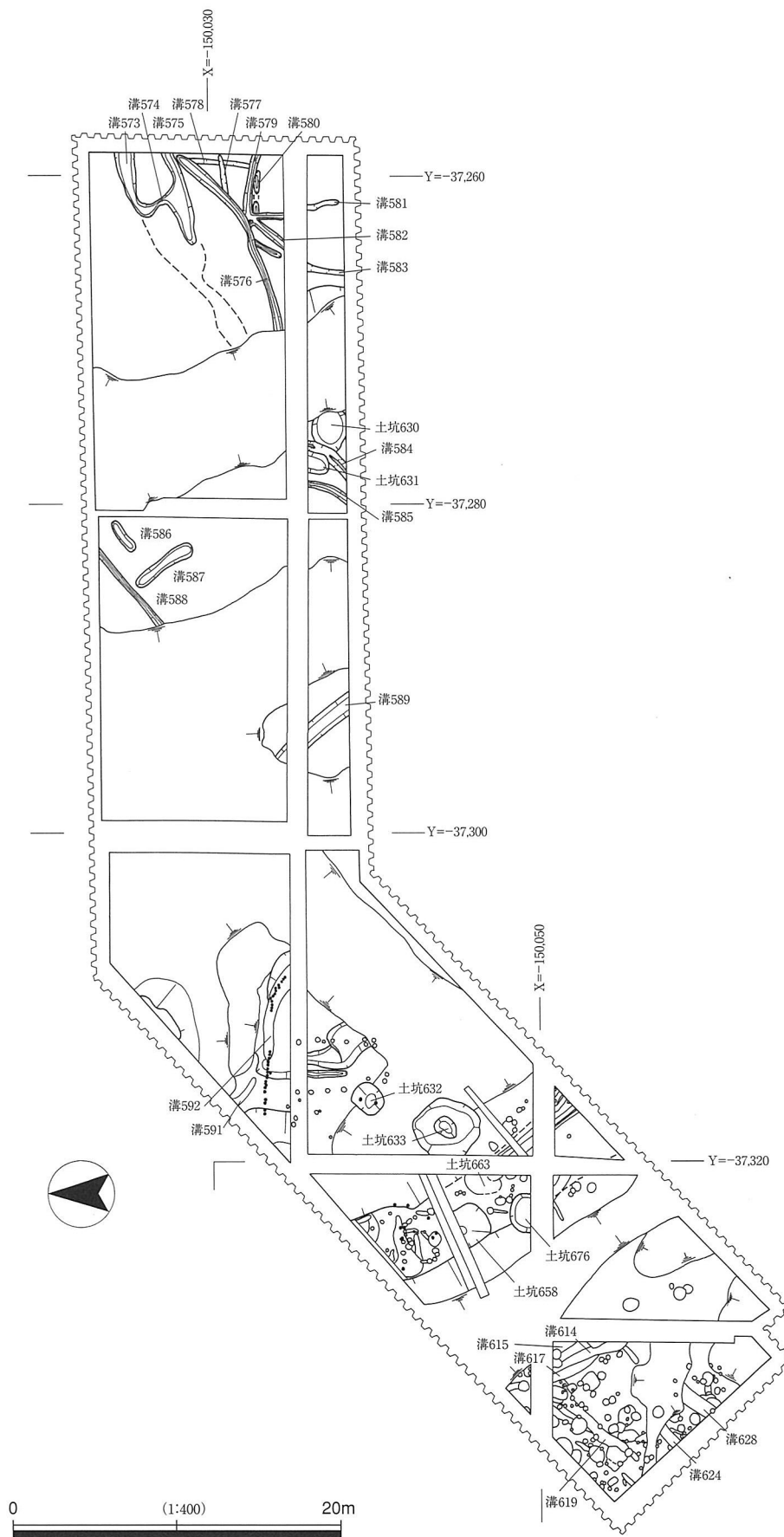


图102 第7 b面 平面图 (S=1/400)

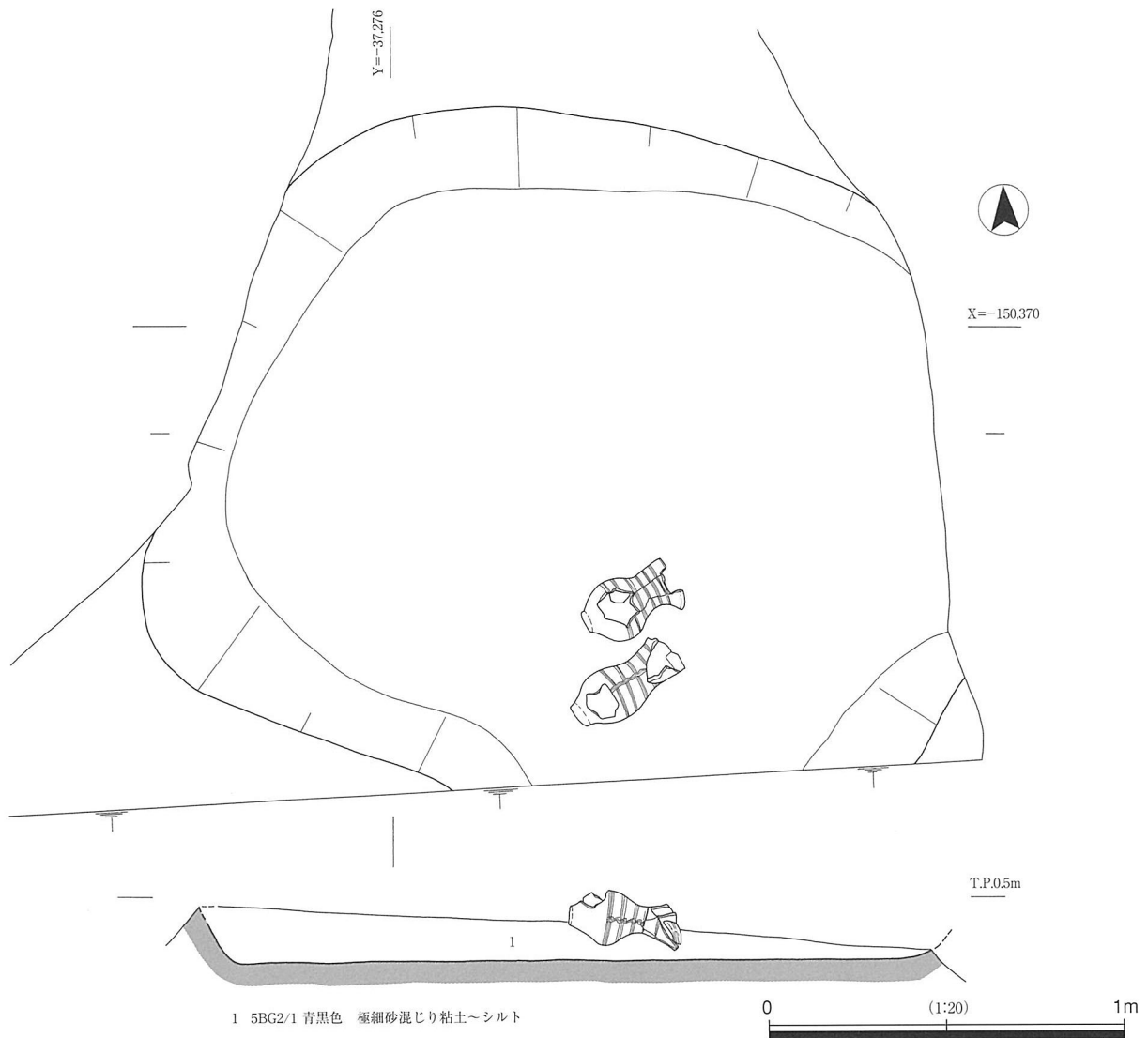


図103 土坑630遺物出土状況・断面図（断面図中の遺物は南からの見通し）（S=1/20）



写真111 土坑630土器出土状況（東から）



写真112 土坑632（南西から）

溝 溝591・592は後述する掘立柱建物の北側での検出。第7面の落ち込み562の肩部形状に一致するような掘削であり、この落ち込みに関わる溝であろう。また、溝592上では杭列も検出されており、これらは関連性のある遺構であろう。出土遺物は、溝591から甕小片1点、溝592から図118-717を含む、土器片3点が出土。遺構番号593は欠番。溝594は掘立柱建物部分での検出。土器片2点出土。掘

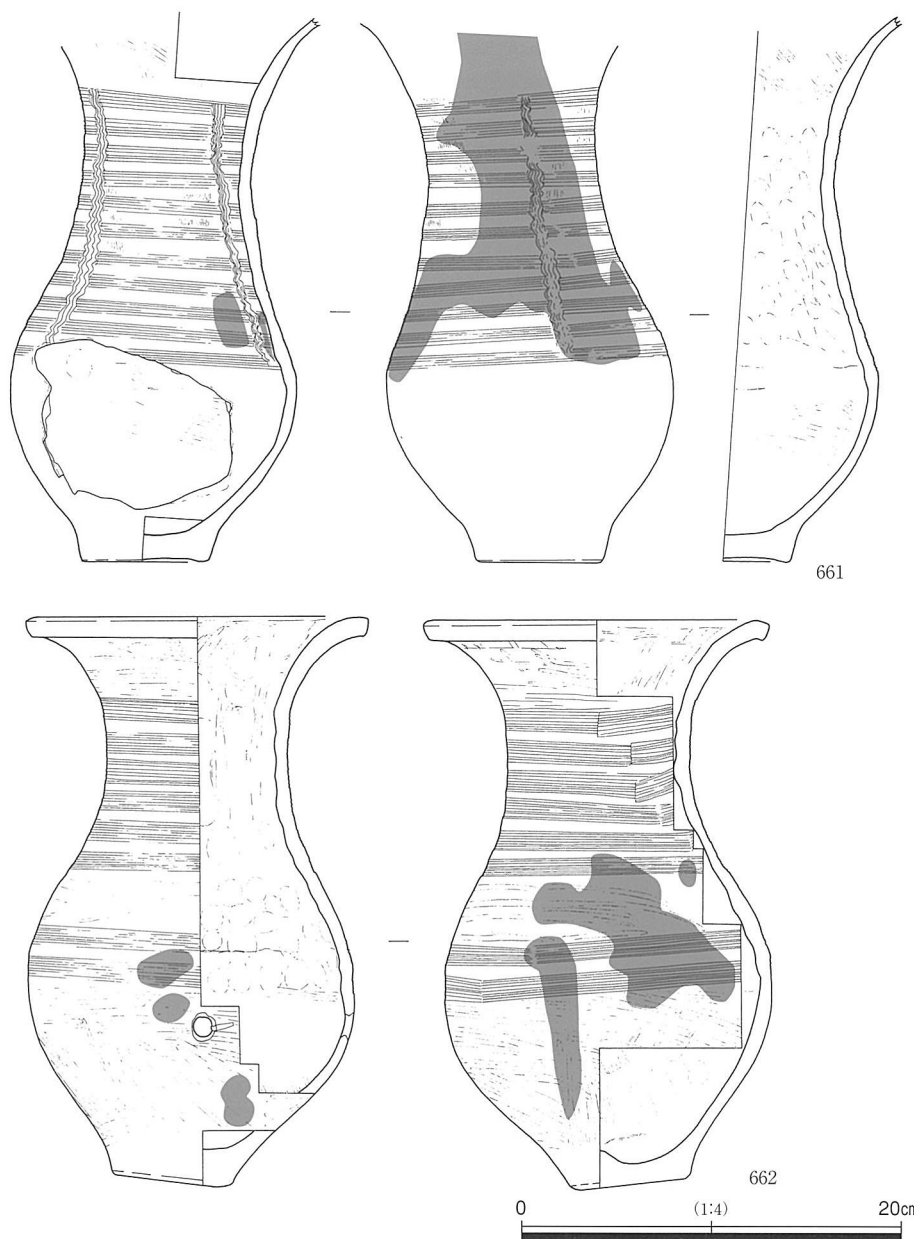


図104 土坑630 出土遺物

らの遺物の出土はない。南端部分では溝606～610の平行した溝が検出された。溝608から甕片1点が出土した以外に遺物の出土はない。溝611はその西側で僅かに検出された溝。遺物の出土はない。溝612は溝629際で検出された。壺と甕の破片が1点ずつ出土した。詳細な時期は不明だが、Ⅱ様式～Ⅲ様式。溝613は溝612に切られる。6条の櫛描直線文を施す壺片など5点が出土。Ⅱ様式。

第7面高まり553を除去した部分から検出された溝は、周囲との位置関係などから大きく3つに分類することが可能である。第一は、高まり553除去部分の東縁辺部に、高まりと軸を同じくして掘削されている溝群である。溝596・597・606・609・610がこれにあたり、高まり北端部と南端部に分かれて検出された。しかし、高まり東縁辺部に軸を同じくしていることもあり、これらのうちいくつかは同一の溝であった可能性が高い。この部分は高まり造成以前においても微高地縁辺部にあたることなどから、居住域を区画する溝などの可能性が高い。第二は、高まり553北部の平坦面にL字型に掘削されている溝である。溝599・600・601・604などがこれにあたる。この付近には土坑657などの炭層が堆積した土坑などピットが集中している。また、これらの溝がほぼ同様な方向でL字型に掘削されていることを

立柱建物より埋土が比較的鮮明であったため、それ以後の掘削であろう。

第7面の高まり533を除去した部分では、北西端で溝596～600が検出された。溝600を除き、いずれも細い溝であるが、埋土はいずれも同様。溝596からは7条の櫛描直線文が見られる壺片2点が出土。中期前半か。溝598からは外面にミガキの見られる壺片が1点出土。溝597・599からの遺物の出土はない。溝600はやや太めの溝で直角に屈曲する。ピットに切られる。図118-715を含む、土器片9点とサヌカイト片1点が出土。溝601～605は土坑658周辺で検出された。いずれも小規模な溝。溝601から壺小片が1点出土したのみで、他の溝から

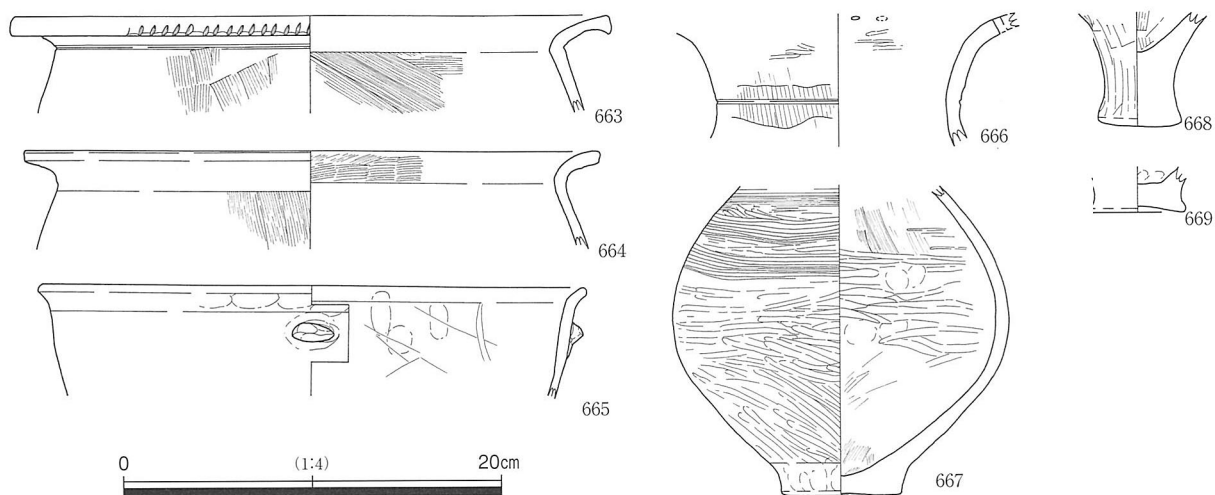


図105 溝629 出土遺物

考えると、建物などに関わる周辺溝の可能性が高い。第三は前二者以外の溝であるが、特徴もなく溝の位置づけは不明である。

溝614・617（写真128）・615は溝629北西際で検出された。いずれも北西－南東方向を指向する。いずれの溝も東南に向かい下がるが、筋堀を挟んだ南東での延長部分の検出はない。埋土はやや淡色のシルトブロックまじりの黒色（10Y2/1）細～粗砂。これらの溝に直交するように北東－南西を指向する溝618、619、624、628が検出された。埋土は、溝618・619が黒色（7.5Y2/1）中～細砂、溝624がオリーブ黒色（7.5Y3/1）中～細砂、溝628がオリーブ黒色（5Y3/1）のよく攪拌された細砂～シルト。溝群の時期差は不明だが、ピット群に切られ、ピット以前の掘削と考えられる。

なお、出土遺物は、溝614から土器片10点、溝615から土器片51点、サヌカイト片3点、溝618から土器片3点、溝619から土器片5点、溝624から土器片1点、溝628から土器片7点。詳細な時期は不明だが、Ⅱ様式の範疇に収まるものと思われる。

溝617・619出土遺物（図113） 711は壺。9条の櫛描直線文が残存部で5段見られ、櫛描直線文間にはミガキ。内面は剥落のため調整不明。712は甕底部。外面縦ハケで一部に横ミガキがみられ、内面ナデ。底部外面はミガキ。外面の一部が煤化。713は甕底部。内外面ともナデ。714は土器転月土製円板。外面ハケ、内面ナデであり、甕転用であろう。いずれも詳細な時期は不明だが、Ⅱ様式の範疇に収まるものだろう。なお、取り上げの際混同してしまい、いずれの溝からの出土かは判然としない。

溝616と溝621は近接し、調査区西端で検出された。溝620はその東側にあり、土坑747に切られる。いずれも埋土は黒色（10Y3/2～7.5Y2/1）細～中砂で、出土遺物はない。溝622は痕跡程度の検出で、南を攪乱に切られる。埋土はオリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂で、出土遺物はない。溝623は溝614に切られる。南西延長には溝628があり、同一の溝の可能性も考えられる。埋土は黒色（10Y2/1）細～粗砂。甕片、広口壺片など7点出土。Ⅱ様式。溝624は溝619に平行するようにその南西で検出された、同様の幅広の溝。埋土はオリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂で、土器片1点が出た。溝625～627・809は溝628の西側で密集して検出され、埋土は溝625・809が溝624同様、溝626・627は溝628同様。いずれからも出土遺物はない。溝628は調査区南西端付近で検出されたやや幅広の溝で、埋土はオリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂。土器片が7点出土。内外面ともミガキの壺片がほとんどだが、1点は外面ハケで、煤化著しい甕片。いずれもⅡ様式の範疇に収まるものであろう。

以上の溝は、小規模なものがほとんどである。また、ほとんどが土坑やピットに切られる。しかし、

溝629北西際に見られた溝614・617と、それと概ね直交する溝619・624・628（622）は、いずれも幅広の溝である。前者は南延長では検出されず、遺構の密度から考えると、遺構を囲むように、溝の延長は筋堀中にあるとも考えられる。これらの溝は、先述の第7面高まり553を除去し検出された溝の第一に分類した溝と同様の意味を持った溝であろう。一方、後者は等間隔の掘削であるが、等間隔であることの意味は他の遺構からは看取されなかった。これらの溝は西側に展開する居住域から東への排水用の溝の可能性が考えられる。

溝629は、第7面溝563の肩部に見られた第7層を除去し検出された。

溝629出土遺物（図105） 弥生土器片157点が出土した。663は甕。口縁部を強く外反させ、端部を平坦にし、やや下垂させて刻み目を施す。頸部の屈曲は比較的鋭い。外面には口縁直下に強い横ナデを施した後、縦ハケ、口縁部に内面は横ナデ、体部内面は細かい斜めハケ。Ⅲ様式。664は甕。口縁部を外反させ、端部は若干擬凹線状を呈す。口縁部外面はナデ、体部は縦ハケ、内面口縁部に横ハケ、内面にナデを施す。口縁部外面が煤化している。Ⅱ様式。665は瘤状突起を持つ鉢。内外面とも指頭押圧のちナデ。瘤状突起は先端がやや摩滅するものの、小振りでありⅠ様式新段階～Ⅱ様式。666は広口壺。内外面は剥落が著しいが、横ミガキが見られる。口縁部には穿孔が施され、頸部は貼付突帯が剥落した痕跡が見られる。この部分は、ハケ後に沈線を施し、突帯を貼付けたものと思われる。Ⅱ様式初頭。667は壺。外面は横ミガキのちハケ様の櫛描直線文が施される。内面上半は縦ハケ、体部半ごろは指頭押圧のち横ミガキ。Ⅱ様式。668・669は甕底部。668は細長い底部。底部外面の一部と外面、内面全体が煤化。669は内外面ともナデ。全体が煤化している。

以上のように、Ⅰ様式新段階～Ⅲ様式の土器が出土しているが、同一箇所比較的長期間にわたって機能していた溝であり、実際、異なる段階として検出した溝から出土した土器片が接合した例も見られた。また、上面までと大きな時期差は見られないが、当面段階では、若干古相の資料が見られた。これが、積極的に評価できるような資料とは考えにくいものの、以上の出土遺物、および上面・下面の時期から、第7b面段階の溝の機能時期は、弥生時代中期前半と考えられる。

土坑・ピット 図186に沿って大きく上から下（北東から南西）に向かって記述する。なお、多くのピットが検出されているが、遺物が伴うものは全ピットの約19%にあたる31基のみである。

土坑632（写真112）は、調査区中央よりやや西南の落ち込み肩部分で検出された。長軸2.0m、短軸1.6m、深さ0.56m。埋土は第7層である。土坑の中心に2本の杭が検出されたが、杭の先が土坑底部まで達しておらず、土坑機能段階ではなく、埋没後の打設と考えられる。杭以外の出土遺物はない。この土坑周辺ではピットが多く検出され、多くが掘立柱建物を構成する。これらについては後述する。

以下の遺構は、第7面高まり553を除去し検出された遺構である。

土坑633（図107・写真113・114）は、長軸4.2m、短軸3.35m、深さ0.72m。埋土は12層に細分され、基本的にラミナが見られるシルトと細砂からなり、緩やかな流水堆積で埋没したと推測される。

この土坑の中央付近で、底部からやや浮いた状態で赤彩の施された壺（図109-692）、壺体部（同690）、不明木製品（同695）、細粒閃緑岩・礫、イノシシ下顎骨（写真135：骨-5）が出土した。なお、細粒閃緑岩製の礫が他の遺物より若干高いレベルで出土した以外は、いずれの遺物もほぼ同レベルで出土した。また、土坑の南角では図109-694を含む大型の木材がまとまって出土した。

土坑633出土遺物（図108～110） 弥生土器片359点の他、木製品5点、石器3点、サヌカイト石器・剥片11点、自然礫1点、動物遺体17点、貝1点、植物遺体が出土した。670～688は甕。670は口縁

を外反させ、端部に面を持つ。外面は横ミガキ。内面はハケのち横ミガキ。Ⅱ様式後半。**671**は頸部の屈曲は鈍く、短い口縁がやや外反する。外面はケズリ。約9cmほどの幅で、縦方向帯状に煤化し、炭化物が付着する。紀伊型か。Ⅱ様式。**672**は体部外面縦ハケ、のち一部横ミガキ。内面は口縁部が横ハケ、体部が斜めハケで一部横ミガキ。頸部の屈曲はシャープ。全体が煤化し、外面一部に炭化物が付着。**673**は672と類似する調整、器形。672よりやや小振りで体部が張る。全体が煤化し、特に口縁外面の屈曲部分に炭化物が付着する。いずれもⅢ様式か。**674**は口縁部が短く内面がやや煤化。口縁端部はやや平坦。内外面ともミガキ。外面煤化。Ⅱ様式前半。**675**は口縁が短く、きつく外反し、内面平坦面に横ミガキ。外面の一部に煤付着。体部が張らず、Ⅱ様式初頭。**676**は頸部の屈曲が鈍く、端部を丸くおさめる。体部外面は縦ハケ、口縁部は横ナデ、内面は体部横ナデ、口縁部横ハケ。外面煤化。**677**は676に類似するが、口縁部の外反がやや強い。口縁部外反部分の1cmほどの部分は特に煤化が著しい。それより内面は煤化しておらず、蓋を用いた煮沸等を行った結果、蓋に覆われない部分のみ煤化したものと考えられる。676、677とも摂津型か。Ⅱ様式前半。**678**は全体が二次焼成を受け、淡い赤色に変色している。外面が大きく剥落し、内面は底部付近と体部中央付近が帯状に煤化。外面の調整は縦ナデ、内面は指頭押圧のち体部ナデ、口縁直下は斜めハケ、口縁部は板状工具による横ナデが施される。底部破断面にも煤化が及んでいることから、破損ののち二次焼成を受けたか、使用中に破損した可能性がある。Ⅱ様式前半。**679**は10cm弱のコゲバンドがみられる。外面ミガキ、内面ハケ。Ⅱ様式。**680**は土坑657出土の破片5点と土坑633出土の破片1点が接合された資料である。外面は縦ハケのち下半のみミガキ。胎土は非常に密で、他の土器に見られる約1mm程度の砂粒がほとんど見られない。外面の体部中央付近が煤化し、その内側にあたる内面も煤化している。底部～体部下半の断面は、点線で表現している部分を境に、色調が大きく異なり、内側が黒色化している。これは接合痕の反映と考えられ、底部から体部下半の製作時には、外面を製作した後に内面から粘土を充填して製作したものと考えられる。接合痕を境とした熱伝導の差異のため、この色調の違いが起こったものと考えられる。また、680の土器は今回の調査唯一の遺構間接合資料である。土坑633は先述のように、赤彩土器やイノシシの下顎骨が出土する特異な土坑である。一方の後述する土坑657も、当遺跡で唯一焼土を埋土とする特異な土坑である(図111・写真117)。これら2つの遺構間で土器が接合され、その土器自体も他の土器よりも、胎土が極めて密であることは、土器を考える上でも、遺構を考える上でも非常に示唆的であるといえる。Ⅱ様式。**681**は底部から細く立ち上がる。外面は縦ハケ。器高7cm付近を境に、それより下部はほとんど煤化がなく、外面には炭化物が分厚く付着している。内面は下半を中心に煤化している。**682**は口縁部が小さく外反する。体部外面は斜めミガキ、口縁部は内外面ともミガキ。全体が煤化しており、外面には点々と炭化物が付着している。Ⅲ様式か。683～686は河内形甕で外面はいずれもミガキ。**683**は内面ナデ。二次焼成を受け、外面は剥落。**684**は内面ミガキ。体部は細く、開かない。680同様、断面の観察できる資料である。底部の成形は、筒状の体部を製作した後、内外面の両方から粘土を充填する。つまり、断面形からみると体部、底部内面、底部外面の3パーツが観察でき、2パーツで製作された図83-487との類似性が看取される。また、先述の680のような資料もあり、当時の甕製作技法のバリエーションをうかがう上で興味深い。**685**は内面ナデのちミガキ。底部より器高1cm付近の外面約2/3周が煤化し、内面の一部に炭化物が付着する。底部中央に穿孔見られ、内面には焼成前穿孔に伴う粘土の盛り上がりが見られるが、穿孔内に煤化による痕跡が見られないこと、外面より焼成後穿孔の痕跡が見られることから、おそらく焼成後に、再度外面より穿孔が施されたと考えられる。外面の器高1cm付近全

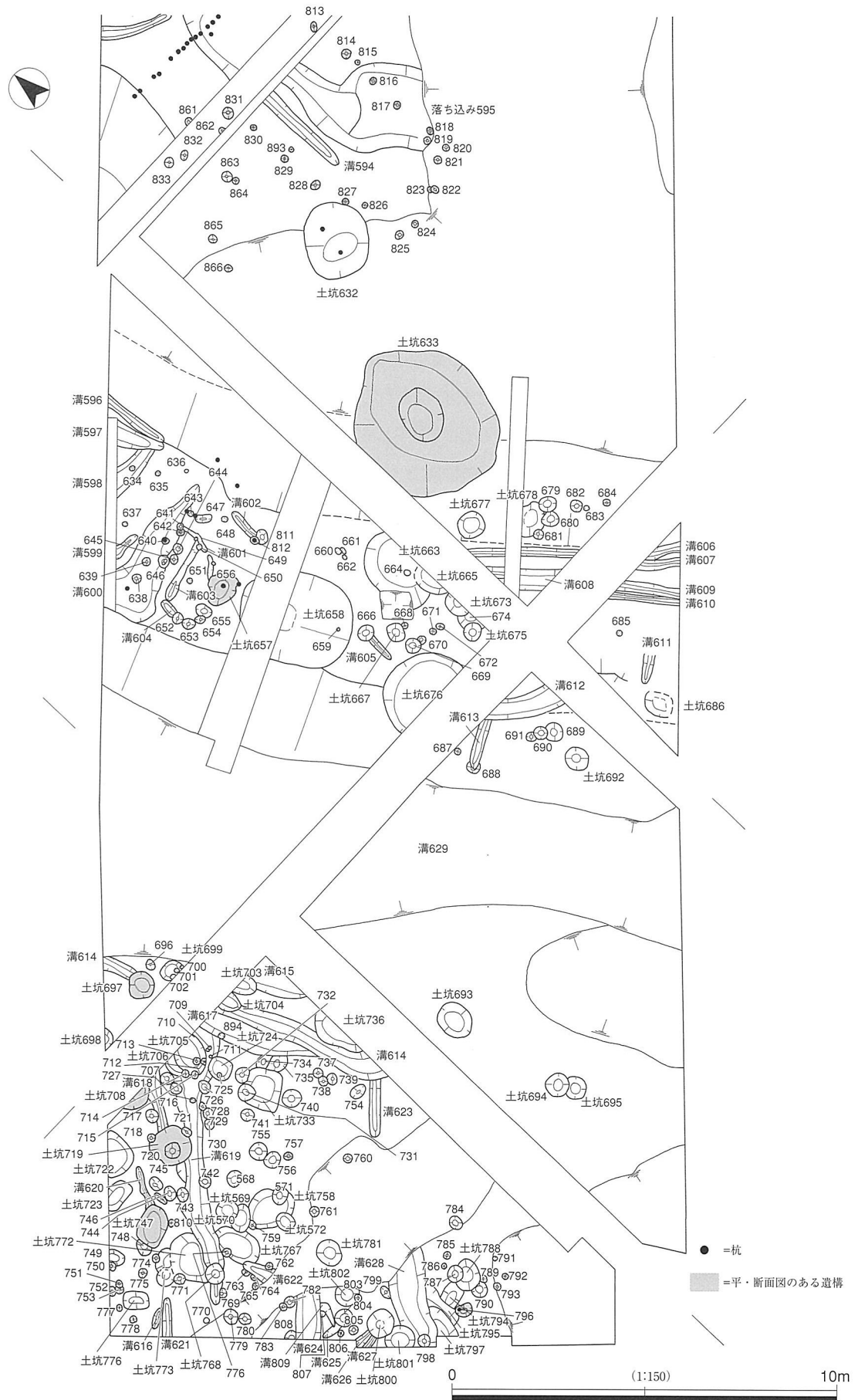
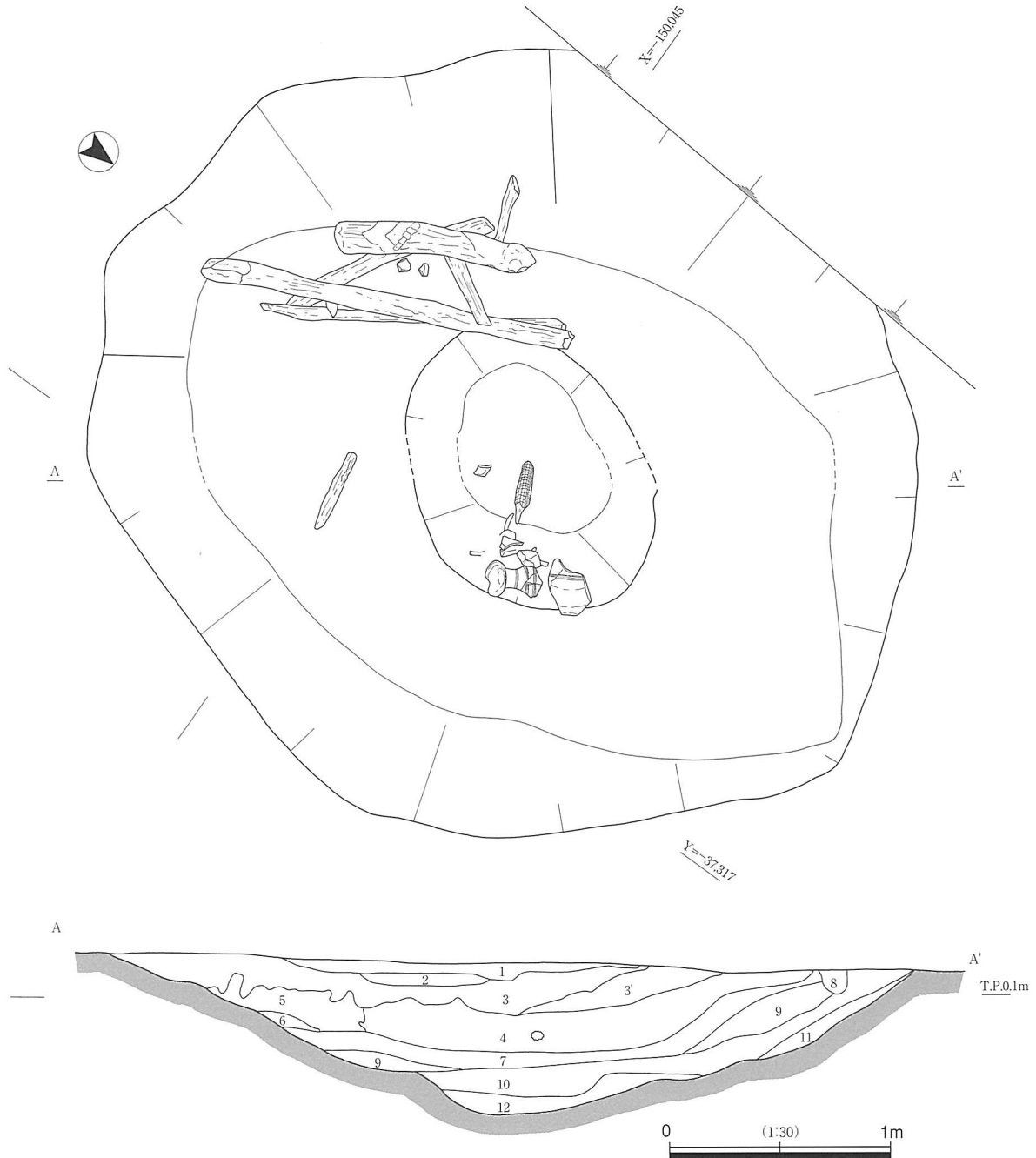


図106 西端遺構集中部分 平面拡大図 (S=1/150)



- 1 10Y4/1 灰色 粘土～シルト 有機物を含み、ラミナ見られる
- 2 75Y3/1 オリーブ黒色 シルト+極細砂 ラミナみられる
- 3 75Y2/1 黒色 シルト 極細～中砂を含む (サンプル1)
- 3' 3と同質・同色 灰化した有機物が束に厚く見られる (サンプル2)
- 4 75GY2/1 緑黒色 粘土～シルト 極細砂僅かに含む 粘性強 ラミナも見られない 有機物含む (サンプル3)
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト+極細～細砂 有機物含む 砂質
- 6 10Y4/2 オリーブ灰色 粘土～シルト
- 7 75Y3/1 オリーブ黒色 粘土～シルト 極細～細砂多く含む 有機物有り 粘性強 (サンプル4)
- 8 25Y2/1 黒色 シルト+極細～細砂 上の攪拌・踏み込みか?
- 9 10Y4/1 黒色 シルト+細～中砂 砂質の強いシルト
- 10 10Y4/1 灰色 極細～細砂+シルト ラミナ僅かに見られる部分有り (サンプル5)
- 11 10Y3/1 オリーブ黒色 シルト+細砂 粘性強
- 12 75Y5/1～4/1 灰色 極細～細砂 ラミナ見られる (サンプル6)

図107 土坑633 平・断面図 (S=1/30)



写真113 土坑633遺物出土状況（北東から）



写真114 土坑633木製品出土状況（東から）

周に煤化が著しい部分があり、内面にもコゲバンドが見られる。686は内面ナデで、底部には指頭圧痕が残る。底部は二次焼成により剥落、内面も煤化。687は外面大部分と内面が煤化しており、内外面とも調整不明瞭。688は外面縦ハケ、内面ナデ。外面のみ煤化。底部に木葉痕。689は鉢。外面には口縁部直下から7～9条の櫛描直線文が施され、2段目にはその後一部に扇形文が施されのちミガキ。内面はナデのちミガキ。690～693は壺である。690は体部上半に7条の櫛描直線文と波状文を施す。内面は板ナデのちミガキ、外面は丁寧な横ミガキ。691は外面に7～8条の櫛描文が施されるがいずれも弱くのちミガキ。内面は頸部縦ミガキ、口縁部横ミガキ。692は全体が黒色を呈する壺。口縁部から体部下半は、土坑底面からやや浮いた状態で、口縁を南東方向にむけて出土した。体部の一部が欠けているが、同一片と考えられる外面黒色の底部が出土している。外面は全体ハケのち体部最大径以下を横ミガキ。内面は指頭押圧のちミガキ。口縁部の直下から9条の櫛描直線文を8段施文。文様の下半分と底部付近の外面に、ベンガラがやや正面を意識したかのように塗布される。底面に木葉痕が残る。Ⅱ様式。693は底径9.8cmと比較的大型品の壺底部。底部外面の一部と外面の底部から1cm付近が全周煤化。

以上の土器は、いずれも壺口縁部の下垂が顕著でないこと、甕の口縁部外反が比較的ゆるやかであり、Ⅲ様式の新段階に見られる口縁部の屈曲、口縁端部の擬凹線などの特徴は見られない。このことから、Ⅱ様式～Ⅲ様式古段階の所産と考えられる。なお、土坑633より出土した図化した甕19点すべてと693の壺は煤化が著しい。特に甕類は煤の付着が著しく、体部上半や甕の口縁部の口縁部最小径部に煤が残っていることから、複数回以上の使用があったと考えられる [小林・柳瀬2002]。

木製品は、土坑中央の遺物集中地点と南端に集中している。多くは自然木であり、このうち加工痕のある2点を図化した。694は糸織具の経（布）巻具。断面が三角形を呈し、図面左側には突起が見られる。図面右側については欠損するが、同様の突起を有していたと推定される。後述する図120-756よりも大型品であるが断面が異なる。樹種はケヤキ。695は不明木製品。土坑の中央部でほぼ水平に出土した。断面円形の棒状の木材を加工している。両端は欠損しており、長軸方向に溝を彫った後、直交方向にトウモロコシ様に約0.5cm単位で精緻な刻みを施す。全体が炭化し、一部に細工の欠落が見られる。直径5cmと人が握るために適度な太さであり柄とも考えられるが、類例は見られない。樹種はサカキ。

石器は砥石、サヌカイト製石鏃か石錐、スクレイパー、剥片が出土した。この他に、図化していないが、二上山付近で採取される細粒閃緑岩・礫が1点出土しており、石器石材の可能性が高いという（井上智博氏ご教示による）。696～698、700～702はサヌカイト製。696は石鏃か石錐破損品。断面形は長

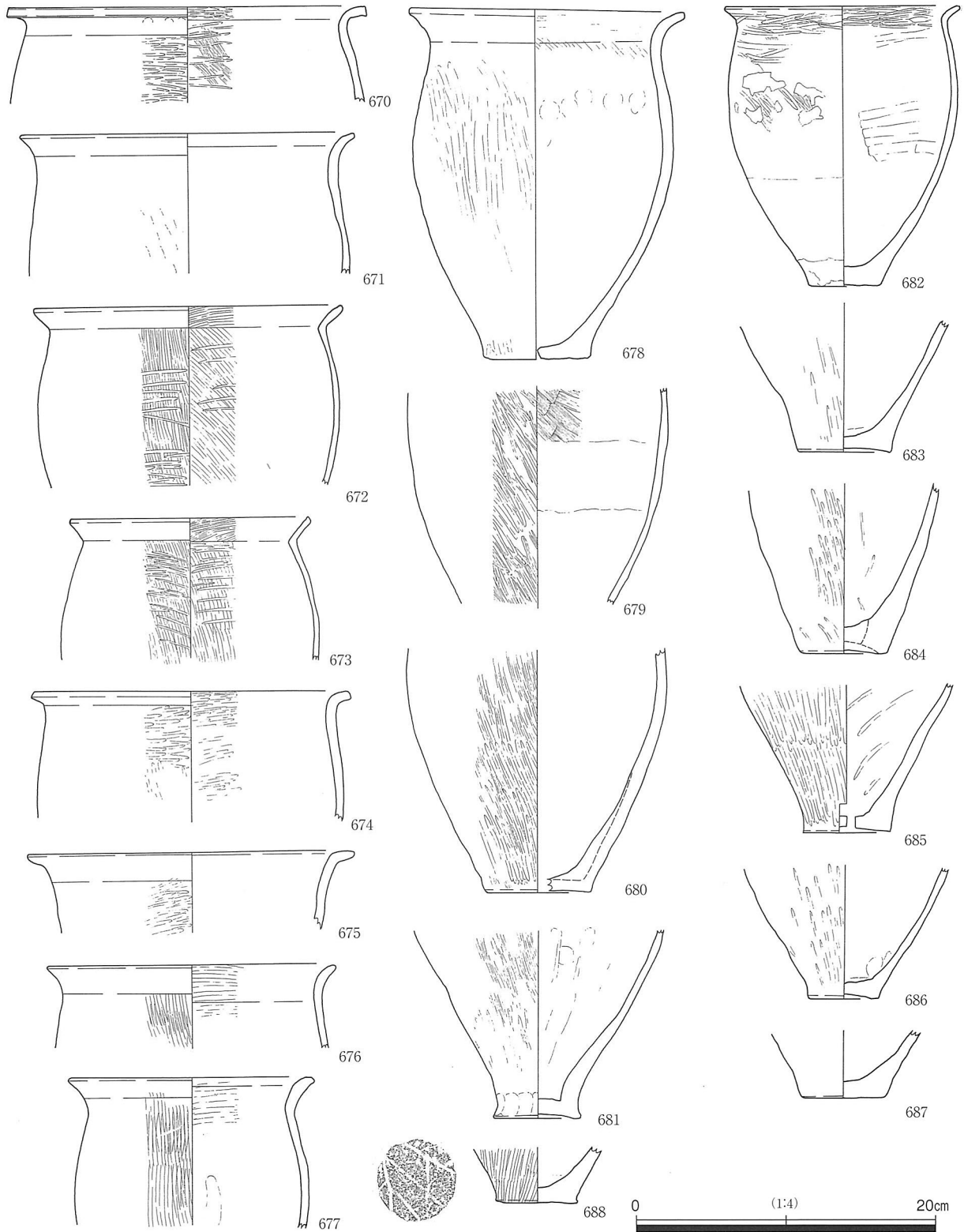


図108 土坑633 出土遺物 (1)

楕円形で、自然面が残る。石錐の場合は下端部の錐部分が破損したようである。697は石鎌か尖頭器。上端は破損、基部のみ残存している。698は剥片を利用したスクレイパー。剥片の端部に連続剥離が施され、刃部になる。699は砥石。1面を残し破損している。長軸に平行に、中央が幅1cmほど大きく窪み、2条の筋状の研磨痕が残っている。アルコース砂岩製。700、701は剥片。701は背面一面に剥離痕が施されている。702は二次加工のある剥片。698同様、剥片の一端に連続剥離がなされている。自

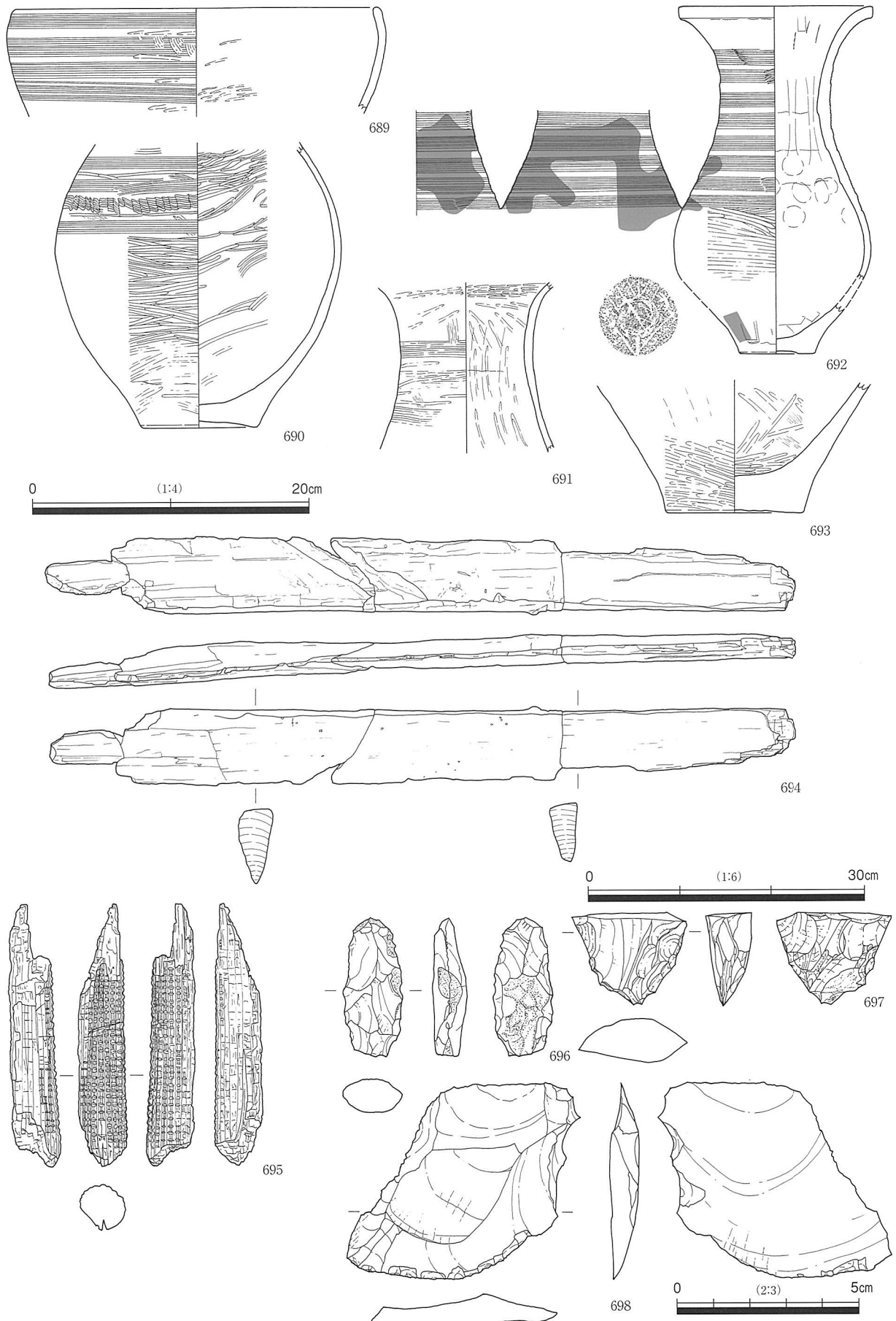


图109 土坑633 出土遗物 (2)

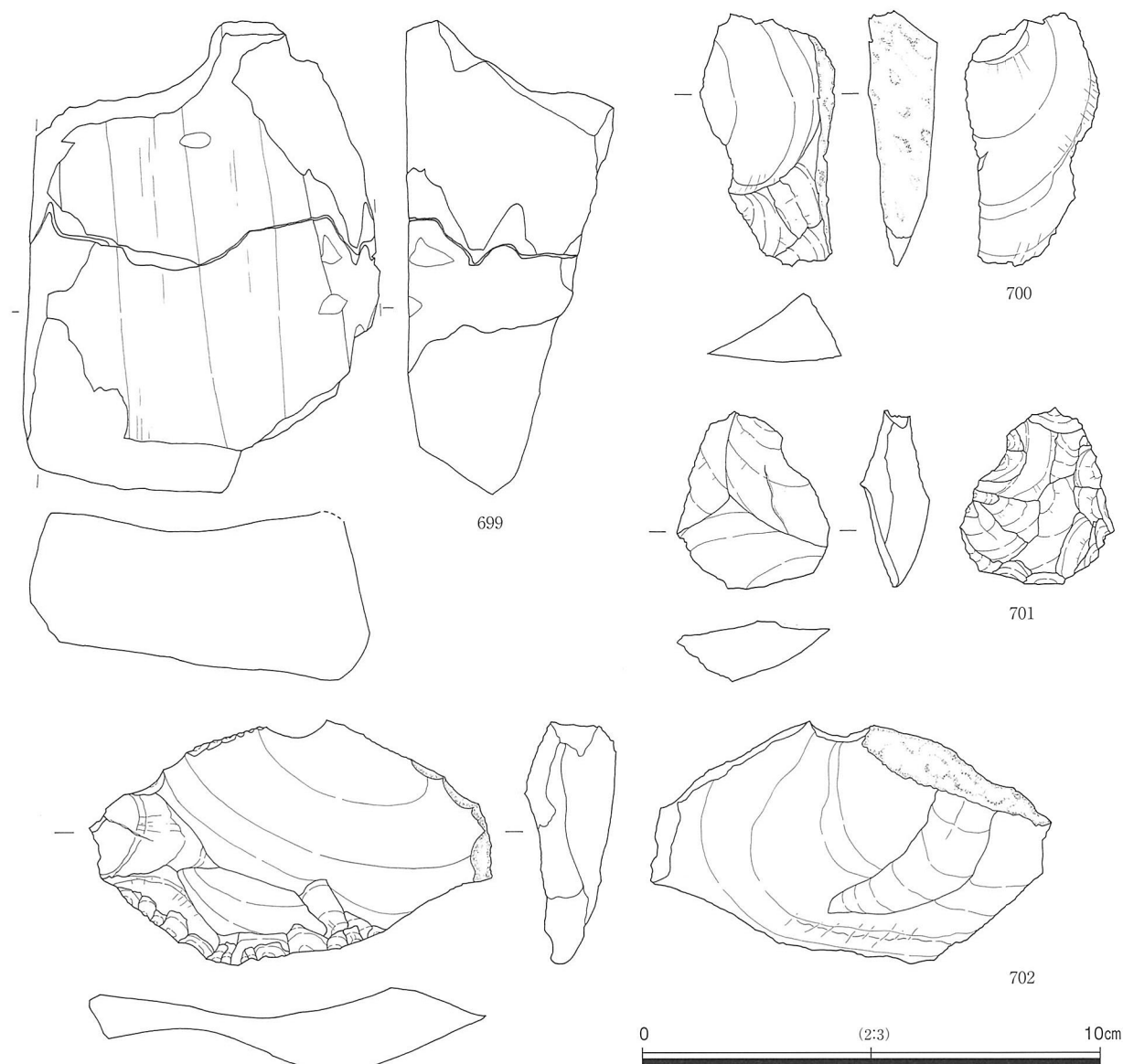


図110 土坑633 出土遺物（3）

然面を中心に受熱している。剥離面にも影響があることから、母岩をある程度割った後受熱し、最終的にこの剥片が産出されたようである。出土したサヌカイトで、受熱が見られるのはこれのみであるが、意図的なものかは不明。

この他、動物遺体のうち種の同定が可能なものは、イノシシ、カエル、サカナである。イノシシは、4歳以上の下顎骨（写真135：骨-5）、生後約6ヶ月の脛骨（同骨-9）、第3手根骨（同骨-10）、第4手根骨（同骨-11）である。また、埋土からカエル（同骨-14・19）、サカナ（同骨-20）の骨の他にも、複数片の骨が出土している（骨-5~21：表5参照）。イノシシについては、少なくとも4歳以上と生後6ヶ月の2体の個体が確認できる（詳細は第6章第3節参照）。また、バイガイ（表4：貝-4）が1点出土した。なお、特異な遺物が出土したため、埋土の一部を洗浄した結果、植物遺体が多く出土し（表2参照）、炭化米も見られた。

以上の遺物の出土状況において、土坑の南西側に木器、木材が集中し、ある程度の大きさの土器が中央部にややまとまって見られる傾向は看取された。完形の遺物はなく、完形に近い692の赤彩土器も破損して出土している。この土器の直上には石が見られ、恣意的な破碎行為が行われた結果の可能性も考

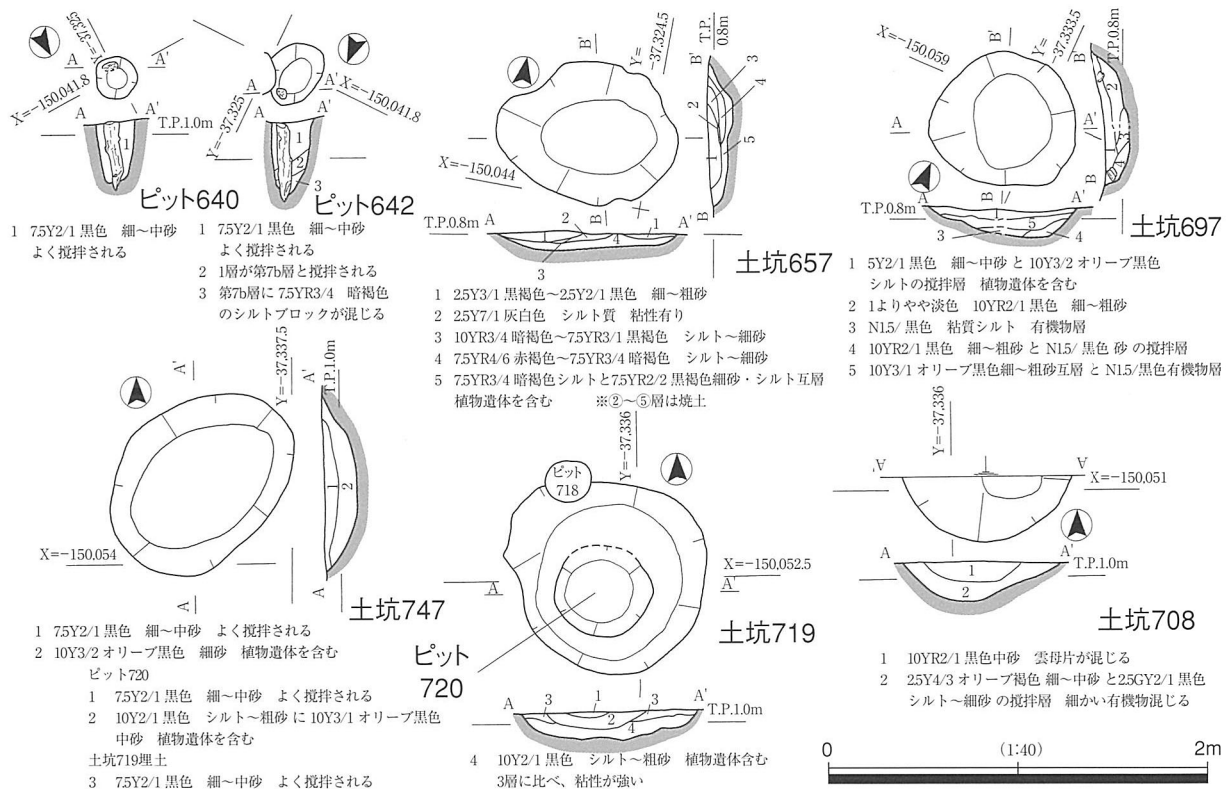


図111 ピット640・642・720、土坑657・697・708・719・747 平・断面図 (S=1/40)

えられるが、他の遺物を見る限りさほど積極的には評価できない。また、先述のように煤化が顕著な破片が多いものの、破片資料の割れ口に煤化が見られないこと、埋土に焼土が見られないことから、遺物を廃棄した状態で土坑中に火を焚いたとは考えられない。土坑633は他の土坑よりも規模が大きく、赤色顔料の塗布された土器、精緻な細工の木製品、イノシシの骨などの出土から、祭祀的な色彩が看取される。しかし、それ以外にも顕著な使用がなされたと考えられる煤化した多くの土器も出土している。土坑の掘削箇所は、居住域と推定される遺構密集域縁辺に当たり、北側では後述する掘立柱建物も見られ、その立地も示唆的である。以上から、この土坑を祭祀に関するものも含む、廃棄用遺構と考えておく。

ピット634～656は溝629北東の微高地上、土坑658以北で検出された。埋土はいずれも同様だが、ピット654～656には植物遺体が見られた。後述するピット640・642を除き、以上の各ピットからの出土遺物は、ピット635・645からそれぞれサヌカイト剥片が1点、ピット646から甕など8点、サヌカイト片1点、ピット647から口縁端部が若干下垂する壺片1点、ピット648から甕片1点、サヌカイト片1点である。いずれも詳細な時期は不明ながら周辺の遺構からⅡ様式の範疇に収まるものと思われる。遺構番号が飛ぶが、ピット811・812も同じ部分での検出である。出土遺物はない。

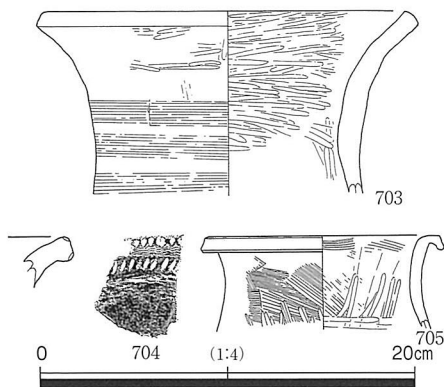


図112 土坑657・697 出土遺物

ピット640 (図111、写真115) は、長軸0.2m、短軸0.15m、深さ0.34m。杭はピットの中央よりやや東から斜めに、深く打設されている。杭は腐食のため、取り上げることができなかった。埋土は、黒色(75Y2/1)細～中砂。杭以外出土遺物はない。ピット642 (図111、写真116) は、長軸0.2

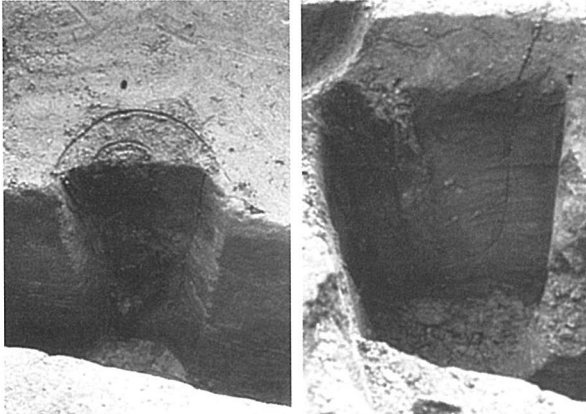


写真115 ピット640 (北から) 写真116 ピット642(北西から)



写真117 土坑657 (南西から)

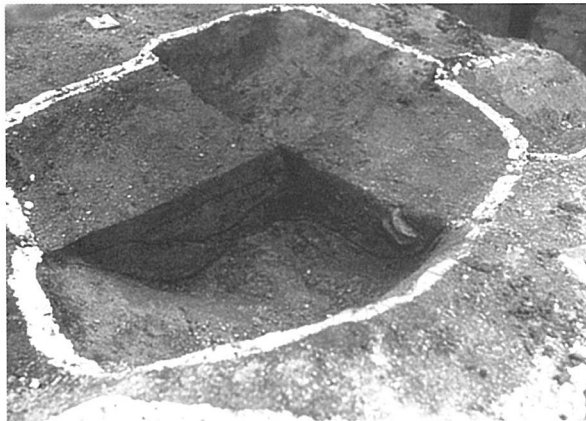


写真118 土坑697 (北から)

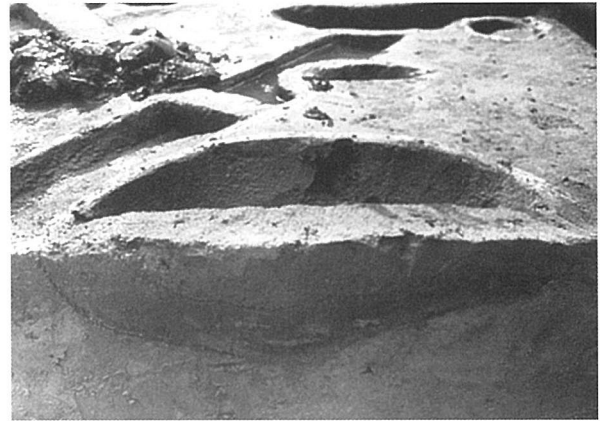


写真119 土坑708 (北から)



写真120 土坑719、ピット720 (南から)



写真121 土坑747 (東から)

m、短軸0.15m。深さ0.43m。溝より北側の微高地部分で検出した。ピット641に切れ、杭はピットの北端に打設されている。杭は腐食のため、取り上げることができなかった。埋土は、第7層と第7b層の混在層で、下層ほど第7b層の含有量が多い。出土遺物は、Ⅱ様式の甕口縁1点のみ。

土坑657 (図111、写真117) は、長軸0.95m、短軸0.7m、深さ0.13m。埋土は焼土で構成されているが、土坑床面が焼けて硬化している様子は観察できなかった。埋土が攪拌されていないことから、焼土を廃棄した土坑ではなく、この場で火を焚いたと考えられるが、床面の硬化がないので恒久的な、竈的な施設や火を焚く場所ではなく、一時的に使用したものと考えられる。埋土が特徴的であることから洗浄したところ、焼けた不明骨片 (骨-24)、サカナの骨 (骨-25)、炭化米が確認された。その他の

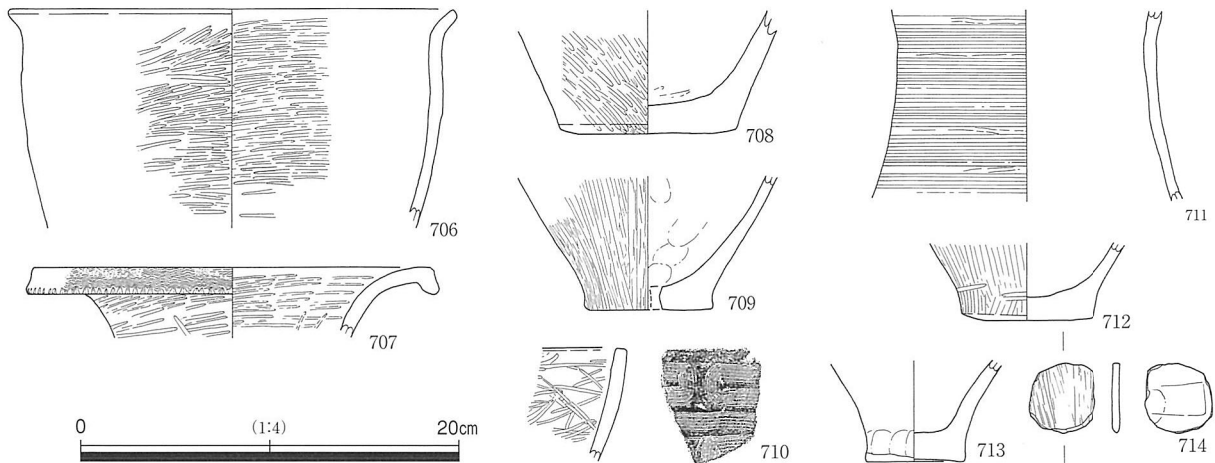


図113 土坑658・758、溝617・619 出土遺物

出土遺物は、弥生土器片11点、サヌカイト剥片1点。

土坑657出土遺物 (図112) **703**は広口壺。全体に摩滅著しいが、内外面ともミガキ。頸部には9条の櫛描直線文が3段以上施される。煤化が見られるが、破断面の煤化は見られない。**704**は壺口縁端部片。口縁端部を平坦にし、中央に5条の波状文上下にヘラによる刻み目が施される。内外面ともナデ。

以上の遺物は、Ⅱ様式の範疇に収まるものとしてよいだろう。なお、先述のとおり、一部の土器片が土坑633出土片と接合された。この接合資料以外に出土遺物にはさほど特異なものは含まない。そもそも、全ての遺構において土壌洗浄を行わなかったため、特に有機物等の微細な資料については比較ができない。その点を除いても、出土した遺物は他の遺構と大きく変わるものではない。**703**は煤化が見られる壺片であるが、破断面には煤化は見られず、同様の煤化した壺片は、少なくとも当遺跡においては珍しくない。このことから、出土遺物からこの遺構の性格を判断することは困難といえる。一方、遺構の状態であるが、当土坑において床面が硬化しない程度の回数焼成行為がなされたと考えられる。土坑中からは骨なども出土しているが、量的に少なく、意識的な行為とは考えにくい。遺跡内の比較資料が不十分であり評価は避けるが、注意を要する遺構である。

土坑658 (図94、写真124) は、長軸2.4m、短軸1.8m、深さ0.24m。埋土はオリーブ黒色、黒色の粘土～シルト層の互層で、炭化物を含む。断面図は土坑中央部にあたらないため表現されていないが、土坑の北東部分が大きく深まり、底部が非常に小さい土坑になる。出土遺物は、土器片33点、ヒノキの木片1点。図113-**709**は甕底部。外面はハケ、内面はナデで、底部に指頭圧痕が見られる。全体に煤化。底部には穿孔が見られる。**710**は鉢口縁部。11条の櫛描直線文を施したのちに2段をくくって流

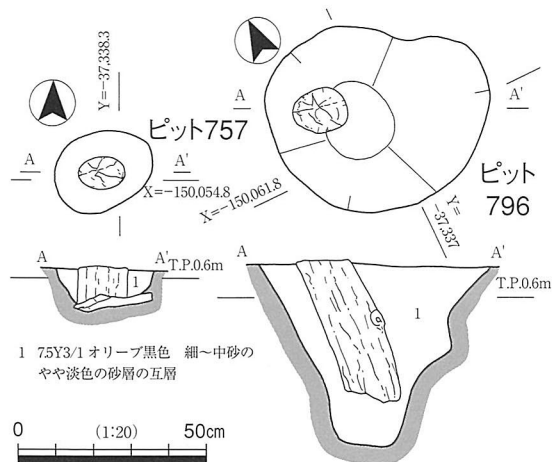


図114 ピット757・796 平・断面図 (S=1/20)



写真122 ピット757 (南から)



写真123 ピット796 (南西から)



写真124 土坑658 (南西から)



写真125 土坑705・706断面 (北から)



写真126 土坑758断面 (南から)



写真127 土坑758遺物出土状況 (南から)



写真128 溝614・617断面 (南から)



写真129 ピット712 (南から)

水文とする。内面はミガキ。外面の一部が煤化している。いずれもⅡ様式。

ピット659は土坑658内で検出。埋土が他とは異なり、青黒色(5BG2/1)粘土・砂。ピット660～662は土坑658・663間で検出。埋土は他のピット同様。いずれからも出土遺物はない。土坑663は土坑633と土坑658の間で検出された。埋土はオリーブ黒～黒色(10Y3/1～7.5Y2/1)シルト～細砂。出土遺物は、櫛描直線文を施す壺片1点のみである。ピット664は土坑663内で検出。埋土はやや異なり、黒色(N1.5/)シルト～細砂。出土遺物はない。土坑665は土坑663を切る。埋土は土坑663と同様。遺物の出土はない。ピット666は溝605を切る。埋土は溝605と同様の細～中砂。遺物の出土はない。土坑667は埋土オリーブ黒色(10Y3/2)シルト。遺物の出土はない。ピット668～672は土坑676北側

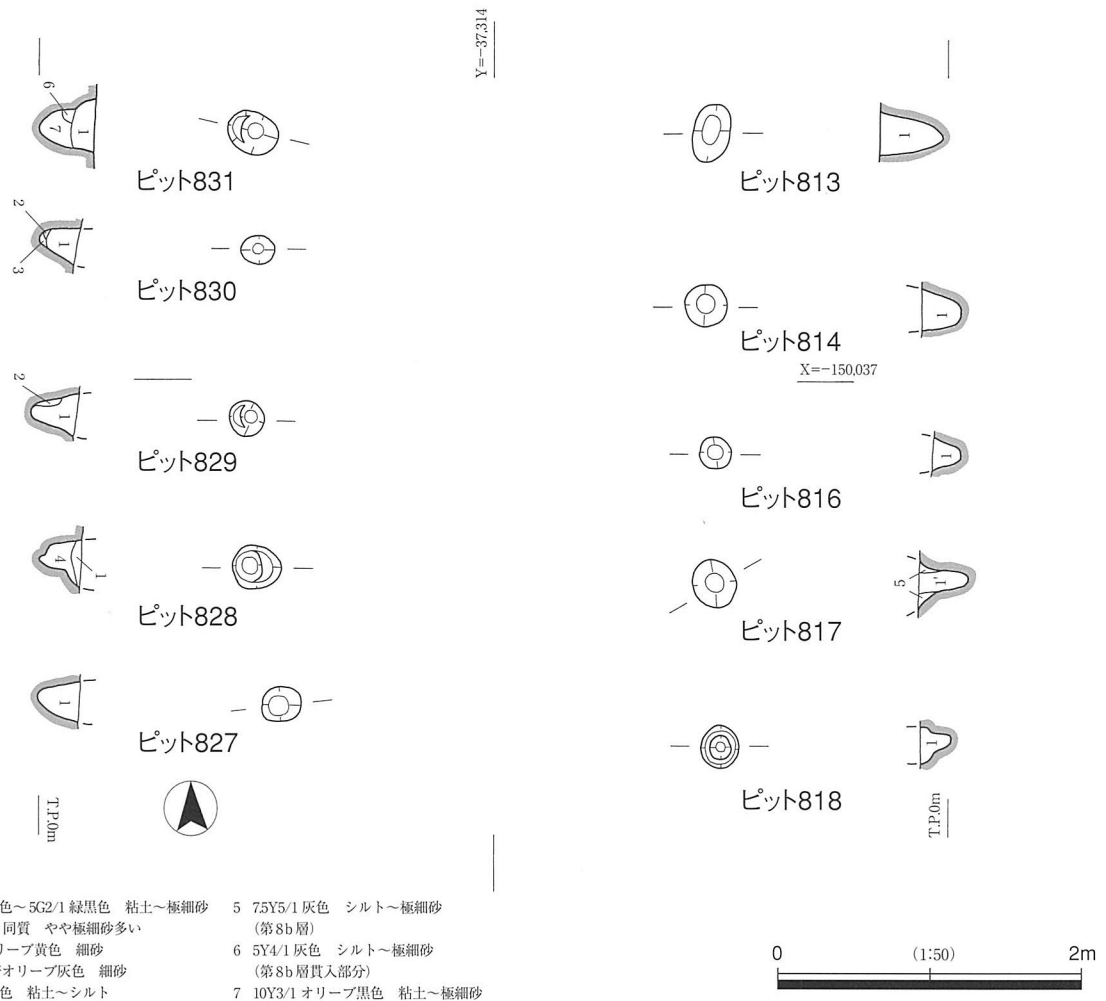


図115 第7b面 掘立柱建物 平面図 (S=1/50)

で検出。埋土はいずれも同様。ピット669から甕片1点が出土したのみで、それ以外からの出土遺物はない。土坑673は埋土黒色(N1.5/)シルト～細砂。生駒西麓産胎土の甕片が1点出土したのみ。中期前半か。ピット674は土坑673・675に切られる。埋土は土坑673同様。遺物の出土はない。土坑675は埋土オリーブ黒色(10Y3/2)細砂。出土遺物はない。土坑676は土坑658の南側で検出された大型の土坑。図118-720を含む土器片5点とサヌカイト片1点が出土。埋土は土坑675同様。

土坑677は土坑633南側で検出された。埋土は土坑667と同様。出土遺物はない。土坑678も近接し検出され、出土遺物は蓋や甕などの土器片3点とサヌカイト片1点。いずれも植物遺体を含む類似した埋土。ピット679～684は土坑633南側で検出。埋土はいずれも、黒色(N1.5/)シルト～細砂。出土土器は、ピット379から甕蓋2点、ピット680から図118-731を含む甕、壺片5点出土、ピット681から甕片8点出土、ピット682から甕片3点がそれぞれ出土したのみ。南端付近でピット685・687・689～691が検出されたが、いずれも出土遺物はない。土坑686・692は類似した埋土で、出土遺物はない。

以上の土坑、ピットには、一部大型の土坑が見られたが、同じ大型の土坑でも遺物の出土量には大きな差異が見られる。ここで記した遺構からの出土遺物は、いずれも少なく時期比定は難しいが、概ね他の豊富な遺物が出土した土坑の時期と差はないものと考えられる。

以下の遺構は、調査区西端の遺構密集域で検出されたものである。土坑693は遺構密集域から東で検出された。出土遺物は、図118-725を含む、鉢、壺、甕など土器片24点が出土した。土坑694・695

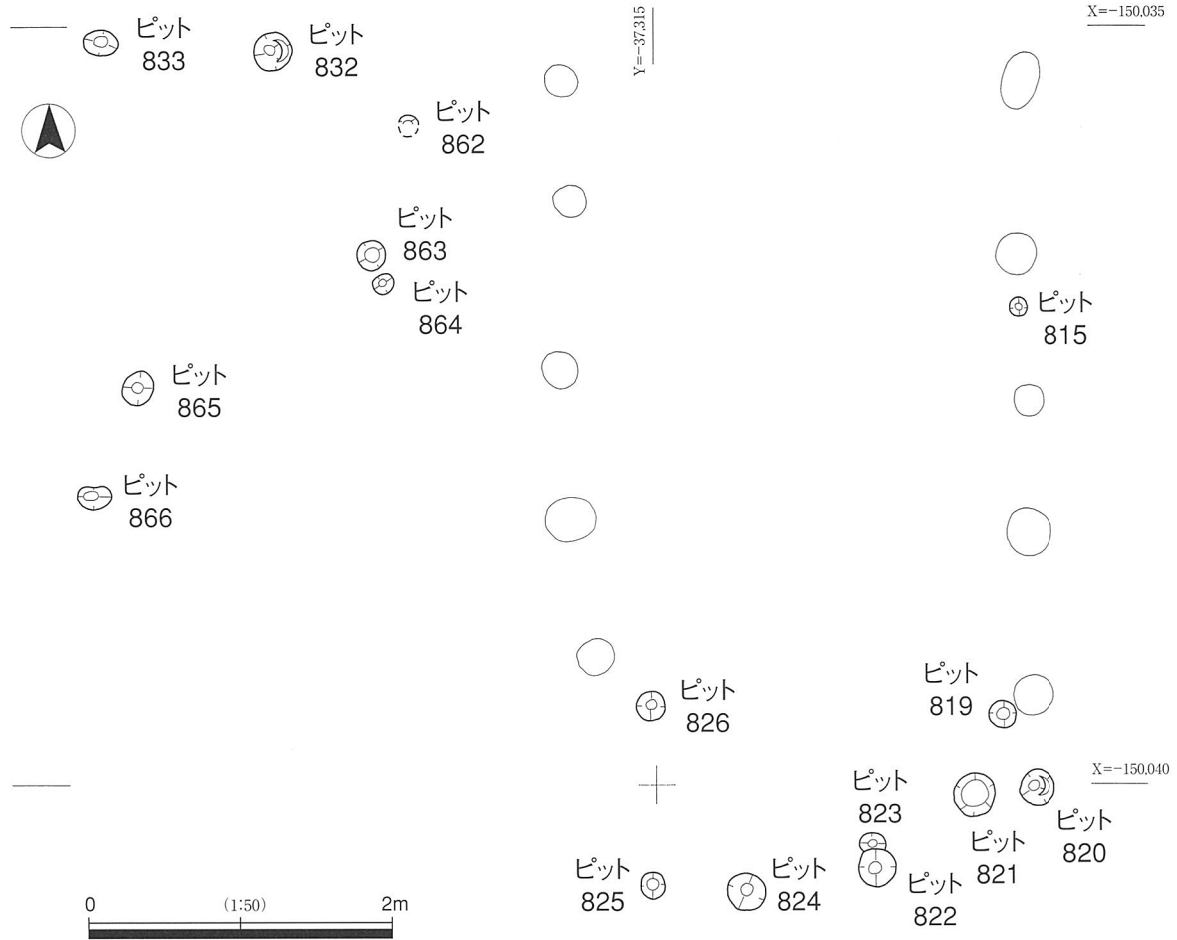


図116 第7 b面 掘立柱建物周辺ピット 全体平面図 (S=1/50)

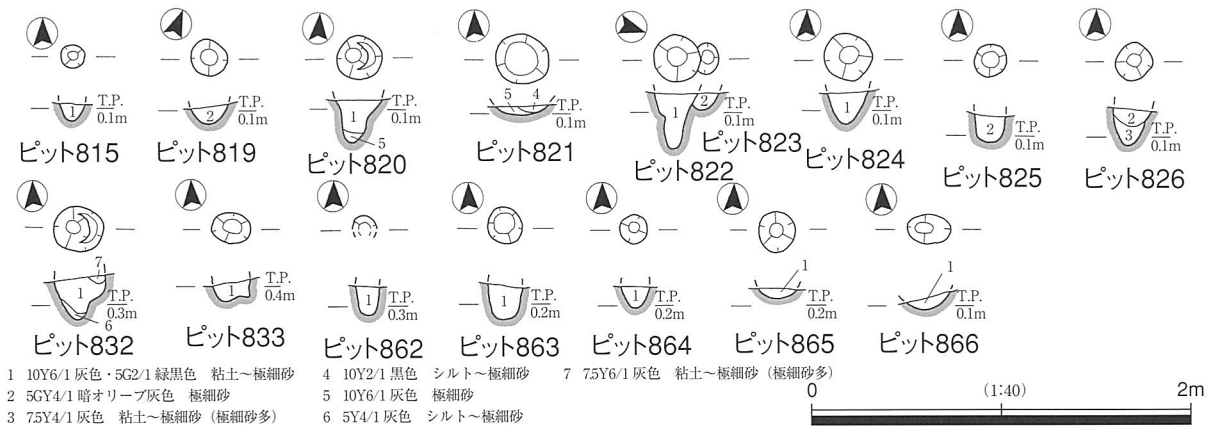


図117 第7 b面 掘立柱建物周辺ピット 平・断面図 (S=1/40)

はその南側で検出された。土坑694からの出土遺物はないが、土坑695からは甕片4点、広口壺片1点が出土した。

ピット696は、遺構密集域北端部分での検出。出土遺物はない。土坑697 (図111、写真118) は、直径0.7m、深さ0.2mの隅丸方形の土坑。埋土は黒色の細～中砂に有機物層が一部に見られる。

出土遺物は弥生土器片12点。図112-705は広口壺の口縁部。口縁端部を平坦にとり下方に垂下、やや凹線状を呈する。外面は細かい斜めハケ、内面は口縁端部横ナデで、以下はそれ以前の横ハケ、頸部は同横ハケのち縦ミガキで、体部には横ミガキも見られる。頸部の屈曲は鈍い。Ⅱ様式後半か。土坑

698・699は遺構密集域北端で検出された。土坑698からは甕片が1点、土坑699からは甕、鉢、壺の破片が16点出土。甕にはミガキが見られる破片があり、河内形甕を含む。いずれも中期前半であろう。ピット700～702は土坑699を切る。いずれも埋土は土坑697同様で、出土遺物はない。

土坑703からは甕、壺など6点が出土。壺には櫛描直線文、間隔7mm程度の稚拙な廉状文、扇形文が見られる破片が1点見られた。土坑704からは甕を含む4点の破片が出土。埋土はピット700と同様。土坑705・706（写真125）は、土坑705（写真右）が土坑706を切っている。土坑706の埋土は下層の砂を巻き上げており砂が多く混じり、土坑705はやや砂質な第7層。切りあい付近に縦に伸びる砂の層が見られたが、これは土坑掘削の際に掘り残された第7b層であり、土坑705にも複数回の掘削があるものと考えられる。この部分の縦方向に見える第7b層の層相は、写真左側の第7b層と同様であり、ブロックとは考えにくい。中央部分は杭の抜き取り痕の可能性が考えられ、右側は別の時期の遺構とも考えられる。ただし、断面観察では埋土の差は確認されなかった。なお、出土遺物は、土坑705で土器片が12点、土坑706で土器片が3点、炭化米が出土している。土器はいずれも細片で図化できず時期不明だが、他の遺物より新しい要素は見られず、おそらく同時期であろう。ピット707・709～716はいずれも土坑705周辺で検出。埋土は、若干色調が異なるが、いずれも類似する細～中砂。出土遺物はない。なお、ピット712（写真129）長軸0.2m、短軸0.1m、深さ0.29m。全体的に砂質度の強い埋土で、ピット内に柱痕が残るが、腐食のため取り上げることができなかった。他の出土遺物はない。ピット894は溝617中で痕跡程度での検出。甕片2点が出土。詳細な時期は不明だが、Ⅱ様式であろう。

土坑708（図111、写真119）は、長径0.85m、深さ0.21m。北側約1/2は側溝により検出されなかった。埋土は2層にわかれる。出土遺物は壺口縁部片1点で、端部は丸く収める。Ⅱ様式前半か。ピット717は溝618を切る。出土遺物はない。ピット718・721は土坑719を切る。ピット718からは甕片が4点出土。いずれの埋土も黒色（10Y3/2～7.5Y2/1）細～中砂。

土坑719（図111、写真120）は、長軸1.0m、短軸0.55m、深さ0.15m。中央部分をピット720、北端をピット718に切られる。上層の土が良く攪拌されており、下層は植物遺体が堆積している。ピット720は土坑719の再掘削。土坑719からは、サヌカイト剥片が3点の他、壺や甕の小片13点出土したが、1点外面にケズリ状のミガキが見られる破片が1点見られた。なお、この破片の内面は口縁部が横ミガキ、体部が縦ミガキ。口縁部を強く外反させるが、頸部の屈曲は稜が見られるほど鋭くない。Ⅱ様式後半と思われる。なお、ピット720からの出土遺物はない。

以下では、遺構番号が一部前後するが、溝619以西の遺構について記述する。土坑722は比較的大型の土坑だが、土器片1点が出土したのみ。土坑723は土坑722に近接し検出されたが、出土遺物はない。いずれも埋土同様で、黒色（10Y3/2～7.5Y2/1）の細～中砂。土坑724は土坑705の南側で検出され、溝619を切る。埋土は黒色（N1.5/）シルト～細砂。出土遺物はない。ピット725～730・742は溝619の南東肩部で検出された。いずれの埋土も類似し、出土遺物はない。ピット731・732・734・735・740・741は土坑733周辺で検出された。ピット734からは甕片3点が出土。ピット735からは図118-732を含む壺、甕片6点が出土。それら以外からの出土遺物はない。土坑733は比較的大型の方形土坑。甕、壺など土器片5点が出土。壺には5条の波状文や、4条の櫛描直線文を施す破片も見られた。土坑736は東側を筋堀に切られるが、比較的大型の土坑。土器片11点が出土。多くは甕片。溝614を挟んだ西側では、ピット737～739が近接して検出された。出土遺物はない。埋土はいずれも類似する黒色（10Y2/1）細～粗砂。ピット754は溝623付近で検出された。内外面ともミガキの甕片が1点出土。ピッ

ト743～746は溝619の北西で検出された。ピット743から甕片1点が出土した以外、出土遺物はない。いずれも同様の埋土で、黒色(10Y3/2～7.5Y2/1)の細～中砂。土坑747(図111、写真121)は、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.18m。埋土は2層に別れる。出土土器は甕片2点。うち1点は内外面とも比較的細かく深いハケ。Ⅱ様式の範疇に収まるものと考えられる。ピット748・810は土坑747に切られる。出土遺物はない。埋土は黒色(10Y3/2～7.5Y2/1)の細～中砂。ピット749～753・777は調査区西端で検出された。出土遺物はない。いずれも同様の埋土で、黒色(10Y3/2～7.5Y2/1)の細～中砂。土坑776も同様の埋土。出土遺物はない。ピット778からはサヌカイト剥片1点が出土。埋土は黒色(10Y3/2～7.5Y2/1)の細～中砂。土坑772は溝619に切られる。比較的大型の土坑だが、甕片が1点出土したのみ。埋土は黒色(N1.5/)シルト～細砂。土坑773は土坑772に接し検出。甕片4点と、サヌカイト片1点が出土。埋土は黒色(10Y3/2～7.5Y2/1)の細～中砂。ピット771・774・775は土坑772周辺で検出。ピット774から底部片が1点出土したのみ。埋土は土坑773同様。

以下では、溝619の南側以東の遺構について記述する。ピット755・756は土坑733南側で検出された。ピット756からは図118-721を含む壺、甕片4点、サヌカイト片1点が出土。埋土はいずれもオリーブ黒色(7.5Y3/1)細～中砂。ピット757(図114、写真122)は、直径0.25m、深さ9cmの杭が残るピット。打設面は不明だが、先端の加工されていない直径15cmの柱を残す。樹種はアカガシ亜属。底部に横になった棒状の木材が3点出土している。これらに顕著な加工痕は見られず、自然木であろう。その他の遺物は出土していない。

土坑758(写真126)は、第7層掘削途中段階で検出された土坑。第7b面検出の他の遺構に比べて埋土が黒色で、植物遺体を多く含んでいる。

土坑758出土遺物(図113) 弥生土器片が67点出土した。706は河内形甕。内外面とも横ミガキ。口縁端部は弱く外反し、端部には若干面をもつ。外面全体は煤化し、体部最大径付近には炭化物の付着も見られる。内面は口縁部の一部が煤化。Ⅱ様式前半。707は広口壺。口縁端部は下垂し、波状文とその後下端に刻み目が施される。内外面ともミガキ。Ⅲ様式か。708は甕底部。外面ミガキ、内面ナデ。外面の底部から約1cm上には幅1～2cm幅でリング状の煤化が見られる。内面は外面煤化部分の直上部分が煤化する。遺物には時期幅が見られるが、遺構の埋没時期はⅢ様式の可能性が考えられる。

ピット568・571・759、土坑569・572は、第7層掘削途中段階で検出した遺構。埋土はピット568・571、土坑569では、黒色(10Y2/1)シルト～細砂に黒色の炭化物が混ざる。土坑572は黒色(N1.5/)の植物遺体層。ピット759はオリーブ黒色(10Y3/1)極細～細砂。第7b面検出の他の遺構に比べて埋土が黒色で、植物遺体を多く含んでいる。第7面検出段階では確認できなかったが、他の遺構を掘りこんでいるものもあり、第7b面の他の遺構より後から掘り込まれたものと考えられる。出土遺物は、まずピット568からは弥生土器甕片3点、土坑569からは弥生土器甕(外面ハケ)片1点。ピット571からの遺物の出土はない。土坑572からは弥生土器片4点、ピット759からは弥生土器片2点が出土した。なお、土坑569、土坑570、ピット571、土坑572、土坑758から出土した破片が接合された(図118-723)。これらの遺構はいずれも切りあいながら接している。調査の際に認識した遺構という意味では異遺構間接合となるが、接合状況からこれらの遺構は本来一連の遺構であったと考えられる。

土坑570は、先述のとおり出土遺物の一部が周辺の遺構出土遺物と接合されたが、それ以外にも計9点の弥生土器の甕の破片が出土した。土坑767は土坑570に切られる。出土遺物はない。ピット762～765

は溝622周辺で検出。ピット766は土坑767を切る。埋土はいずれもオリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂で、出土遺物はない。土坑768、ピット769は溝619を切る。いずれも、埋土は黒色（N1.5/）シルト～細砂で、出土遺物はない。

以下では、中央部の攪乱中の遺構について記述する。ピット760は埋土黒色（10Y3/2～7.5Y2/1）の細～中砂。弥生土器甕片が1点出土したのみ。ピット761は埋土オリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂。遺物の出土はない。ピット770は攪乱肩部で検出。埋土はピット760と同様。出土遺物はない。ピット779・780は溝619の延長部分で検出。ピット779からは図118-729を含む甕片5点が出土、ピット780からは甕片4点が出土。いずれも、埋土は黒色（N1.5/）シルト～細砂。土坑781は埋土オリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂。出土遺物はない。

以下では、溝628以東の遺構について記述する。ピット784～786は土坑788北側で検出された。ピット784からサヌカイト剥片が出土した以外、いずれからも出土遺物はない。ピット787は土坑788を切る。図118-730の前期壺片が出土したのみ。埋土はオリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂。土坑788は埋土オリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂。図118-722を含む土器片5点と、サヌカイト片1点が出土。ピット789～793は土坑788周辺で検出された。埋土はいずれもオリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂。いずれからも出土遺物はない。土坑794は土坑788に切られる。埋土はオリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂。頸部屈曲の弱い生駒西麓産胎土と思われる甕片1点、壺片1点が出土。土坑795は土坑794を切る。埋土はオリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂。土器細片が2点出土。土坑797は土坑795を切る。埋土は土坑794同様。3条の櫛描直線文を施す破片を含み3点の土器片が出土。ピット796（図114、写真123）は、長軸0.45m、短軸0.35m、深さ0.48m。柱はピットの東端から中央にむけ打設される。樹種はアカガシ亜属。出土遺物はない。

溝624・628間の遺構について記述する。ピット798・799は溝628を切る。土坑800・801は埋土オリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂。土坑802は埋土オリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂。ピット803～807はピット803の埋土がオリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂である以外は、オリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂。いずれからも出土遺物はない。

以下では、溝624以西の遺構について記述する。ピット782・783・808が検出された。ピット782・783はオリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細砂を、ピット808はオリーブ黒色（7.5Y3/1）細～中砂をそれぞれ埋土とする。いずれからも出土遺物はない。

掘立柱建物（図115） 調査区の中央部分に広がる落ち込み西北側で、南北4間（約4.1m）×東西1間（約3.0m）の掘立柱建物が1棟検出された。埋土は単層、もしくは2層以上に分層できるが、いずれも最終的に同じ埋土で埋没していることから、同時期に埋没したものと考えられる。ピットの大半は円形でピット829・831は東西の長楕円形である。いずれも柱は残存しないが、柱痕と思われる埋土が見られるピット817、ピット断面が2段のピット818、828、829、831もある。ピット817、818から推測すると柱は直径約10～12cmと思われる。

また、周辺ピットの断面形状から柱痕を考えるとピット820、822も柱穴であった可能性がある。しかし、ピット820はピット817との間隔がやや狭く、対になる西列のピットも確認できない。また、ピット822は棟持柱の可能性もあるが、ピット828・818の中央よりやや東に位置し、対になる北側の棟持柱が検出されなかったため掘立柱建物を構成するピットからは除外した。なお、掘立柱建物の周辺でもピットが検出された。

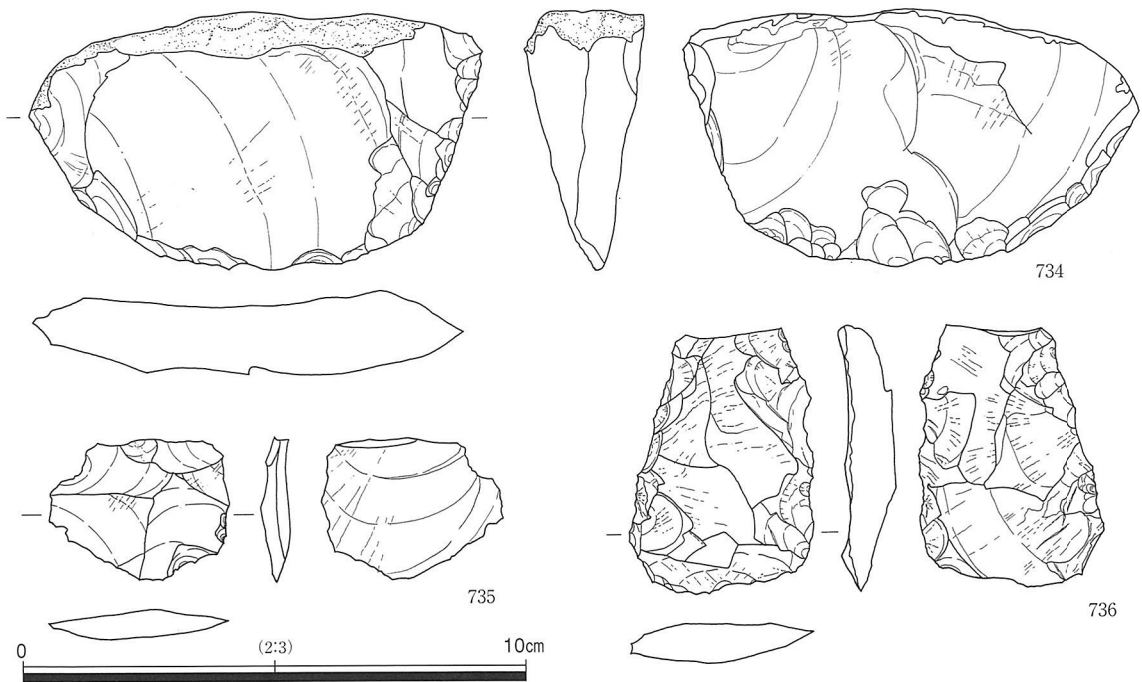
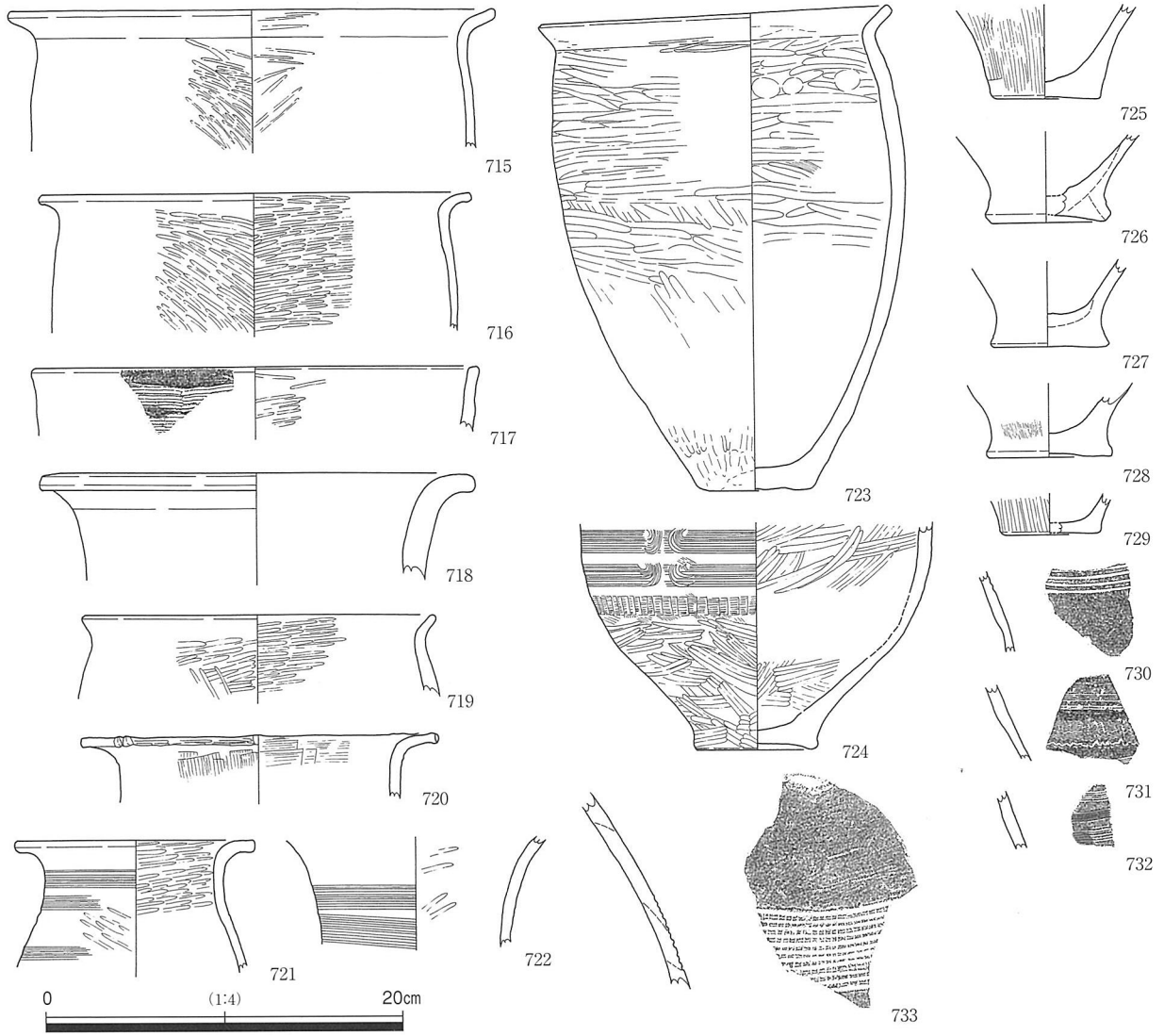


图118 第7b面遺構 出土遺物(1)

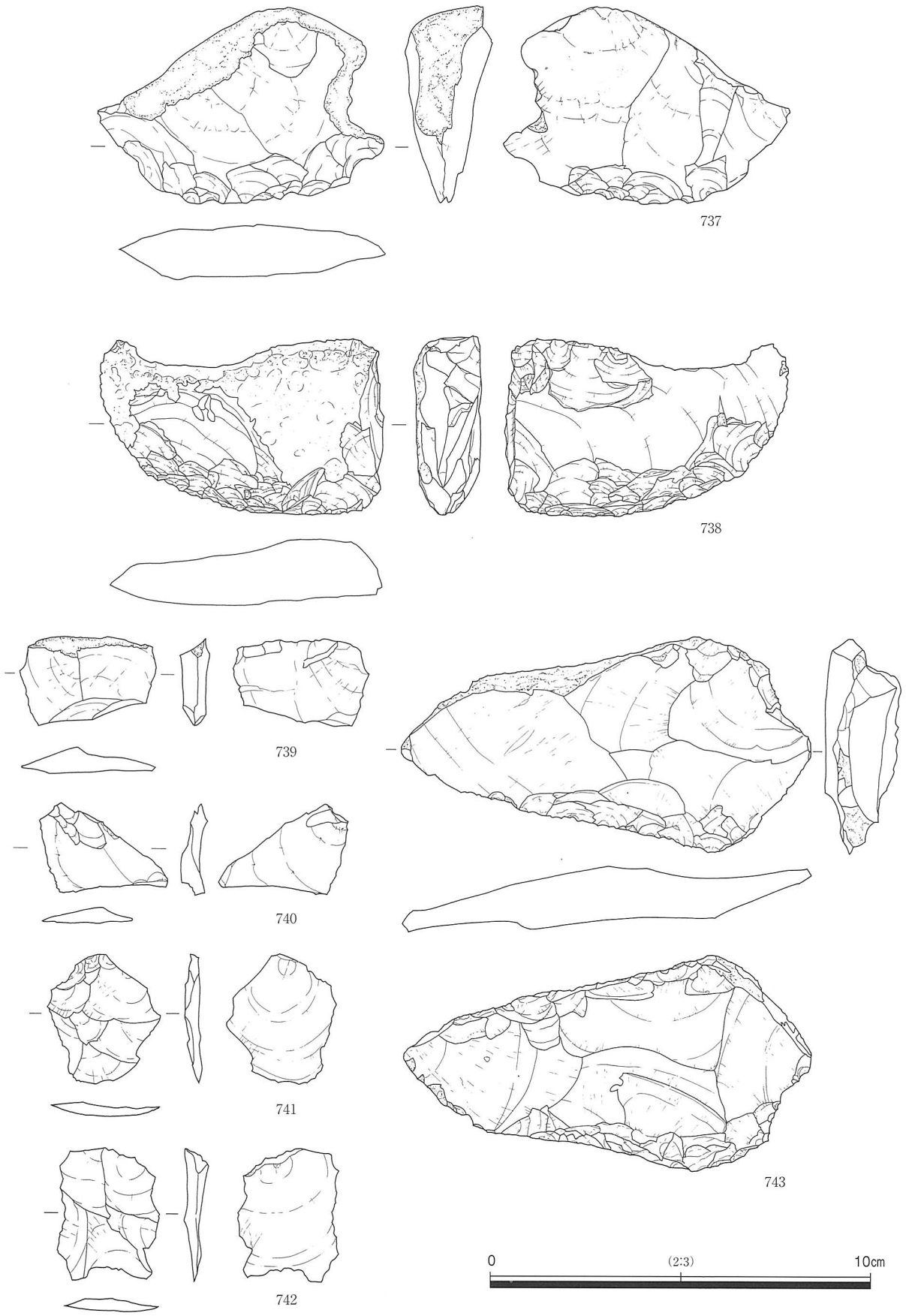


图119 第7 b面遺構 出土遺物 (2)

出土遺物は、掘立柱建物関連ではピット814で甕片1点が、周辺ピットではピット820で甕片1点が出土した。いずれも細片で図化できなかったが、ピット820出土の甕片は、口縁部に刻み目を施し、外面はナデもしくはハケ、内面は横ハケ。Ⅱ様式の範疇に収まるものと考えられる。なお、ピット829からは自然木が出土した。

なお、掘立柱建物部分では、**落ち込み595**が検出された。埋土は隣接する溝594と同様であり、掘立柱建物以降の掘削であろう。出土遺物は、弥生土器片7点。壺頸部に6条の櫛描直線文が施される破片が1点見られた。詳細な時期は不明だが、中期前半であろう。

柱痕・杭について 先述のピットに伴う杭・柱の他に、第7b層中より杭が検出されている(図101・105)。いずれも第7b面検出段階には検出できず、第7b層掘削時以降に確認されたものである。これらは、①溝592部分およびその延長上、②第7面高まり553北端部付近、③調査区南端部分の3地点に集中している。①の杭列838・ピット列839は第7b層中より検出された。**杭列838**はかなり腐食した杭の先端部分のみが残存した状態で13本が東西方向に並んで、東側で南に弧を描くように検出された。杭列は検出レベルから先端部まで5~15cmと浅く、検出レベルより上部分は腐食し失われているが、第7層中より打ち込まれたと考えられる。先述のように溝592の中央部分に並んでいることから溝内の付帯施設と思われる。また、溝592内から検出された**ピット列839**が、直径約0.1m以内のピットが25基、東西方向に直線状に並んだ状態で検出された。埋土は灰色(7.5Y6/1)シルト~細砂である。ピットは深さ5~10cm程度と浅く、ピット列は杭が腐食したのちに埋土が堆積したのと考えられる。先述したように、掘立柱建物との関係が注目される②は、先述の第二の溝群や土坑・ピットなどが集中する地点付近に位置するピットである。しかし、杭は規則性もなく、杭自体も直径10cm以下のものがほとんどである。明瞭な掘り方も確認できないことから、柱ではなく打ち込まれた杭と認識した。③は、ピット757、796のように直径が大きく建築物の柱と考えられるものもあるが、配置に規則性は見られないようである。いずれもその性格は不明である。

第7b面遺構出土遺物(図118・119) 別に図版を設けた遺構出土遺物以外にも、弥生土器片461点、サヌカイト製品・剥片12点が出土した。

715~716は河内形甕。**715**(溝600)は口縁部が大きく外反する。内外面ともミガキ。外面全体と口縁部内面が煤化。外面の一部に炭化物が付着している。**716**(土坑646)も大きく外反する器形。内外面ともミガキ。外面の一部に煤が付着している。いずれもⅡ様式前半。**717**(溝592)は有文の鉢。口縁端部をやや平坦に仕上げる。外面にナデの後、5条~7条の櫛描直線文が口縁直下から施文されている。内面ミガキ。Ⅱ様式前半。**718**(ピット735)は広口壺。厚い体部から短く口縁部をつくり、端部は平坦面を作る。内外面とも横ナデ。Ⅱ様式。**719**(土坑570)は河内形甕。やや丸みのある体部から口縁部を短く立ち上げる。内外面とも横ミガキ。内面が煤化している。Ⅱ様式。**720**(土坑676)は口縁部が大きく外反し、口縁端部に刻み2~3個が間隔を空けて数単位刻まれている。口径の約1/6ほどの残存のため、全周で何単位になるかは不明。近江などの影響か。外面は縦ハケ、内面口縁部~口唇部は横ハケで調整されている。口縁部直下の外面が煤化。Ⅱ様式前半。**721**(ピット756)は小型の広口壺。口縁部は水平に外反する。外面はミガキのち原体の細かい櫛描直線文。内面は斜めミガキ。Ⅱ様式。**722**(ピット788)は広口壺。頸部のみ残存。10~11条の原体の細かい櫛描直線文が施文される。調整は不明瞭だが、内外面ともミガキと思われる。Ⅱ様式。**723**(ピット569・570・572)は甕。体部上半が内湾し、口縁が短くたちあがる。外面は縦ミガキのち、強い横ミガキ。内面の下半は剥落が著しく調整不明だが、上部は横ミガキ。胴部器高5~

8 cm部分の2/3が剥落する。外面体部最下部、体部半ばと口縁部の煤化が著しく、内面は底部と剥落部分内側が煤化、コゲバンドが形成され、口縁部付近も煤化している。Ⅱ様式前半。**724**（土坑571）は壺。外面は縦ハケのち、9条の櫛描直線文を施し、その一部を縦ミガキで擦り消し、ミガキの両側に扇形文を施した擬流水文が2段、その下に9条の簾状文が1段施される。櫛描文間と体部下半はミガキ。内面は剥落が著しいが残存部分は不定方向のミガキ。約5 mmスパンの簾状文の施文から、Ⅲ様式の所産と考えられる。

725～729は甕底部。**725**（土坑693）は、外面縦ハケだが、内面は煤化が著しく調整不明である。底部内面器高3 cm付近にはほぼ全周炭化物が付着している。その外面にあたる部分に煤が付着しており、底部外面にも煤化が見られる。**726**（ピット648）は、内外面とも煤化が著しい。外面は全く煤化の見られない底部から器高1 cm付近までナデ調整がなされているが、それ以上は不明。特に内面には残存部分全体に厚さ1～2 mmの炭化物が付着している。炭化物の個々の形状はわからず、炭化物の起源は不明である。**727**（ピット894）は内外面ともナデで、内面の一部と体部外面が煤化している。**728**（ピット703）は外面に若干ハケが残る。内面はナデ。外面の屈曲部分が煤化している。**729**（ピット962）は、厚さ0.5 cmと非常に薄い底部を持つ。外面は縦ハケ、内面はナデ。内外面底部がやや煤化している。いずれもⅡ様式であろう。

730（ピット787）は、壺の体部上半片。内外面ともにナデを施したのち、外面に4条のヘラ描沈線を施す。突帯部分がなく、平行な沈線を描いていることから、Ⅰ様式でも比較的新しい時期の所産。**731**（ピット680）は壺。13条の櫛描直線文と波状文が施される。Ⅱ様式後半。**732**（ピット735）は壺の体部上半片。外面に6条の櫛描直線文が施される。内面はナデ。非常に薄くではあるが、下2段の櫛描直線文に赤色顔料が塗布されている痕跡がある。Ⅱ～Ⅲ様式。**733**（土坑571）は、壺の体部上半。体部最大径付近にヘラ描沈線12条と縦に沈線間を切る細い刻みが施される。内外面とも横ミガキが施されている。Ⅰ様式新段階。

先に図示した土坑633出土を除いた第7 b面出土の石器はすべてサヌカイト製である。出土点数は、剥片8点、スクレイパー4点である。**734**（溝600）はスクレイパー。横長剥片の長片に連続剥離を加えて刃部を形成している。打面は自然面である。**735**（ピット784）は剥片。連続剥離で発生する剥片である。**736**（ピット773）は両面調整石器。匙状の剥片に両側縁から剥離を施しており、上端は欠損。**737**（土坑676）はスクレイパー。側面に大きく自然面を残す。打点の反対にあたる辺に両面から剥離を加えて刃部をつくる。**738**（土坑646）もスクレイパー。背面の自然面が打面まで連続していることから、母岩のもっとも自然面に近い部分の剥片を使用していることがわかる。横長の剥片の一辺に剥離を加え刃部に整形する。刃部と腹面の中央付近に擦痕がある。**739～742**は剥片。いずれも小さく、厚みも薄い剥片で、二次加工以降に発生した剥片であろう（739：土坑645、740：土坑719、741：ピット773、742：土坑678）。**743**（ピット645）はスクレイパー。剥片の自然面の残らない長辺に粗い剥離をし、刃部に仕上げる。

出土遺物（図120・121） 第7層からはまず、弥生土器片が186点出土した。744・745は広口壺。**744**は口縁端部に面をつくり施文しているが、口縁端部の下半部が口縁部外面より剥落しており、本来は下垂する口縁と考えられる。口縁端部に扇形文が描かれ、端部上端には刻み目が施される。Ⅲ様式か。**745**は、肥大させた口縁端部に乱雑な波状文が描かれ、頸部の上位から8条の櫛描直線文が描かれている。内外面とも板ナデ。生駒西麓産の胎土。Ⅱ様式。**746**は無頸壺。口縁端部を平坦に整形する。外面はミガキの

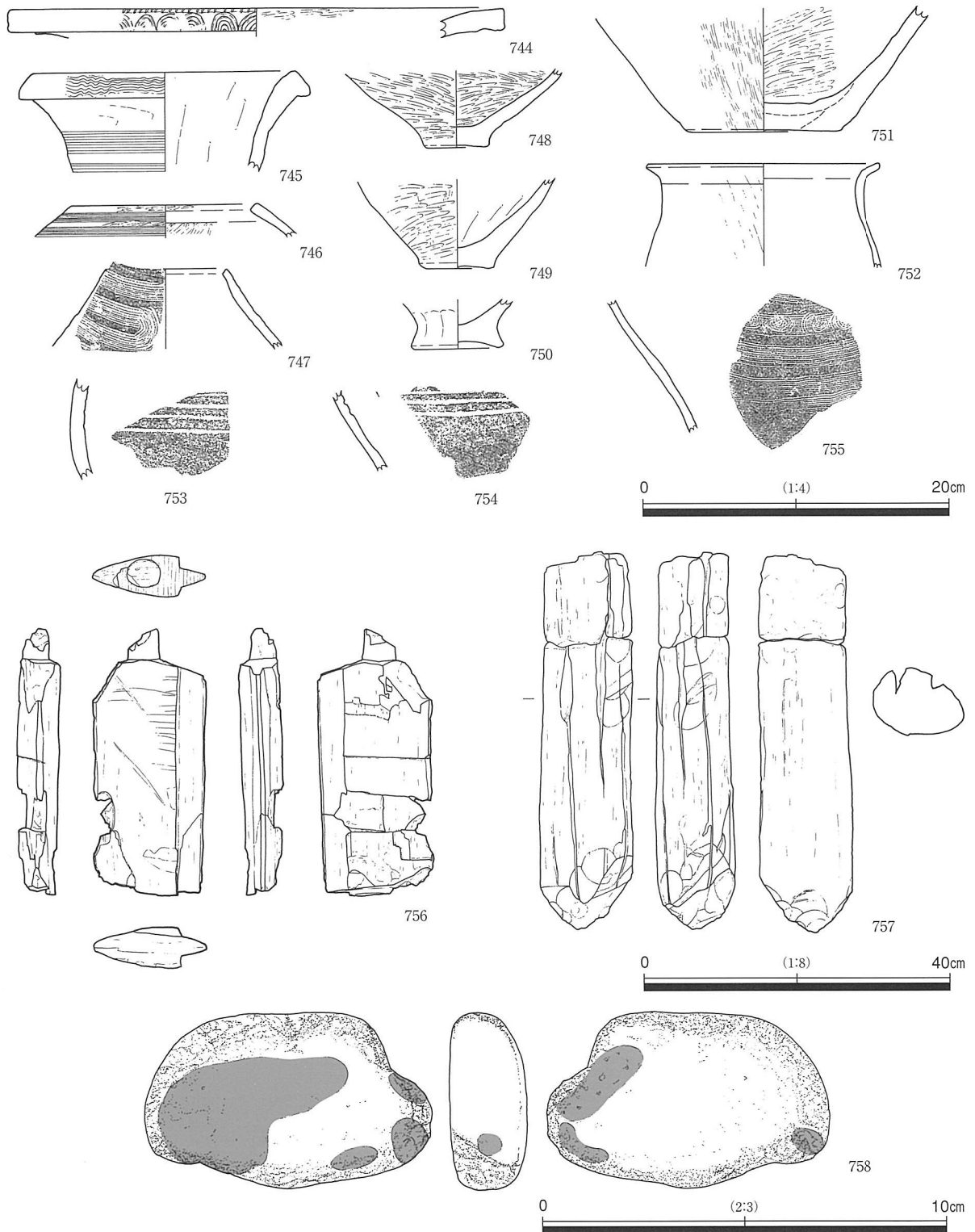


図120 第7b層 出土遺物(1)

ち、口縁部直下から8条の櫛描直線文が施される。内面は口縁直下横ナデ、内面はミガキ。Ⅱ-2 様式か。
747は無頸壺。口縁部は内湾する。外面は9条の櫛描直線文を施し、上下2段を半円でくくる流水文が描かれる。その無文部分は横ミガキ。内面は剥落のため調整は不明。Ⅱ-2~3 様式。**748**は壺。小さめの底部から丸くたちあがる器形、内外面とも横ミガキで調整されることから壺と判断した。しかし、煮沸に使われたらしく、器高3cmの部分の内外面に一周、帯状にコゲバンドが形成されている。**749**は壺。外面はミガキ、内面は板ナデ。**750**は甕底部。底部内外面、外面の全てが煤化している。**751**は壺底部。器

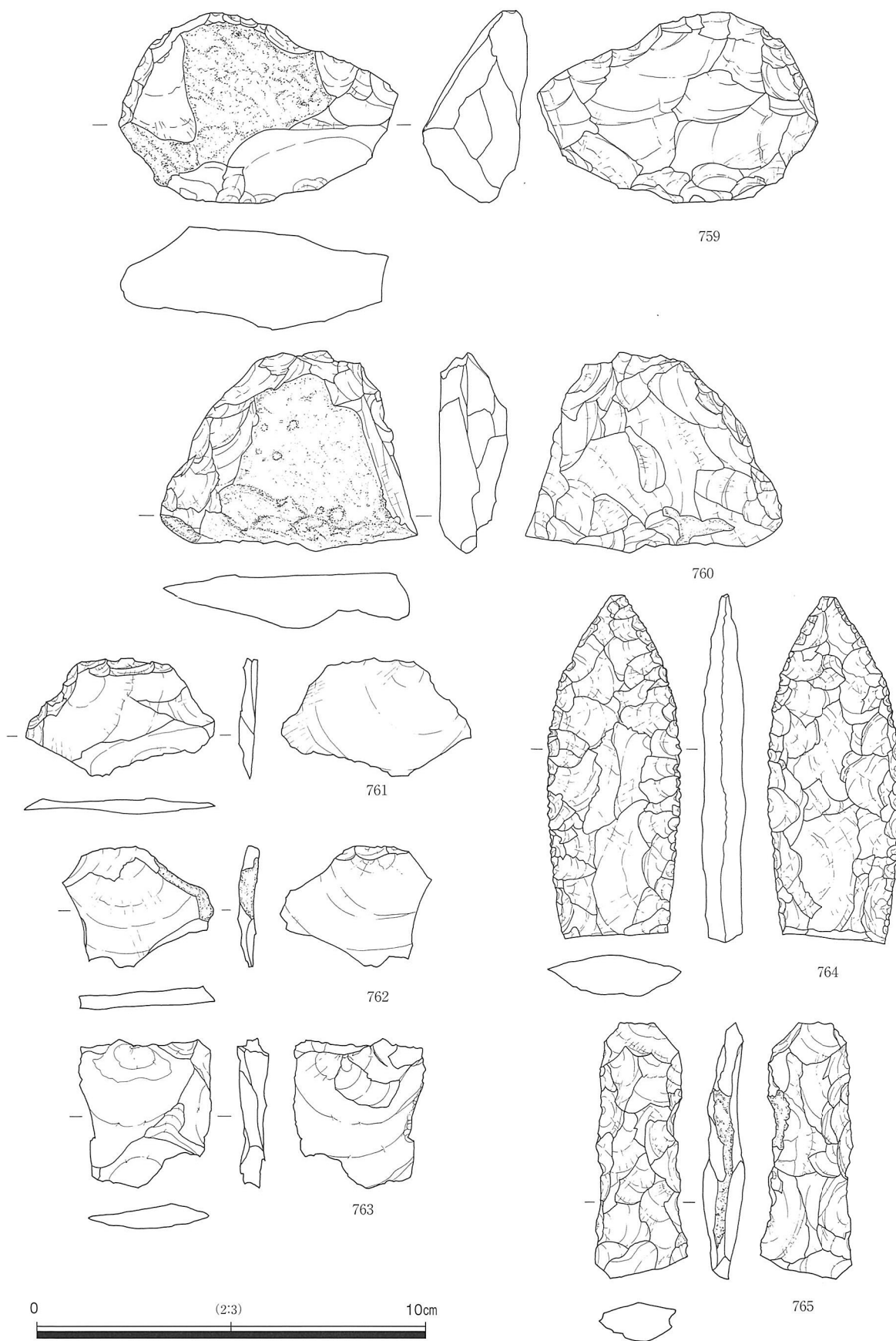


图121 第7b层 出土遗物(2)

形・調整から壺と判断したが、底部内面と体部の一部に炭化物が付着していることから、煮沸に使用されたものと考えられる。**752**は甕。体部は一度内湾し、口縁部が短く外反する。外面は縦ケズリが施され、口縁部直下約1cmを残して真黒に煤化している。内面は、体部が縦ナデ、口縁部が横ナデ。煤化は見られない。口径15cmと小型の甕で最大径より体部上半が短く、傾斜があまりないことから全体的に煤のつきやすい器形ではある。しかし、内面に全く煤化が見られないことから、煤の多く出る薪で一気に炊かれ、煤が広範囲に厚く付着したと考えられる [小林・柳瀬2002]。紀伊型か。Ⅱ様式。**753**は、壺の体部上半片。頸部最下段にヘラ描沈線文4条が施される。外面は摩滅のため調整不明、内面は横ミガキ。Ⅰ様式新段階。**754**は体部上半片。全体が摩滅しているが、外面はハケのち、ヘラ描沈線を3条施文す。内面は摩滅しているため調整不明。Ⅱ様式新段階。**755**は壺の体部上半。外面に10条の櫛描直線文が施され、一部には、その上から渦巻き文が描かれる。櫛描直線文間はミガキ。内面は比較的密な横ミガキのち、粗い縦ミガキ。この破片の最上段に赤色顔料が少量塗布されている。Ⅱ様式。

次に、木製品は5点出土した。また、先述したように、第7b層掘削中に杭が8点出土している。このうち2点を図化した。**756**は経（布）巻具。樹種はヤマグワ。一木造で、長い板の両端が把手にのびる形式のものの把手状部分と板状の部分の一部が残存、両端は欠損している。身の断面形は矢尻状であり、身の片面には横方向と一部斜め方向の擦痕が確認できる。また、その裏面は全体的に炭化している。類例は、兵庫県神戸市新方遺跡にⅡ様式の例 [奈良国立文化財研究所1993:PL97] が見られるが、身の断面形が菱形である点が異なる。ただし、身の幅が概ね同様であることから、本例も同様の大きさと考えれば、本来の長さは75cm程であった可能性も考えられる。**757**は杭。樹種はアカガシ亜属。比較的大型で、先端部分を鈍角に尖るように加工されている。検出したのは第7b層だが、打設面はさらに上層の可能性もある。

これらの他、赤色顔料付着礫1点、打製尖頭器1点、スクレイパー3点、剥片3点が出土した。**758**は自然礫。両平坦面に薄くではあるが、ベンガラが観察できた。ベンガラが礫の細かな砂粒の間に擦りこまれていないこと、全体に摩滅した痕跡がないことから、擦り石ではないようである（富田克敏氏のご教示による）。おそらく、ベンガラを使った作業時に塗布されたか、飛沫を浴びたかによって付着したのではないかと考えられる。

759～**765**はサヌカイト製打製石器と剥片である。**759**は尖頭器未製品。基本的に腹面からの加工が施されている。基部の部分に刃つぶしの痕跡があるが、この場合の意図は不明である。背面はこれ以上加工できない。石材はサヌカイトだが、白い斑模様が目立つことが特徴的である。**760**はスクレイパーか両面調整石器未製品。腹面全体と背面の3辺に加工が施され、一辺は両面調整がなされている。背面の自然面が腹面に及ぶ。**761**～**763**は剥片。**761**は、打面に多くの剥離痕があり、何度か打撃を受けた痕跡がある。**763**は打瘤が残り、比較的大きな力で剥離されたようである。**764**は打製尖頭器。面の中央部分が最終調整以前の剥離のために平坦になっているので、明確な稜はなく断面形は凸レンズ状となる。調整は両面に両側縁から剥離が施され、先端付近は約2mm刻みの鋸歯刃となっている。下端部は折れ。**765**は両面調整石器。下端は折れている。両面・両側縁から加工がなされ、片側縁に著しい。両面調整石器未製品の再加工品であろう。また、層中よりアルコース砂岩の自然礫を得た。

時期 弥生土器186点のうち、前期に属する土器は3点のみと圧倒的に中期前半に属するものが多い。後述する第8面の時期を鑑み、第7b層の堆積時期は概ね弥生時代中期前半に属するものとする。

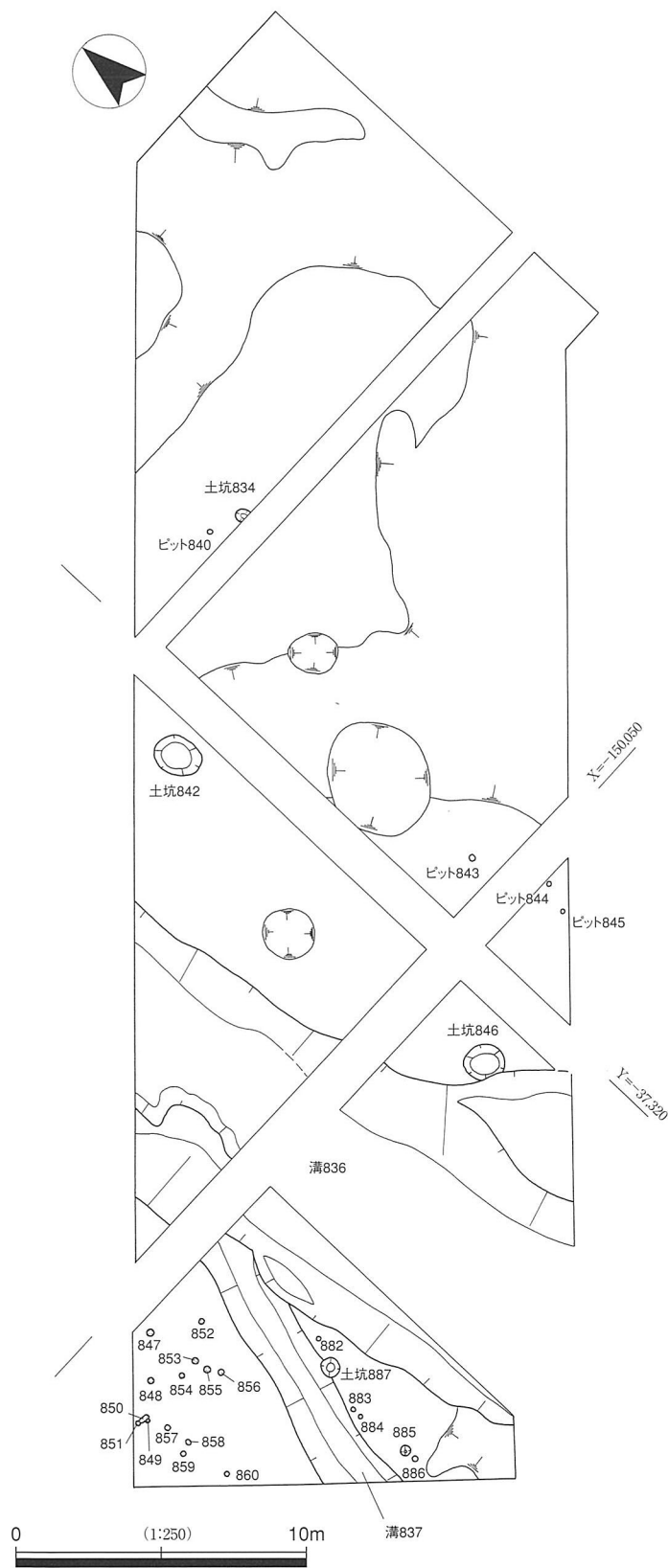
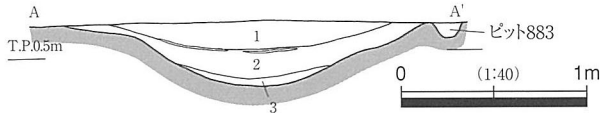


図122 第8面西半 平面図 (S=1/250)

第8面 (図122) 第8面は、第7b層の暗オリーブ灰色～暗青灰色(5GY4/1～5B4/1)の有機物を含む粘土～シルトの互層となったラミナの見られる粘性の強い堆積を除去し検出される第8層上面である。ただし、調査区東半の第8層は断面観察の結果、土壌化しているものの、植物遺体を含んだラミナの見られる有機物層として認識でき、人為的な攪拌が見られなかったため、断面観察にとどめ、第8層上面の第8面調査は行っていない。調査区西半は地形的にも高く、第8面を構成する第8層は、オリーブ灰色～黒色(5Y4/1～3/1)シルト層として約10cmの厚みと確認された。

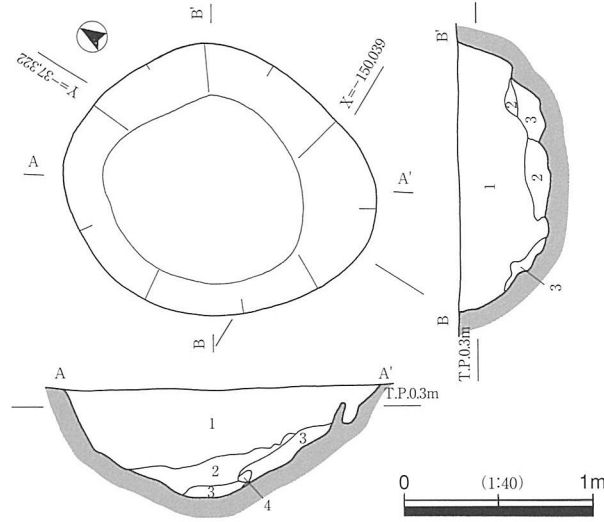
調査を行った西半の第8面は、西から東へ徐々に低まる地形で、標高はT.P.0.11～0.70mである。地形は南西端から北に向かって流れる溝836を境に西が微高地となっている。溝836より東側は、上層からの攪乱で寸断されているが、徐々に北東に低くなる緩斜面である。検出された遺構も溝836を境にして土坑やピットが散在する程度の東側と、ピットがやや集中する西側に分けられる。検出された遺構は、溝、土坑、ピットである。

溝 溝は2条検出された。**溝836**は、中～極粗砂を中心とした粗粒堆積物で埋まった溝で、幅7.80～11.80m、深さ0.75～1.37mである。底部のレベルは北端でT.P.-0.64m、南端でT.P.-0.57mであり、南から北への流れが推定されるが、粗粒の堆積物によって埋没したことを考える



- 1 10Y3/1 オリーブ黒色 極細～細砂に幅約1～3cmの5Y5/1灰色 極細～細砂が混じる
- 2 25GY4/1 暗オリーブ灰色 シルトと5Y6/1～5/1灰色 極細～細砂の互層 上部に植物遺体
- 3 10Y2/1 黒色 シルト(粘性強)に植物遺体粒を含む 第8層と違い、砂を含んでいない

図123 溝837断面図 (S=1/40)



- 1 75Y4/2 灰オリーブ色～4/1灰色 細砂中に10Y3/2～3/1 オリーブ黒色
シルトブロック(φ3～15cm)が大量に入る
- 2 10Y3/2～3/1 オリーブ黒色 シルト～細砂
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト～細砂
- 4 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト～細砂と5Y4/1灰色 細砂の攪拌層

図124 土坑842 平・断面図 (S=1/40)

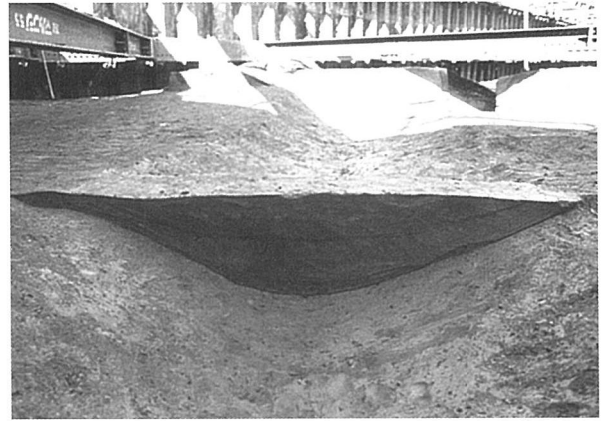


写真130 溝837 (南から)



写真131 土坑842 (東から)

と、その際の侵食も考慮する必要がある。ただし、周辺の地形を考えると、南から北への流れは妥当であろう。周辺も含めた堆積過程は、当初第8面埋没後、まず湿地性の粘土～シルトが堆積し、のちに粗粒堆積物がそれを挟るように堆積したものと考えられる。なお、この堆積により溝部分は平坦になったものと考えられ、その上面が第7面の当初段階の景観であり、第7面のある段階に再び同様な部分に溝が開削されたものと思われる。

溝836出土遺物 (図125) 弥生土器片92点が出土した。**766**は壺。外面は斜めから縦方向の粗いハケ、内面は横ミガキ。口縁端部は外面の斜めハケにより、結果としてやや下垂気味になり、やや面を持ち擬凹線状を呈する。Ⅱ-2様式。**767**は広口短頸壺。口縁端部平坦面に3条のヘラ描沈線文、下部に刻み目を施す。頸部にも4条以上のヘラ描沈線文が施文される。摩滅著しく調整は不明であるが横ミガキであろう。Ⅱ-1様式。**768**は壺。底部から丸くたちあがる器形で体部に9条の櫛描直線文が施文され、のち斜めミガキにより一部櫛描直線文が消される。内面も横・斜めミガキ。Ⅱ様式前半。**769**は壺の体部上半片。削り出し突帯上にヘラ描沈線2条が施されている。ローリングを受け、器面が摩滅しているため全体の調整は不明。Ⅰ-2様式。**770**は長原式土器の深鉢。口縁がやや内傾し、端部に貼付け突帯を付し、刻み目を施す。ローリングを受け、器面が摩滅しており、調整は不明。**771～774**は甕底部。**771**は、内外面とも縦方向の強いナデ。外面の約半周に炭化物が付着。Ⅱ様式。**772**は内外面とも剥落のため調整は不明。底部内面が煤化。器形などからⅡ様式と考えられる。**773**は内外面がナデ、体部外面の器高1cm以上の部分に炭化物が付着している。全体に二次焼成を受ける。**774**は、外面縦ハケ、内面は指頭圧痕が残る。外面の器高1cmの部分が煤化。底部には木葉痕が見られる。**775**は甕。口

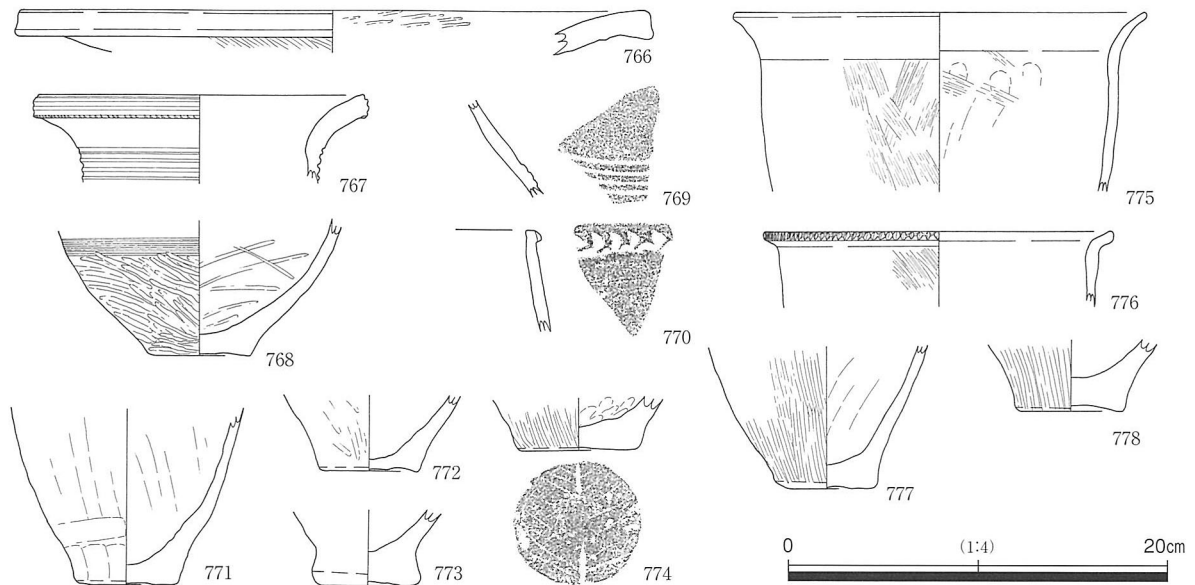
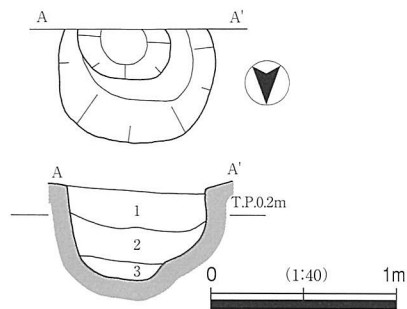


図125 溝836 出土遺物

縁部は弱く外反し、端部は丸い。体部は内外面ともハケ、口縁部は内外面とも強い横ナデ。体部が約1/6周煤化。Ⅱ様式前半。**776**は甕。短い口縁部が強く外反し、口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施す。体部外面は斜めハケ内面はナデ、口縁部は横ナデ。外面が煤化。Ⅰ様式。**777**は甕底部。外面ハケ、内面は板ナデ。体部が内外面とも煤化している。**778**は甕底部。外面は縦ハケ、外面は調整不明である。外面は器高1cm程度の部分、内面は底部のやや上部が輪状に煤化。内面には薄く炭化物が付着している。

以上の遺物には、770の縄文土器や769のⅠ様式が見られるが、ローリングを受けていることから、他所から流入したものを巻き上げたものであろう。776はそれらほど摩滅していないが、他にⅠ様式とされる遺物は無きに等しい。多くの遺物はⅡ-1~2様式であり、これが溝の機能時期の一点であろう。

溝837 (図123、写真130) は、調査区南西部に位置し、若干東に振りながら溝836に合流する。幅1.5~2.0mで、深さは0.2~0.34mである。底部のレベルはT.P.0.31~0.38mで、大きな差は見られないが、若干南に低くなっていることから、南流していた可能性が考えられる。しかし、溝836との接続部分に杭列が見られることもなく、溝836から、溝837に水を流していたとは考えにくいことから、北流する溝の可能性が高いと考えられる。埋土は、ラミナの明瞭に見られる極細~細砂を主体とし、シルトが混じる。最下層は植物遺体を多く含む粘性の強いシルトで、溝が機能していた初期段階の堆積と考えられる。



- 1 5Y4/1 灰色~3/1 オリーブ黒色 シルト~粗砂 (シルト主体で所々に粗砂ブロック混じる)
- 2 7.5Y5/1~4/1 灰色 細砂に5Y4/1 灰色~3/1 オリーブ黒色 シルトブロック (1~5cm) 混じる
- 3 10Y4/1 灰色 細砂

図126 土坑834 平・断面図 (S=1/40)

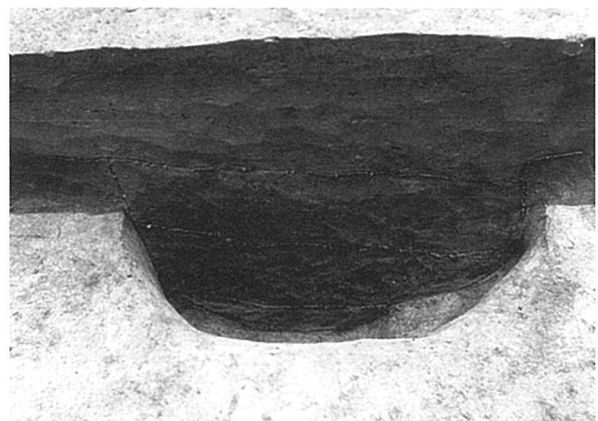


写真132 土坑834 (北から)

埋土2中央上部にも植物遺体の堆積が見られることから、ある時期は埋土2上部を溝底として機能していたことが考えられる。出土遺物はない。

土坑 土坑は5基検出された。**土坑834**（図126、写真132）は調査区西半の東よりに位置し、形態はほぼ円形で直径約0.5m、深さ0.51mであるが、南側は土層断面観察用アゼにかかる。埋土は、上部がオリーブ黒色（5Y3/1）シルトをベースに粗砂のブロックが混じるもので、下部ほど砂の混じりが多い。最下層はベースの極細～中砂にシルトが混じったものである。出土遺物はない。

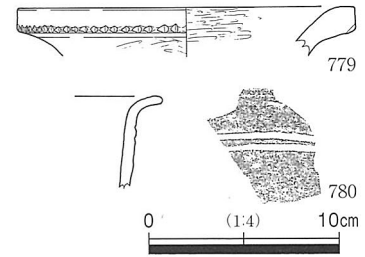


図127 第8層 出土遺物

土坑842（図124、写真131）は調査区西半の中央部に位置する長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.59mの楕円形の大型土坑である。埋土は最下部がオリーブ黒色（5Y3/1）シルトを主体とし、シルト～細砂のブロックが混じり、機能時に第8層が流れ込み堆積したものと思われる。その後、粘質の堆積（埋土2・3）があり、最終的には第7b層および第8層がブロック状に混じる灰～灰オリーブ色（7.5Y4/1～4/2）極細砂を主体とする層で埋没する。第7b層が埋土中に見られることから、上層から掘り込まれた遺構と考えられる。出土遺物は、弥生土器甕底部片1点のみ。小片で図化不可能であったが、外面に縦ミガキが見られ、内面はハケ。底部内面と外面全体が煤化し、外面はパッチ状に剥落が見られる。詳細な時期は不明だが、前期まで遡るものではなく、Ⅱ様式の範疇に収まるものであろう。

土坑846は西半南部の溝836際に位置する長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.14mの浅い円形の大型土坑である。埋土は暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土～シルト。出土遺物はない。

土坑887は調査区西半の南部に位置し、長軸0.7m、短軸0.65m、深さ0.11mのほぼ円形の土坑である。溝837を切る。埋土は暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土～シルト。出土遺物はない。

ピット ピットは22基が検出された。いずれも直径は0.15～0.2m前後で、深さも0.1m以下の浅いものであった。これらのピットのうち一部は、埋土が明らかに第7層と考えられる黒褐色（10Y3/2～2/1）極細砂に有機物を多く含む粘質シルトで、本来は第7b面段階に検出すべきであった遺構である。このピットは主に調査区南西端西側に集中しており、ピット843・844・845・847・848・849・850・851・852・853・854・855・856・857・858・859・860が該当する。もうひとつは第7b層が落ち込んでいるもので、第8面最終段階に開口していたと推定される遺構である。主に溝837東側に集中している。ピット840・882・883・884・885・886が該当する。この部分からは先述の土坑887も検出されている。やや乱れてはいるが、溝に規制されている印象が持たれることから、溝に伴う関連施設の可能性も考えられる。いずれのピットからも出土遺物はない。

このように当面に伴う遺跡は少ないものの、排水路と考えられる溝837からは、調査区の南西側に居住域の中心が存在する可能性も考えられる。

出土遺物（図127） 第8層からは弥生土器片が約30点出土した。**779**は広口壺。口縁で、口縁端部に粘土を足して肥大化させ、下端に刻み目を施す。内外面とも横ミガキ。Ⅱ-1様式。**780**は甕。口縁部を如意状に外反させ、内外面ともナデ。外面頸部下にはヘラ描沈線を2条施す。ほぼ垂直になる体部上半形態やヘラ描沈線の条数の少なさから、Ⅰ-3様式の所産と考えられる。

時期 出土した土器には、弥生時代前期に遡るものも見られるが、多くはⅡ様式に比定される。ただし、古相を呈する遺物が多い。また、後述する下層の遺物の時期も加味すると、第8層は遅くともⅡ-1様式頃形成され、短期間使用された程度であろう。

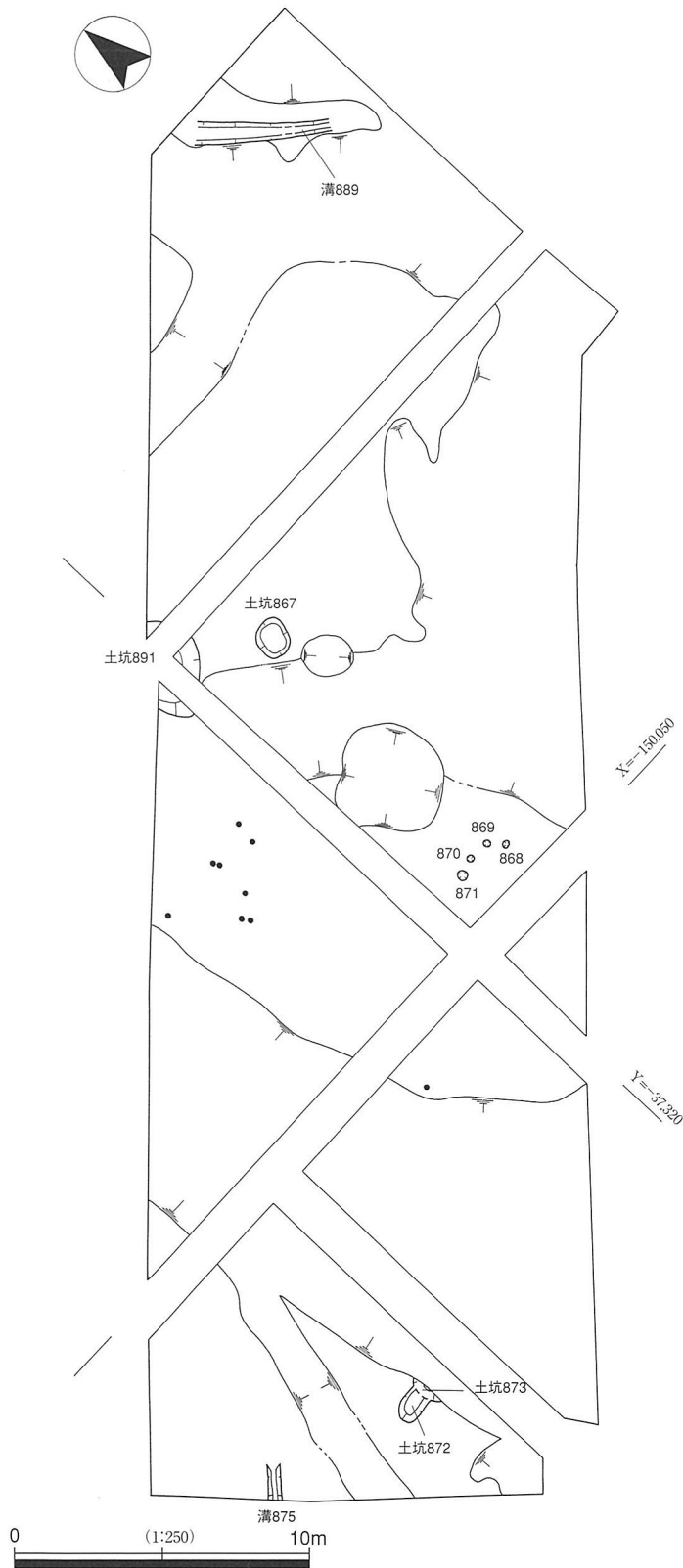


図128 第8b面西半 平面図 (S=1/250)

第8b面 (図128) 第8b面は、土壌化の強い第8層の黒色粘土層を除去し、検出されるオリーブ黒色～黒色(5Y2/1～3/1)粘土～シルトを主体とする第8b層上面である。第8面でも記したように、調査区東半の第8層は自然堆積層と認識し調査を行わなかったため、ベース面である第8b面も調査を行っていない。面の高さはT.P.0.02～0.60m。地形は、西南端が最も高く、断面の観察から調査区西半東端部で東に向かって若干高くなることが看取された。また、調査区西半の北東では溝869から土坑867にかけての部分が高くやや盛り上がった微高地部分になっている。検出遺構は、溝2条、土坑、ピット4基で、出土遺物はわずかであった。

土坑 土坑は4基検出された。土坑867は、調査区西半中央付近で検出された。長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.5m。掘り方は2段になっている。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)粗砂がブロック状に含まれるオリーブ黒色(10Y3/1)シルト～細砂の単層である。遺物は最も深まっている部分に集中するものの、底部からは浮く。2段になっている土坑の最深部埋没後の廃棄と考えられるが、埋没土は分層されなかった。類似した土で土坑を埋めたため、判別できなかったものと思われ、本来は分層されるべきであったのかもしれない。また土坑867付近は第7層～第8層の堆積が薄く各面の検出が困難であったこと、遺物の時期差のないことからより上層にとうもなう可能性は

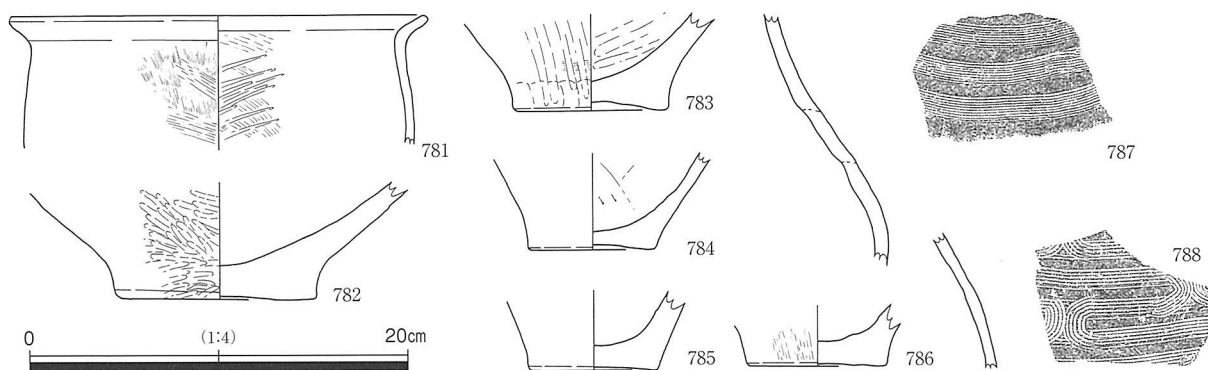


図129 土坑867 出土遺物

ある。

土坑867出土遺物（図129） 土器54点、貝5点、動物遺体1点、自然木1点が出土した。781は甕。外面は原体の細かい縦ハケのち、斜めハケもしくはミガキだが、煤化のため判然としない。内面は斜めハケのちミガキ。外面は口縁端部を除き、全体的に煤化している。Ⅱ様式前半。782は壺底部。外面横から斜めミガキ。内面は板ナデ、ハケ。外面には煤が一部に付着する。783～786は甕底部。783は外面原体幅の太い縦ミガキ、内面は不明瞭ながら同様に原体幅の太いミガキ。内面に輪状に煤化の痕跡が残る。Ⅱ様式前半。784の外面は煤化と摩滅により調整不明。内面は砂粒が動く強いナデが施される。外面は全体的に底部まで煤化。785は内外面とも調整不明瞭だが、外面はミガキか。外面の下端以上と内面の残存部分全体に炭化物が残る。特に底部内面の煤化が著しい。786は外面に縦ハケが僅かに見られるが、全体的に摩滅著しい。内面は調整不明。底部内面と、外面全体が煤化している。787は壺体部片。体部上半に10条の櫛描直線文が3段施文される。いずれも上から10条目が弱く、同一原体を使用したものと考えられる。外面は縦ハケのち櫛描文の施文のち、ミガキか。内面は斜めハケのちナデ。外面で櫛描直線文が施される部位より上のナデは比較的丁寧。内外面の一部が煤化するが、断面にも見られることから、破片になった後に煤化したものである。Ⅱ様式。788は壺の体部上半片。6条の櫛描による流水文を施文する。櫛描直線文を描いたのちに、上下をつなぐ流水文。内面は炭化物が全体に付着している。流水文の形骸化があまり進んでいないことから、Ⅱ様式でも比較的古い段階のものと考えられる。

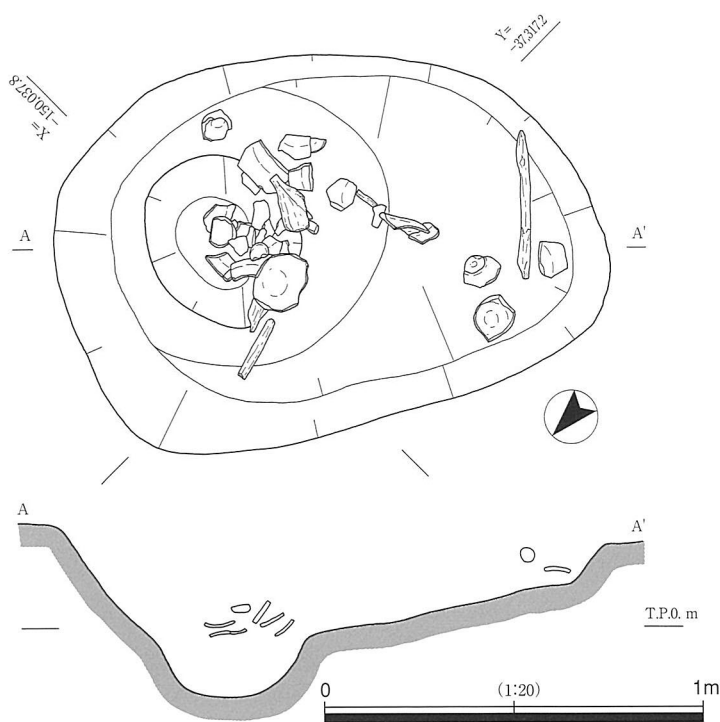


図130 土坑867 平・立面図（S=1/20）

動物遺体はイノシシの右肩甲骨（骨-28）が出土した。解体痕や使用痕は見られなかった（安部みき子氏ご教示による）。

貝はハマグリ（貝-5）、オキシジミ（貝-6・7）、ドブガイ？（貝-8）、不明（貝-9）である（写真134、表4）。ハマグリ、オキシジミは鹹水性の貝であり、

左右貝の一方のみ出土しているため食物残渣であると考えられる(池田 研氏ご教示による)。なお、オキシジミは同種の中では最大級個体である。

加工痕のある木材1点が出土した。この木材を試料に加速器質量分析法により、年代分析を行った結果、暦年代較正した1 σ 暦年代範囲でB.C.410~385年という結果が得られた。なお、これら動物遺体・貝・年代測定についての詳細は第6章を参照されたい。

土坑891は調査区西半中央部北よりの、大型土坑である。土層断面観察用トレンチによって寸断されているが、長軸2.7m、短軸約1.7m、深さ0.1mである。形態は不整形ながらやや隅丸形状を呈する。埋土は灰色(5Y4/1)粘土~シルトにラミナの観察できる極細砂ブロックが混じっていた。上部に第8層が堆積していることから、第8層中のある段階の遺構である。出土遺物はない。

土坑872・873は切りあいが見られ、東側は攪乱に切られる。**土坑872**は東西に長く、長軸約1.0m、短軸0.7m、深さ1cm程度の楕円形と推定される。出土遺物はない。**土坑873**は、南北に長く、長軸1.2m、短軸約0.4m、深さ8cm程度の楕円形。埋土はいずれも灰色(10Y4/1)粘土~シルトで、識別は困難であったが、形態的な特徴から二つの遺構と判断した。切りあいは不明瞭ながら、土坑873が土坑872を切るものと考えられる。

溝 溝は2条検出された。**溝889**は、調査区西半北側の微高地上で検出された南東-北西方向に延びる溝である。検出長5.2m、幅0.4~0.75m、深さ2~27cm。埋土は第8層の黒褐色(10YR3/2~2/1)粘土~シルト。出土遺物はない。

溝875は、調査区南西端から北東方向に検出された。幅0.5m、深さ9~13cm。埋土は溝889同様、黒褐色(10YR3/2~2/1)粘土~シルト。出土遺物はない。

ピット 調査区西半中央部でピット868~871が検出された。いずれもオリーブ黒色(5Y3/1)粘性の強いシルトを埋土とする。**ピット868**は直径0.25m、深さ0.16m。**ピット869**は直径0.25m、深さ0.33m。**ピット871**は直径0.35m、深さ6cm。いずれからも、出土遺物はない。

ピット870は、直径0.25m、深さ0.3m。オリーブ黒色(5Y3/1)粘土の強いシルトに植物遺体を含む埋土で、弥生土器片2点が出土した。いずれも小片で図化不可能な壺片。うち1点は口縁部片で端部がやや下垂する。文様などは見られない。II-2様式にあたる。

これらのピット相互の位置関係に目を転じると、弧を描いているように見られる。また、第8面段階にもこの付近において3基のピットを確認している。現状では両者の位置関係に有機的なつながりを見られないが、その可能性は高いものと推定される。また先述のようにピット870の出土遺物から見て、この遺構についても第7b面段階の遺構の可能性が高い。

出土遺物(図131) 第8b層からは弥生土器片が5点、木製品が3点、石器・剥片2点が出土した。**789**は広口壺。口縁端部平坦にし、やや拡張傾向気味。外面縦ハケのち、頸部の上方から9条の櫛描直線文を施す。内面は横ハケ。いずれのハケも粗く、図125-766のハケに類似。内面上部のハケは部分的にナデ消される。II様式。**790**は外面縦、斜めミガキ。内面は横ナデ。外面は体部中位付近が、内面は全体的ながらやはり体部中位が煤化。河内形甕。II様式。

791は右側面は残存。側面、裏面に穿孔途中の痕跡があり、表面は平坦に、裏面はややカーブをつけ製作している。直柄平鋏の広鋏V式[奈良国立文化財研究所1993:41]の加工途中の破損品か。樹種はアカガシ亜属。**792**は杭。下半部の節の部分から「く」の字型に曲がっており、先端は鋭角に加工されている。樹種はヤマグワ。**793**は板状に加工されており、形状から小型の曲柄平鋏かと思われる。樹種

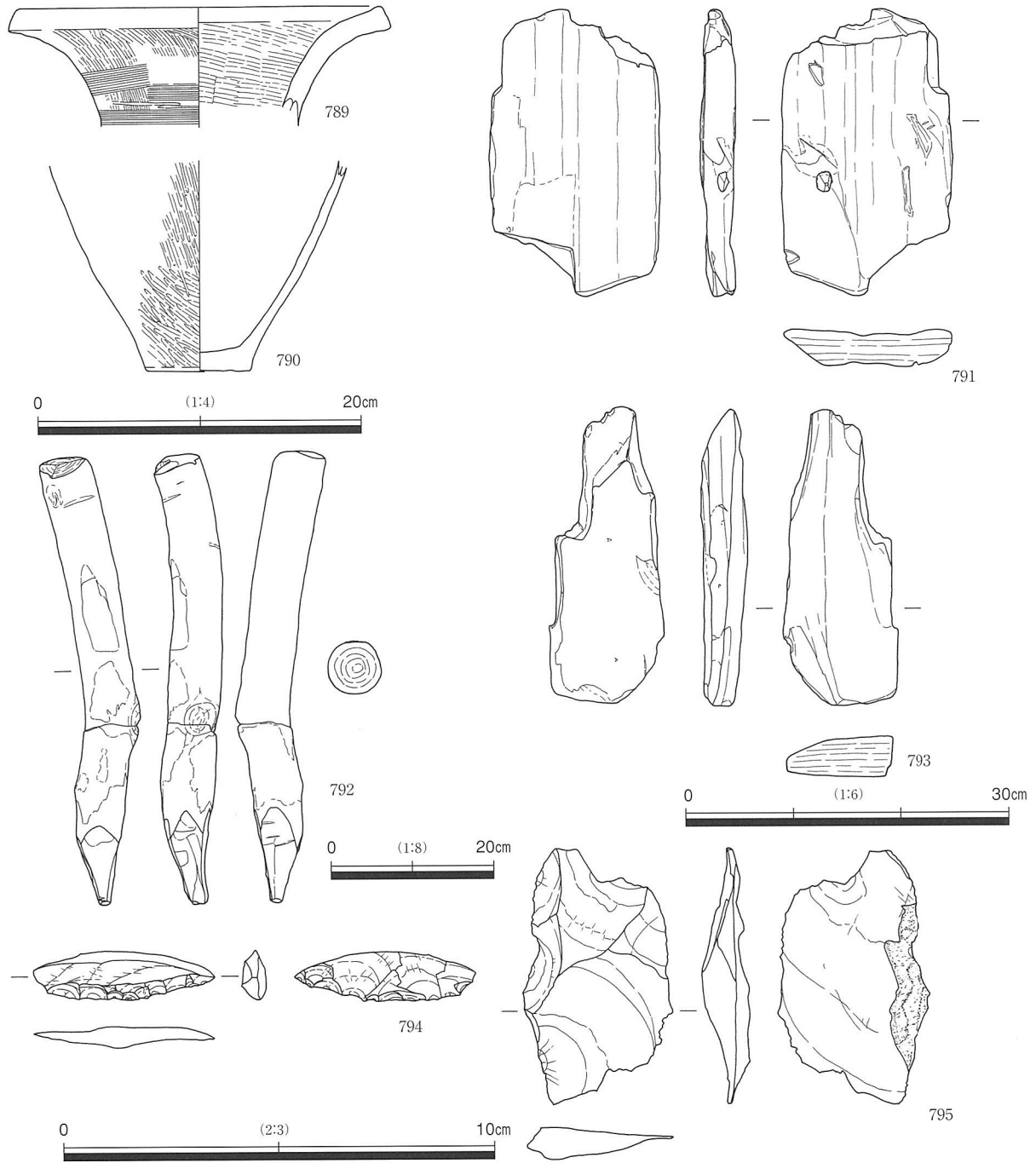


図131 第8b層 出土遺物

はヤマグワ。

794はスクレイパー。図の形状では旧石器時代のナイフ型石器に似ているが、上端は折れ、加工された刃部を中心に残存している。風化の度合いから縄文時代に遡る資料と考えられる。795は剥片。裏面の一部に自然面が残る。弥生時代のものであろう。いずれもサヌカイト製。

時期 出土した土器はすべてⅡ様式の所産である。縄文時代のスクレイパーが1点出土したが、他所からの流入品であろう。このことから第8b層の堆積時期は弥生時代中期前葉と考えられ、その上層の土壌化層である第8層上面の利用も短期間に限られる。第8面・8b面で検出された遺構のうち、確実に第8面段階と考えられるものは少なく、この面段階の活動は活発ではなかったようである。

第9面 (図132) 第9面は第8b層のシルト～極細砂を主体とするラミナの明瞭に見られる細粒の

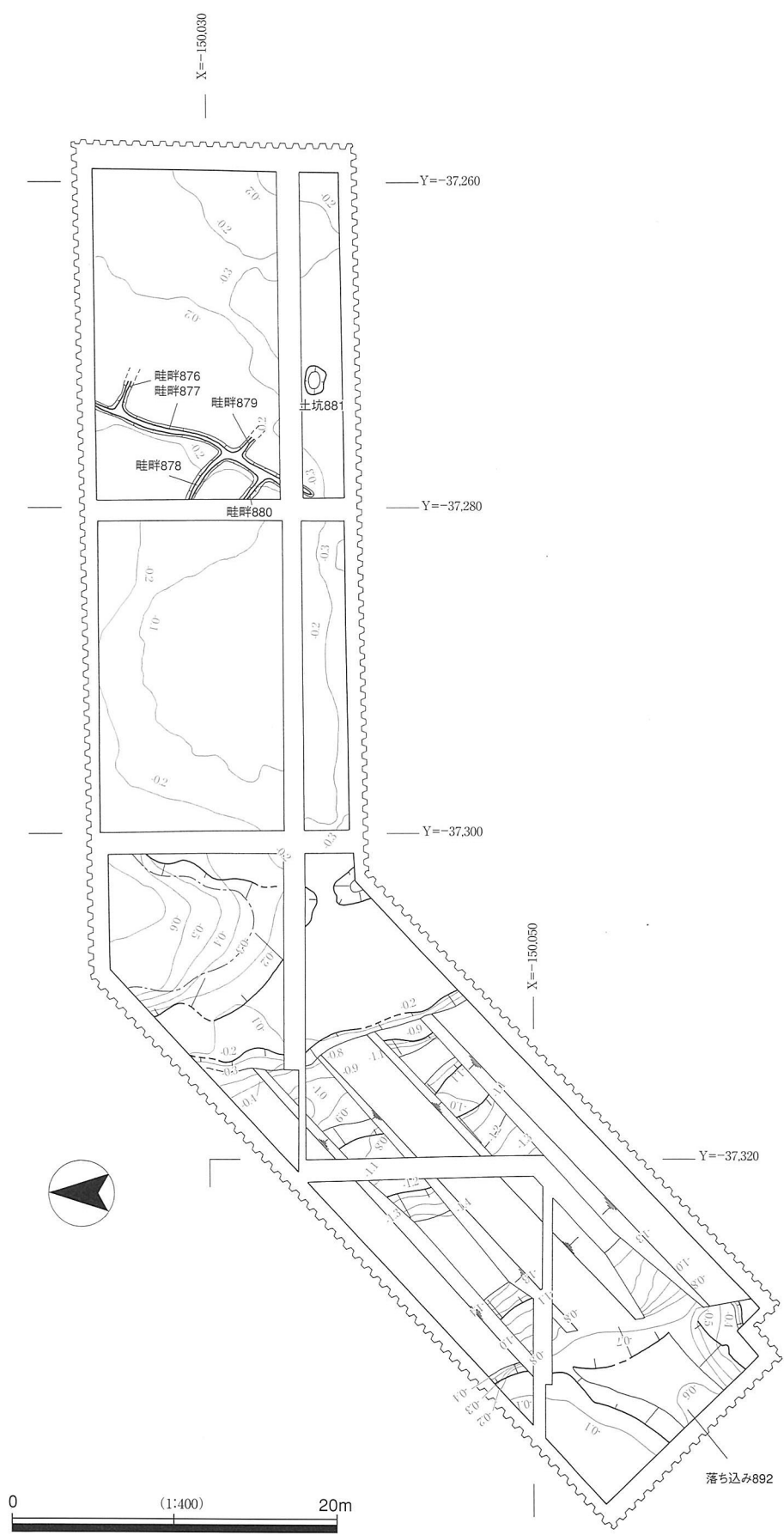


図132 第9面 平面図 (S=1/400)

堆積層および、調査区東端部および西端部などで見られる粘性の強い粘土～シルトを主体とする堆積層を除去し、検出される面である。なお、第9面を構成する層は、東半東側では基本的には黒色（7.5Y 2/1～10Y 2/1）粘土～シルトの第9層であるが、それ以西では第9層は見られず黒色（N2/）シルト質粘土を主体とする第10層上面である。以下では、第9層と第10層の両者の呼称を混同すると煩雑であるので、第9面構成層と記すこととする。

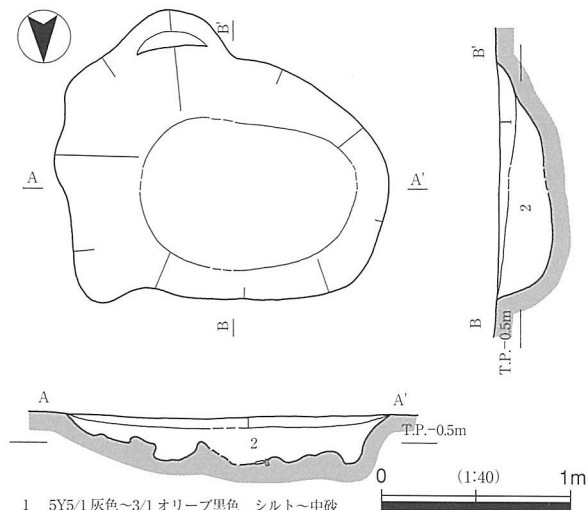
地形は、調査区西半部では南西端が高く、その北東に約25m程度の幅で大きな自然地形の落ち込みが南東―北西方向に伸び、落ち込みの東側には別の北への落ち込みが見られる。さらに、以東では比較的平坦な部分が続き、東半中央から東にやや下がる地形である。

西半部の大きな落ち込みの形成時期や形成要因について、まず時期は遺物の出土がなく不明であり、形成要因についても掘削深度の関係上、下層の観察が不十分なため不明である。しかし、調査区南西端の堆積状況を見る限りにおいては、第9面埋没以前のある時期に何らかの要因で大きなクレバス状の落ち込みが形成され、その部分の開口後に第9面構成層相当の粘土～シルトの層が堆積したものと考えられる。この落ち込み部分の第9面構成層相当層とこの部分以外の第9面構成層とは、層相が異なるが、概ね同時期の堆積と考えられる第8b層により覆われるため同一時期に地表面を形成していた層と判断した。なお、落ち込み部分の当初の堆積は、ラミナの見られる粘土～シルトといった湿地性の堆積物であり、のち粗粒の堆積が見られる。

また、調査区中央部の平坦面北側にも大きく窪んだ部分が確認されている。平坦部に比べて約50cm程の落ち込みであるが、安全掘削深度の関係から底部の一部は検出されていない。図133の木製品796～799はこの部分から出土している。



図133 第9面 出土遺物



- 1 5Y5/1 灰色～3/1 オリーブ黒色 シルト～中砂
(上方細粒化、自然堆積)
- 2 7.5Y4/1 灰色 中～粗砂混砂質シルト

図134 土坑881 平・断面図 (S=1/40)

る。

遺構は、調査区東半中央東より部分で畦畔876～880、土坑881が検出された。

畦畔 調査区中央部分の高まった部分から南と東に僅かに下がる緩傾斜部分に、等高線に沿って造成された幹線畦畔と考えられる畦畔877と、そこから派生する畦畔876・878・879・880が検出された。周辺への展開は不明だが、西側にも平坦地が展開しており、その部分にも水田が営まれていた可能性が考えられる。ただし、西側に水田が展開していたとしてもレベル差があり、そうであれば、筋堀部分に別の幹線畦畔が存在した可能性もある。なお、東側へは南東に向かい傾斜が急になるため、展開しても僅かであろう。

土坑 土坑881 (図134、写真133) は、調査区東半東側中央南で検出された不整楕円形の土坑である。上部の埋土1は第9面を覆う第8b層下部の粘質の自然堆積層と考えられる。下部の埋土2は中～粗砂の混じる粘質シルトである。埋土1が第8b層下部の自然堆積層と考えられることから、第9面機能時の遺構と考えられる。同面で検出された畦畔との前後関係が問題となるが、調査区東半の最深部に位置することから同時並存の可能性が高い。出土遺物は、弥生土器片3点。破片のため図化出来なかったが、外面ミガキの甕片2点と広口壺片1点が出土している。広口壺は、外面横ミガキで、口縁端部を肥大させずに平坦にすることから、I-2様式～II-1様式と考えられる。

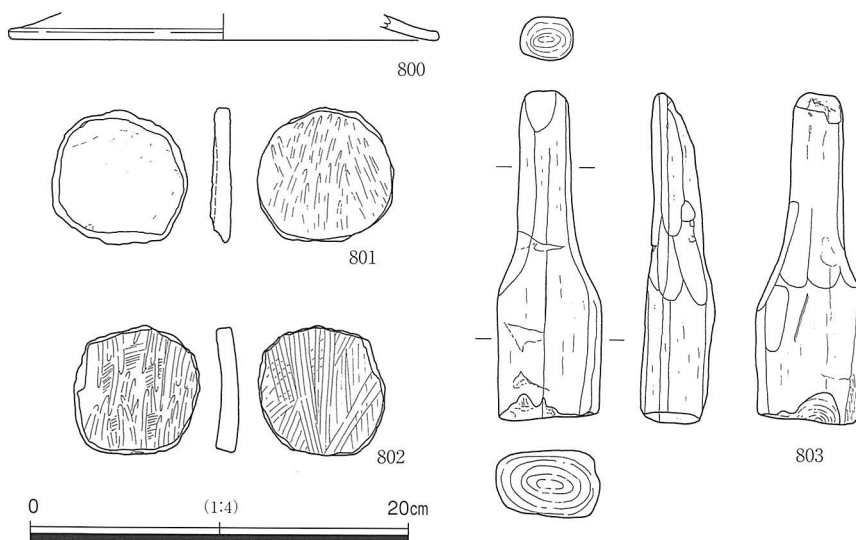


図135 第9層他 出土遺物

肥大させずに平坦にすることから、I-2様式～II-1様式と考えられる。

第9面出土遺物 (図133)

調査区中央部分で木が6点、調査区中央部分の微高地縁辺に沿うような形で第9面上で出土した。また、杭が1点、調査区北西端で検出された。上層からの打ち込みと考えられる。土器・石器の出土はない。木のうち加工痕のあ



写真133 土坑881 (北から)

る4点を図示した。なお、いずれも詳細な用途は不明であるが、板状に加工される。

796は幅約10cm、先すぼまりに加工されていることから、或いは曲柄平鋏の先端とも考えられる。樹種はクリ。**797**は両端、側面は割れ。樹種はスギ。**798**は特に裏面に顕著な加工痕が残る。農具未製品か。樹種はクスノキ。**799**は両側面、両端面とも割れ、表面は外皮に近い部分である。裏面を板状に加工する。樹種はスギ。

第9層他出土遺物（図135） 第9層出土遺物のほかに、層位を確定できない土層断面観察用アゼや側溝中から出土した遺物の中で、特徴的な遺物を図示した。**800**は甕蓋。第9層～第9b層中より出土。内面が強く煤化していることから甕蓋とした。口縁部の形状からⅡ様式前半以前と考えられる。**801・802**は土器転用土製円板。**801**は外面ミガキ調整の甕（河内形か）を打ち欠いて円板にしている。内面には炭化物が約1～2mmの厚さでびっしりと付着している。第7b層～第10b層中より出土。**802**も甕の転用。外面が煤化する。第6層～第10層中より出土。**803**は横槌。柄から槌にかけてなだらかな器形で、槌の断面形が長楕円形である。全体に摩滅が激しく、使用痕などは判断できなかった。樹種はサカキ。第7層～第10b層中より出土。

時期 上層までに比べ、遺物の量が極端に少なく、時期比定は困難である。しかし、第9面に伴うと考えられる土坑881から出土した遺物の時期がⅠ-2様式～Ⅱ-1様式頃に考えられることから、前期まで遡る時期を含む中期初頭と考えておく。

第9b面（図136） 第9b面は黒色（7.5Y2/1～10Y2/1）粘土～シルトの土壤化層である第9層と調査区西端部内の第9層相当層を除去したベース面であり、第10b面でもある。なお、調査区東半は第10層と境を接していたため、第10面の良好な状況での検出を考えて調査を行っていない。調査区西半は、遺物がまったく出土しなかったこと、顕著な遺構が認められないとの判断、指導のもとにこの面が最終調査面である。

明らかに人為的な遺構は検出されなかったが、先述の第9面西半落ち込み形成時には南西端からの合流する落ち込みが存在したことが明らかとなった。第9b層中からの遺物の出土もなく、堆積時期は不明ながら前期に遡る可能性がある。

第10面（図136） 第10面は先述のように調査区東半のみの検出であり、第9層と第10層間にはb層が見られない。第10層は黒色（N2/）シルト質粘土の土壤で、下部が植物の生痕などのためか凹凸が著しい。また、調査区東半では、調査区東半西端部は第9層自体の形成にかかわる土壤が堆積しなかったためか、第9層と第10層が同一層であった部分も見られた。地形は、若干の凹凸はあるものの大きな起伏は見当たらないが、調査区東半の南東から北西にかけての部分が若干低く低まりとして認識された。第10層からの遺物の出土はなく、時期は不明であるが周辺遺跡成果から弥生時代前期に遡る可能性が高いと考えられる。

第10b面（図136） 先述の第10層土壤化層を除去した自然堆積層上面である。掘削深度の関係上調査区東半のみの調査である。また、東南部の一部は掘削安全深度を超えることから検出できなかった。地形的には第10面同様の景観で大きな変化は見られない。第10b層からの出土遺物はない。なお、断面では部分的に第11層も確認されたが、面的な調査は行わなかった。

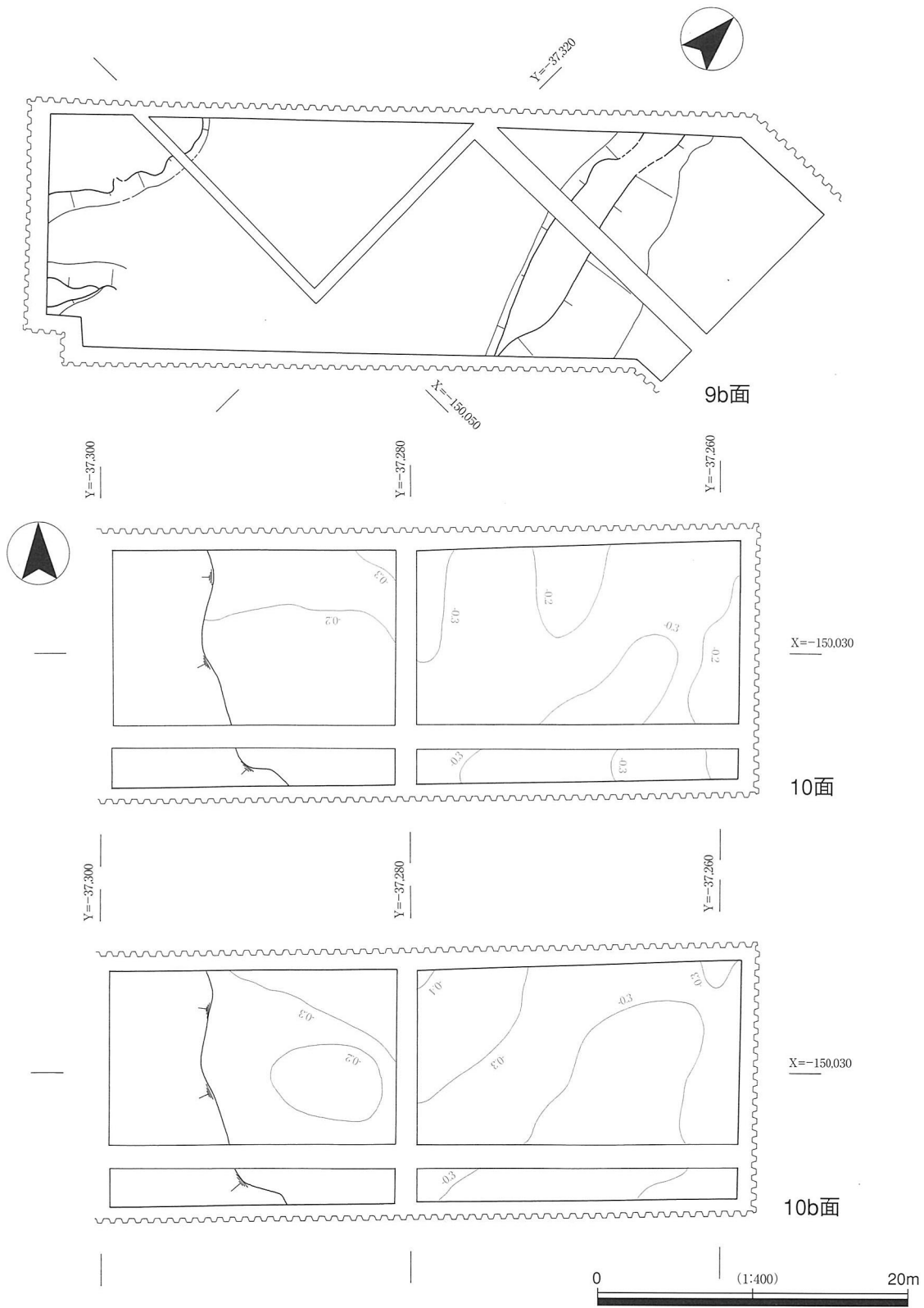


图136 第9b面·第10面·第10b面 平面图 (S=1/400)

小結

弥生時代の各層は河内平野の各遺跡同様に分厚い氾濫堆積層と、安定し土壌化した旧地表面の時期を繰り返している。今回の調査でも、調査区東端および南西端部を中心に、氾濫堆積物の影響を受けて地形が大きく影響を受けてきたことが理解できた。まず西半部は、やや微高地であり、基本的に安定した地形環境を形成し、居住関連遺構が検出された。また東半部は、地形的には基本的にやや低いものの平坦であり、生産域として水田が形成されていた。中央部分は、各時期を通じて低地部として両者を区切るように位置し、積極的な利用はあまりなされなかった。第6面・第7面などで確認された調査区西半の中央部の高まりや東半中央の高まりは、利用可能な部分と不可能な部分とを区分する目的で構築されたものであろう。

調査区西半西側では、この高まり部分付近以西に安定した微高地の形成が見られ、溝・土坑・ピットなど計338遺構が検出された。とくに第7b面では、土坑・ピットなどが集中し、土壌化層中にも土器・石器などが多量に含まれていた。この部分では明瞭な建物跡などは確認できなかったが、遺構の密集度や遺物の出土量などから考えて中期前半の居住域東端と考えられる。第7b面検出の掘立柱建物は、高まりよりやや東の若干低い部分から検出されたが、推定1間×4間のほぼ南北に長軸を持つ建物である。その周辺からは、獣骨や赤色顔料の塗られた土器が入った祭祀的な意味合いを持つ土坑633なども検出された。この部分は推定居住域の東側にあたり、集落縁辺部の様相として興味深い事例である。今回の調査では純粹に祭祀域としての認定はなされなかったが、集落内の祭祀域や廃棄場所を考える上で興味深い資料である。なお、近接する山賀遺跡では時期が前期中頃に遡るものの、掘立柱建物約20棟が検出されたが、微高地上での検出であり、本例とは性格を異にする可能性が高いと考えられる。弥生集落論が話題に上ることが多い昨今、弥生集落の構造的な側面を考えるの重要な資料である。

また、当遺跡西側に位置する小若江遺跡では、布留式土器と同時に弥生中期前半の土器が出土している。出土地点と考えられる箇所と今回の遺構密集域とは約300mの距離があり、その程度の居住域が展開していた可能性が考えられる。しかし、小若江遺跡における出土地点は遺構の様相が不明であり、やや規模は小さいものであるかもしれない。今回の調査で検出された遺構は、詳細の不明な小若江遺跡の同時期の集落域を考える重要な資料と考えられる。また、東側の山賀遺跡でも前期後半以降の居住域・生産域などが検出されその間に位置する当遺跡の調査成果は注目される。

東半で検出された水田域は集落東辺に位置する生産域と考えられる。その多くは明瞭な畦畔がほとんど検出されなかったが、いずれの時期も生産域の西縁辺に近い部分と考えられる。なお、第9面で検出された水田畦畔は、数点の木製品が出土したのみで時期を明確にしえないが、当遺跡付近の利用開始時期を示す貴重な遺構である。この段階には西側の微高地は形成以前であり、この水田は遺跡東側の山賀遺跡で検出された前期後半以降の居住域・生産域などとの関連が考えられる。なお、調査区西側に微高地が形成された以降も同様な場所に生産域が見られることから、山賀遺跡と今回の居住域および小若江遺跡との関係の深さが想定される。

このように今回の調査では、西側の小若江遺跡と東側の山賀遺跡との間を繋ぐ様相を若干明らかにしえたといえる。さらに大きくは、河内平野遺跡群の集落様相の一例として、概ねⅡ様式に収まる時期の様相を提示できたといえる。

最後に各遺構面・層の時期的な問題についてであるが、地形的・層位的に見ると、第6層・第7層は近接しているが、第7層・第8層間はやや分厚い自然堆積層を挟み一定の時期差を考えた状況であ

る。また第8層・第9層間は、数段階に及ぶ湿地性堆積物層・分厚い洪水堆積物層が見られることから一定の時間を経て造営されたものと考えられる。各遺構面・層の時期は、第6層は大きく見てⅡ様式～Ⅲ-1様式段階の遺物を含み、第7層でほぼⅡ様式、第8層が若干のⅠ様式を含む可能性もあるが、概ねⅡ様式初頭と推定される。ただし、出土遺物からはⅡ様式内の細かい時期差を明らかにすることはできなかった。なおこれを補足する材料として、あくまでも肉眼による観察だが、各遺構面・層出土の石器の石材もサヌカイトは二上山産であり、石庖丁は凝灰岩が使用されていないことから、すべて中期に収まると考えられる。第9層は先述のように時期を決定する資料に欠けているため判断を留保したいが、第8面以前ということで弥生時代前期末～中期初頭と推定される。また第10面以下の各面は、縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての河内潟の湖岸線が後退、水位低下の結果として河内潟がヨシ原で覆われて形成された黒色土壌化層上面と考えられる。当遺跡では第10層・第11層の2層の黒色土壌化層が確認された。今回の調査では遺物も出土しておらず時期を明確にはしえないが、こうした土壌化層の形成時期は、河内平野の各遺跡でも確認されている。

<参考文献> (50音順、敬称略)

安芸穂子2000「掘り出された人形」江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』吉川弘文館／市川秀之1987「西ノ辻遺跡出土の中世木器」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ』大阪府教育委員会／芋本隆裕1979『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』東大阪市遺跡保護調査会／岩田重雄1994「中国・朝鮮・日本の長さ標準－(第1報)300B.C.－A.D.1700－」『計量史研究』16 日本計量史学会／江浦洋・長原 亘1995「近世水田面にみる災害復旧－池島・福万寺遺跡における近世水災害と水田復旧－」『大阪文化財研究』第8号(財)大阪文化財センター／亀井 聡・溝川陽子・堀 智美1996『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター／京嶋 覚1992a「第三章 調査の結果 第1節 長原遺跡西地区の調査」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ』(財)大阪市文化財協会／京嶋 覚1992b「第二章 調査の結果 第2節 長原遺跡西地区の調査 2 各層出土の遺物 iv) 瓦埴」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ』(財)大阪市文化財協会／黒板勝美・國史大系編集會1972a『続日本紀 前編』吉川弘文館／黒板勝美・國史大系編集會1972b『続日本後紀』吉川弘文館／古閑正浩2000「7. 考察 [2] 軒瓦からみた礎石建物SB43の造営過程とその背景」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第20集 大山崎町教育委員会／小林正史・柳瀬昭彦2002「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』13 日本考古学協会／駒井 正明2000a「奈良・平安時代の小阪合遺跡とその周辺」『小阪合遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集(財)大阪府文化財調査研究センター／駒井正明2000b「大阪府下出土奈良・平安時代文字資料集成」『小阪合遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集(財)大阪府文化財調査研究センター／佐伯有清1985『新撰姓氏録の研究 本文篇』吉川弘文館／佐藤甲二2000「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題－仙台市域の調査事例をとおして」日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集 第1集『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会／佐藤 隆2000「第三章 調査の結果 第2節 難波宮期の遺構と遺物」『難波宮址の研究 第11』(財)大阪市文化財協会／白神典之1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会／神道体系編纂會編・田中卓校注1981「神道体系 古典編6 新撰姓氏録」神道体系編纂會／竹内理三編1977『寧楽遺文中卷』(訂正五版)東京堂出版／竹内理三・山田英雄・平野邦雄1985『日本古代人名辞典』2・4 吉川弘文館／田中清美2000「第三章 長原遺跡西・西南地区の調査 第1節 95-14次調査」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告XV』(財)大阪市文化財協会／田辺昭三・原口正三・田中 琢・佐原 真1972『船橋Ⅱ』再版 平安学園考古学クラブ／奈良国立文化財研究所1991『平成宮発掘調査出土木簡概報(24)－二条大路木簡2－』／広瀬和雄1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館／広瀬雅信1992『萱振遺跡』大阪府教育委員会／藤沢真依ほか1980『瓜生堂』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター／本田奈都子1999『駒ヶ谷遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第41集(財)大阪府文化財調査研究センター／松田順一郎1996「山賀遺跡第9次発掘調査報告－調査地点の堆積環境の変化と耕作地遺構の形成－」『東大阪市文化財協会ニュース』vol.6.No.4(財)東大阪市文化財協会／松村隆文1983「第4章79-17区の調査」『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会／宮本長二郎2002「総柱建物」田中 琢・佐原 真ほか編『日本考古学辞典』三省堂／三好孝一・市本芳三1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告－第5次－』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第15集(財)大阪府文化財調査研究センター／山中 章2002「村で書く」国立歴史民俗博物館編『古代日本 文字のある風景』朝日新聞社／若林邦彦1998「第三章 調査の成果 第1節 96-1-1～5トレンチ」『船橋遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第29集(財)大阪府文化財調査研究センター

第6章 自然科学分析

今回の発掘調査では、考古学的な調査に加え、自然科学的な分析も行った。いずれも、調査中に得られた資料のうち、調査担当者の技量では分析できない資料について、当調査区における様相判断、復元をより明確にすべく、分析を依頼したものである。

第1節は、当センター保存室の山口誠治による、出土植物遺体についての同定、分析結果である。調査中、弥生時代の層序、遺構を中心に植物遺体が出土した。これらは、明らかに当時の環境や個別の遺構の性格を復元する上で、有用なデータといえる。特に、弥生時代中期前半土坑出土の炭化米は、水田耕作を暗示する資料であり興味深い。なお、同節中の表1は未掲載分資料の分析結果であり、本書に図面や写真が掲載されている分の同定結果は、表19に記してあるので注意されたい。

第2節は、財団法人大阪市文化財協会の池田 研氏による出土貝類の同定、分析結果である。調査においては、いずれも弥生時代中期前半の遺構、層序から、少ないながらも貝が14点出土した。分析の結果、生息していたものと廃棄されたものとに区分され、遺構の性格を考える上でも有用なデータをえることができた。また、貝廃棄パターンの一例を加えることもできた。

第3節は、大阪市立大学医学部第二解剖学教室の安部みき子氏による出土骨類の同定、分析結果である。小片ばかりであったものの、例えば土坑633から出土したイノシシ下顎骨などは、安直に「祭祀に伴う骨」という解釈以上の、イノシシを祭祀に使用する際の類例を具体的に加えることができたといえる。また、自然堆積層出土ながらも擦痕の見られる人骨が出土しており、その擦痕の起源は不明ながら、周辺において方形周溝墓などの墓域が存在する可能性も推定される。

第4節から第6節は、株式会社パレオ・ラボに委託分析されたものである。第5章で記したように、当調査区の東西において、検出される遺構の状況には差異が見られた。第5節の珪藻分析は、同一層と認識した土壌化層中に含まれる珪藻を分析することで、環境の差異を復元するためのデータをを得ることを目的に行った。結果としては、陸域環境・沼沢湿地環境・湿地環境という大きな範疇では、概ね発掘調査の結果から考えられた環境に符合するようなデータが得られたといえる。

第4節の花粉分析は、検出遺構から生産域と想定された部分の土壌化層を珪藻分析と併用して分析し、栽培種などを特定するようなデータをを得ることを目的に行った。結果として、十分な花粉化石が産出しなかった資料が多かったものの、弥生時代(中期前半)、古代、中世というような大きな時代区分におけるデータを供給できたといえる。結果として、一部遺構との整合性が見られない結果も見られたが、それ以外は、概ね整合性が見られた。しかし、このデータが周辺遺跡で行われたデータといかなる整合性を持つかの詳細については、未考察である。なお、珪藻分析と花粉分析は一部の資料番号が一致する。分析に供した資料番号と、今回の調査による層位・遺構との対応関係については表7を参照されたい。

第6節の年代測定は、当遺跡において弥生時代中期前半に比定される層序が複数見られ、これらの実年代を得ることで、同時期の実年代資料の一例を加えるべく行ったものである。いずれも類似する結果が得られ、良好な一例であると思われる。

以上の各分析結果について、整理において生かしきれなかった点は多々あるが、本報告書を利用する際の一助となれば幸いである。

第1節 新上小阪遺跡出土植物遺体について

山口誠治

1. はじめに

新上小阪遺跡から検出された植物遺体について報告する。同定分類した植物遺体は、以下の通りである。

[裸子植物]

1. マツ科 Pinaceae
2. スギ科 Taxodiaceae スギ *Cryptomeria japonica*
3. ヒノキ科 Cupressaceae ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*

[被子植物]

1. イネ科 Gramineae イネ (炭化米) *Oryza sativa*
2. ヤナギ科 Salicaceae ヤナギ属 *Salix* sp.
3. クルミ科 Juglandaceae クルミ属 *Juglans* sp.
4. ブナ科 Fagaceae コナラ属 *Quercus* sp.
アカガシ亜属 *Quercus (Cyclobalanopsis)* sp.
クリ *Castanea crenata*
5. ニレ科 Ulmaceae ケヤキ *Zelkova serrata*
ムクノキ *Aphananthe aspera*
6. クワ科 Moraceae ヤマグワ *Morus australis*
カナムグラ *Humulees japonicus*
7. タデ科 Moraceae タデ属 *Polygonum* sp.
8. ヒユ科 Amaranthaceae ヒユ属 *Amaranthus* sp.
9. バラ科 Rosaceae キイチゴ属 *Rubus* sp.
スモモ *Prunus salicina*
ウメ *Prunus mume*
10. マメ科 Leguminosae フジ属 *Wisteria* sp.
11. トチノキ科 Hippocastanaceae トチノキ *Aesculus turbinata*
11. ブドウ科 Vitaceae ブドウ属 *Vitis* sp.
ノブドウ属 *Ampelopsis* sp.
12. ツバキ科 Theaceae サカキ *Cleyera japonica*
13. スミレ科 Violaceae
14. アカバナ科 Onagraceae ヒシ *Trapa japonica*

遺構面	層名・遺構名	地区	樹種	備考	時期
第7b面	土坑632	A13-d2	サカキ	杭2	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633	A13-e2	ヒノキ	No.2木材	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633	A13-e2	スギ	No.11木片	弥生時代中期前半
第7b面	ピット757	A13-f4	アカガシ亜属	柱	弥生時代中期前半
第7b面	ピット796	A13-f4	アカガシ亜属	柱	弥生時代中期前半
第7b面	土坑658	A13-e3	ヒノキ	木板	弥生時代中期前半
	第7b層	A13-de3	アカガシ亜属	杭1	弥生時代中期前半
	第7b層	A13-de3	アカガシ亜属	杭2	弥生時代中期前半
	第7b層	A13-de3	サカキ	杭3	弥生時代中期前半

表2 新上小阪遺跡出土の種子・植物遺体

遺構面	層名・遺構名	地区	固定結果	時期
第4b面	土坑252	A12-c・d7	ヒョウタンの仲間15個、マクワウリの仲間22個、炭化米13個、ナス29個、ブドウ属2個、タデ属10個、ウメ核1個	古代(8・9世紀)
	第4b層	A12-c8	モモ核1個	古代(7世紀後半)
第5b面	土坑406	A12-d6	ヒョウタンの仲間1個	古墳時代前期後半
第7b面	土坑758	A13-f4	ヒョウタンの仲間1個、炭化米135個、シソ属1個、ナス属3個、タデ属1個、スミレ科1個、マクワウリの仲間1個、	弥生時代中期前半
第7b面	土坑706	A13-f4	炭化米1個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633 サンプル1	A13-e2	マクワウリの仲間28個、炭化米52個、シソ属1個、ブドウ属1個、トチノキ果皮片8個、スモモ核1個、カナムグラ1個、タデ属134個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633 サンプル2	A13-e2	マクワウリの仲間83個、トチノキ果皮片9個、ブドウ属1個、炭化米185個、バラ科トゲ1個、ヒョウタンの仲間1個、ノブドウ属1個、カナムグラ1個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633 サンプル3	A13-e2	タデ属1715個、マクワウリの仲間48個、ノブドウ属1個、炭化米8個、シソ属2個、フジ属越冬芽2個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633 サンプル4	A13-e2	マクワウリの仲間13個、炭化米11個、ナスビ属1個、ブドウ属1個、タデ属361個、ヒョウタンの仲間1個、マクワウリの仲間4個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633 サンプル5	A13-e2	ヒョウタンの仲間2個、タデ属3個、マクワウリの仲間8個、炭化米14個、ブドウ属2個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑633 サンプル6	A13-e2	マクワウリの仲間10個、炭化米4個、ヒョウタンの仲間1個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑657 焼土サンプル②	A13-e3	炭化米12個	弥生時代中期前半
第7b面	土坑657	A13-e3	炭化米10個	弥生時代中期前半
第7b面	溝629	A13-f3	マクワウリの仲間517個、炭化米83個、ブドウ属184個、カナムグラ53個、キイチゴ属4個、ヒユ属50個、タデ属77個、シソ属10個、クリ果皮片4個、アカガシ亜属殻斗1個、果皮片43個、ヒシ果皮片3個、バラ科トゲ1個	弥生時代中期前半
第7b面		A13-f3	マクワウリの仲間70個、ブドウ属17個、炭化米11個、タデ属73個	弥生時代中期前半
第8b面	土坑867 (土坑底面)	A13-d2	ヒシ26個	弥生時代中期前半
第9面		A13-c1	クルミ属核1個	弥生時代前期～ 中期前半

2. まとめ

今回の植物遺体は、食用になる植物イネ、モモ、スモモ、ウメ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間、ブドウ属などが出土したことにより、食料残渣と考えられる。これらの植物遺体調査結果から局地的な古環境推定を試みたので、箇条書きで次に示す。

- (1) 炭化米が多く水田耕作の存在を明らかにしている。
- (2) 遺跡付近に水田とは別に畑作地の可能性も高い。
- (3) その畑では栽培植物のウメ、マクワウリ、ヒョウタン、ナス、シソなどが植えられていたと考えている。
- (4) 樹種鑑定の結果、針葉樹のマツ、スギ、ヒノキに広葉樹のヤマグワなどから近くに森林でもありそうな結果を得た。これらの木材は河川の護岸の杭や井戸枠材に使用される木材で建築材の転用と考えている。
ヤマグワに関しては、遺跡付近に植栽されたものではないかと考えている。
- (5) 弥生時代の自然環境の変化は森林が減少し、大きく気候が湿潤化したことにより湿地化が進んだと推定できる。
- (6) 水生植物及び好湿性植物であるイネ、タデ類、ヒシなどが多量に検出されていることが、今回の植物遺体同定結果の特徴である。

なお、新上小阪遺跡は河内平野南部、旧大和川の一河流域（現寝屋川）に位置し、この河川のほとりに弥生時代～古墳時代にかけて水田を作り付近に集落を形成したと考えられる。鳥島も検出されていることなど、水田耕作と畑作も営まれていたと推測できる。以上の点から人間活動が盛んであったこと、食料供給としての水田耕作と農作物の生産が盛んであったことをこれらの植物遺体が物語っている。

<参考文献>

1. 植物分類に関しては、以下の文献に従っている。
大井次三郎・北川政夫1983『新日本植物誌 顕花編』至文堂、東京
2. 樹種鑑定の参考文献
鳥地 謙・伊東隆夫1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版

第2節 新上小阪遺跡出土の貝類

池田 研（財団法人 大阪市文化財協会）

貝類は総数14点が出土している。資料の残存状態は悪く、土ごと取り上げたものが多い。同定の結果は表3・4に示した通りである。尚、同定作業には現生標本と図鑑〔吉良哲明1954、波部忠重・奥谷喬司1983〕を利用しており、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏より貴重なご助言を賜った。

表3 出土貝類種名一覧

腹足綱 Gastropoda

バイ *Babyronia japonica* (Reeve)

二枚貝綱 Bivalvia

ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roeding)

オキシジミ *Cyclina orientalis* Sowerby

シジミガイ科 Corbiculidae gen. et sp. indet.

オトコタテボシガイ *Inversidens reiniana* (Kobelt)

ドブガイ *Anodonta woodiana lauta* (v. Martens)

イシガイ科 Unionidae gen. et sp. indet.

出土資料は鹹水性の資料（ハマグリ・オキシジミ・バイ）と淡水性の資料（ドブガイ・オトコタテボシガイ）からなる。シジミガイ科の資料は淡水性のセタシジミあるいは汽水性のヤマトシジミであるとみられる。

遺構別にみると、土坑867出土資料の大半は鹹水性で、食用にされた後、廃棄されたものであると考えられる。一方、落ち込み882・884や深掘トレンチではドブガイを主体としたイシガイ科の淡水性資料のみからなるが、ドブガイ2点の左右殻が合わさったまま出土していることが注目される。古墳時代に属する大阪市瓜破遺跡資料でも、本資料と同様に土ごと採取を行った結果、ドブガイでは約7割、イシガイでは約9割が左右殻が合わさったまま出土していることが判明し、食用にされたものではないと考えられている〔池田研2002〕。土坑867との貝種構成の差異からみても、これらの淡水性資料は人為的に捨てられたものではなく、周辺に棲息していたものの死骸である可能性がある。

また、出土した貝類の量が最も多い土坑867でも5点にとどまることは、畿内第Ⅱ様式期を境として、集中して投棄する方法から分散して投棄する方法へと変化するとみられる河内潟・湖周辺における弥生時代から古墳時代にかけての貝廃棄パターン〔池田研2001〕に合致したものと理解できよう。

<引用・参考文献>

池田研2001、「森小路遺跡出土の動物遺存体」：大阪市文化財協会編『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp. 201-207

池田研2002、「貝類」：大阪市文化財協会編『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp. 60-62

吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社

波部忠重・奥谷喬司1983、『学研生物図鑑 貝Ⅱ』学習研究社

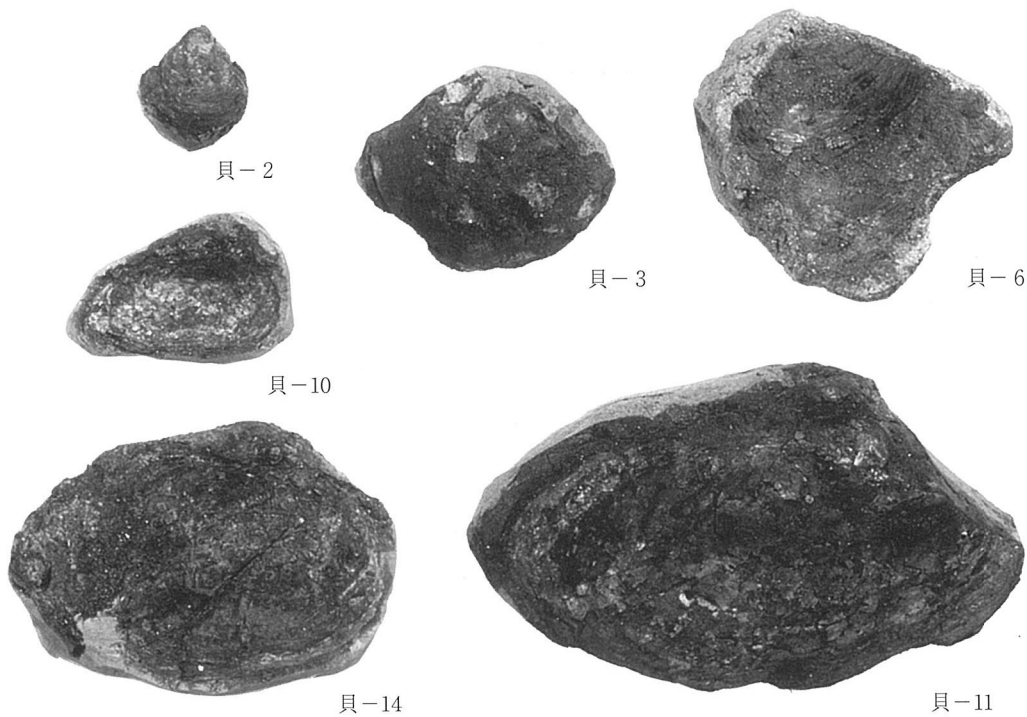


写真134 新上小阪遺跡出土貝類

資料番号	面	遺構・層位	地区	貝種	殻高 (mm)	殻長 (mm)	備考	時期
貝-1	第7面	高まり547～ 第7b層	A12-c8・9	不明	-	-		弥生時代中期前半
貝-2	第7面	溝559	A12-d9・10	シジミガイ科	25	24		弥生時代中期前半
貝-3		第7層	A13-cd1・2	ハマグリ	43	56		弥生時代中期前半
貝-4	第7b面	土坑633	A13-e2	バイ	-	15	蓋	弥生時代中期前半
貝-5	第8b面	土坑867	A13-d2	ハマグリ	44	残存47		弥生時代中期前半
貝-6	第8b面	土坑867	A13-d2	オキシジミ	残存62	残存61	最大級個体	弥生時代中期前半
貝-7	第8b面	土坑867	A13-d2	オキシジミ	64	残存62	最大級個体	弥生時代中期前半
貝-8	第8b面	土坑867	A13-d2	ドブガイ?	-	-		弥生時代中期前半
貝-9	第8b面	土坑867	A13-d2	不明(二枚貝)	-	-	鹹水性	弥生時代中期前半
貝-10	第8b層	落ち込み	A13-cd1・2	オトコタテボシガイ	27	45		弥生時代前期～ 中期前半
貝-11	第9面	落ち込み	A13-fg3・4	ドブガイ	78	119	殻合	弥生時代前期～ 中期前半
貝-12	第8b層	深堀トレンチ	A13-e3	イシガイ科	-	-	ドブガイ?	弥生時代前期～ 中期前半
貝-13	第8b層	深堀トレンチ	A13-e3	イシガイ科	-	-	ドブガイ?	弥生時代前期～ 中期前半
貝-14	第8b層	深堀トレンチ	A13-e3	ドブガイ	65	81	殻合	弥生時代前期～ 中期前半

表4 新上小阪遺跡出土貝類一覧

第3節 新上小阪遺跡から出土した人骨と動物遺体

安部みき子（大阪市立大学）

東大阪市新上小阪に位置する新上小阪遺跡から出土した人骨と動物遺体は主に弥生時代中期前半のものである。出土状況は極めて悪く、出土量も少ない。

1. 人骨（骨-29）

出土した人骨は右大腿骨で、両骨端は破損し殿筋粗面下方から約20cmの骨幹部が遺存していた。保存状況は骨の緻密質と海綿質が分離し、脆かったためパラロイドで保存処理をした。処置後も骨の歪みが大きいため、骨幹の計測はできなかったが、骨幹の太さは成人のものと思われる。

出土部位から人骨の性別や年齢は推測できなかったが、骨幹の表面に浅い切り傷が多数見られた。この傷の原因は不明である。

2. 動物遺体

出土した動物遺体は約30片で、9世紀頃のウマの臼歯の破片以外は全て弥生時代中期前半のものである。種まで同定できたものは、イノシシとウマのみであった。

弥生時代中期前半に出土した哺乳類で同定できた種はイノシシのみで、右下顎骨、左右不明の遊離犬歯、右肩甲骨、左第3手根骨、左第4手根骨、左脛骨である。

このうち、右下顎骨、左第3手根骨、左第4手根骨、左脛骨は第7 b面土坑633より出土した。下顎骨は臼歯が釘植した状態で出土し、4才以上のものと思われ、遊離上顎犬歯は形態から成体のメスと推測される。年齢の推測できたものは左脛骨で、両骨端未癒合であり骨幹長から約6ヶ月の幼体と推測される。同じ第7 b面土坑633から出土した左第3と左第4手根骨は同一個体と思われる。

保存が悪かったものは、第8 b面検出土坑867より出土したイノシシの右肩甲骨で、肩甲棘が遺存している。イノシシの最小個体数は、幼体と4歳程度の成体の骨が出土していることより2体以上である。その他の出土骨の種は同定できなかったが、椎体の一部や肋骨片、長骨片が出土している。

哺乳類以外では小型のカエルと軟骨魚類の椎体が数片出土しているが、種の同定はできなかった。また、第7 b面土坑657、第7 b層から焼かれた骨も数片出土している。

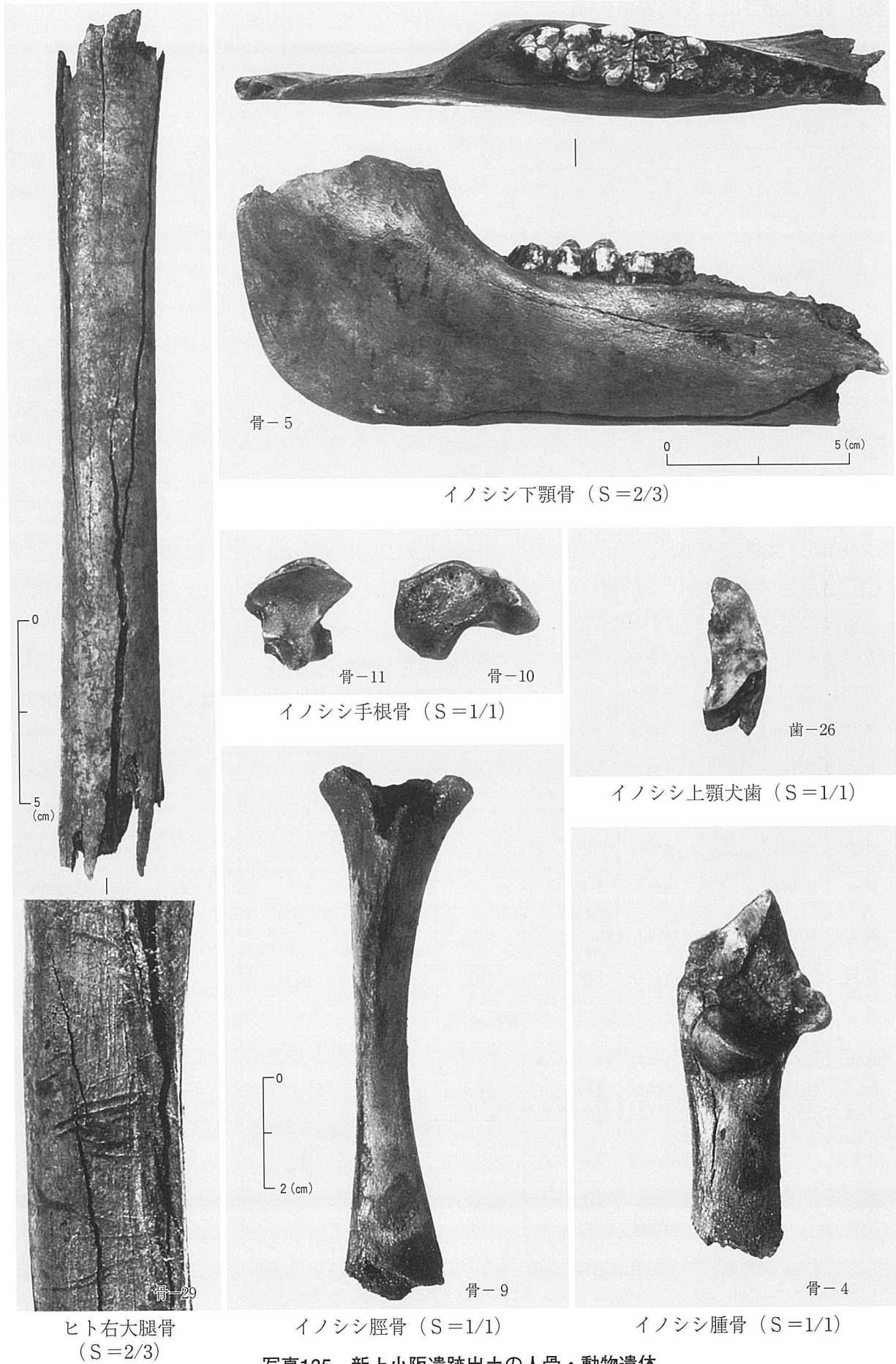


写真135 新上小阪遺跡出土の人骨・動物遺体

表5 新小阪遺跡出土人骨・動物骨・歯

資料番号	遺構面	層・遺構	地区	種	出土部位		残存状態	計測値(mm)	時期
					左右	部位名			
歯-1		第4層	A13-f・g 3・4	ウマ	-	臼歯片	エナメル質のみ		8~12世紀
骨-2	第6~7面	高まり523・ 547・553	A13-d・ e3	シカor イノシシ	-	長骨の遊 離骨端			弥生時代中期前半
歯-3		第7層	A13-f3	歯	-	種不明	細片		弥生時代中期前半
骨-4		第7層	A13-c・d 1・2	イノシシ	右	踵骨	踵骨隆起未癒合	踵骨(踵骨隆起 なし)67.92	弥生時代中期前半
骨-5	第7b面	土坑633	A13-e2	イノシシ	右	下顎骨	下顎体(Pm2~M3の歯槽) と下顎枝(筋突起と関節突 起破損)残存、歯はPm4、M2、 M3釘植、M1は歯根のみ残存、 M3は咬耗していることより4才 以上	大白歯列長 65.99、下顎体 高(M3後縁) 47.33、下顎体 高(Pm4-M1間) 39.14	弥生時代中期前半
骨-6	第7b面	土坑633	A13-e2	不明	-	胸骨			弥生時代中期前半
骨-7	第7b面	土坑633	A13-e2	不明	-	椎骨の棘 突起片			弥生時代中期前半
骨-8	第7b面	土坑633	A13-e2	不明	-	肋骨			弥生時代中期前半
骨-9	第7b面	土坑633	A13-e2	イノシシ	左	脛骨	両骨端未癒合 約6ヶ月	骨幹長 97.46	弥生時代中期前半
骨-10	第7b面	土坑633 サンプル4・5・6	A13-e2	イノシシ	左	第3手根骨 (有頭骨)			弥生時代中期前半
骨-11	第7b面	土坑633 サンプル4・5・6	A13-e2	イノシシ	左	第4手根骨 (有鈎骨)			弥生時代中期前半
骨-12	第7b面	土坑633 サンプル4・5・6	A13-e2	不明	-	骨片			弥生時代中期前半
骨-13	第7b面	土坑633 サンプル2	A13-e2	シカor イノシシ	-	胸椎	椎弓		弥生時代中期前半
骨-14	第7b面	土坑633 サンプル2	A13-e2	カエル	-	不明			弥生時代中期前半
骨-15	第7b面	土坑633 サンプル3	A13-e2	不明	-	長骨片	4点		弥生時代中期前半
骨-16	第7b面	土坑633 サンプル5	A13-e2	不明	-	不明	細片		弥生時代中期前半
骨-17	第7b面	土坑633 サンプル1	A13-e2	骨?	-	-			弥生時代中期前半
骨-18	第7b面	土坑633 サンプル3	A13-e2	不明	-	-			弥生時代中期前半
骨-19	第7b面	土坑633 サンプル4	A13-e2	カエル (小型)	-	-			弥生時代中期前半
骨-20	第7b面	土坑633 サンプル5	A13-e2	サカナ?	-	-			弥生時代中期前半
骨-21	第7b面	土坑633 サンプル5	A13-e2	不明	-	-			弥生時代中期前半
骨-22	第7b面	土坑758	A13-f4	軟骨魚 類(エイ か?)	-	椎体			弥生時代中期前半
骨-23	第7b面	土坑758	A13-f4	不明	-	骨片			弥生時代中期前半
骨-24	第7b面	土坑657	A13-e3	不明	-	骨片	焼けている		弥生時代中期前半
骨-25	第7b面	土坑657	A13-e3	サカナ	-	椎骨・頭骨多	大と小2種以上		弥生時代中期前半
歯-26	第7b面	土坑657	A13-e3	イノシシ	不明	メスの上 顎犬歯			弥生時代中期前半
骨-27	第7b面	土坑794	A13-f4	不明	-	肋骨片			弥生時代中期前半
骨-28	第8b面	土坑867	A13-d2	イノシシ	右	肩甲骨	肩甲棘残存		弥生時代中期前半
骨-29		第7b層	A12-d10	ヒト	右	大腿骨	両骨端破損 小転子下部の殿 筋粗面から約20cm残存。 解体痕のような浅い傷が多数 認められる。		弥生時代中期前半
骨-30		第7b層	A13-f4	不明	-	長骨片	焼けている		弥生時代中期前半
骨-31		第7b層	A13-f4	不明	-	骨片			弥生時代中期前半